

国文学研究資料館蔵田安德川家旧蔵入木道伝書 解題

(世尊寺家篇)

金子 馨・海野 圭介

*キーワード

入木道伝書・書論・世尊寺家・田安德川家・森尹祥

国文学研究資料館所蔵田安德川家資料のうち、田藩文庫に所蔵される入木道伝書の解題を報告する。田安德川家は、八代將軍徳川吉宗（一六八四～一七五一）の二男宗武（一七一五～一七七二）を祖とする家で、一橋家・清水家とともに御三卿と呼ばれる家系の一つである。宗武は、江戸時代中期の歌人・国学者で、舞楽・有職故実を中心に古典研究に力を注いだようである。田藩文庫に所蔵される資料については、国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究』に資料の略目録が掲載され、とりわけ文庫形成・伝来については、田安德川家の末裔である松方冬子氏によって詳しく述べられている^①。

入木道伝書とは、書に関する口伝などを書きとどめたものである。「能書の家」によってその多くが編まれたと目され、家記として有職故実的な要素が強い。内容は様々で、書式や心得などを記した理論書と色紙形や散らし書きなどの雛形（見本帳や手控え）とに大きく分類される。森

尹祥（一七四〇～九八）の著した『入木道伝書目録』には、世尊寺家・持明院家に伝来したとされる入木道伝書（書論）の書目が百八十点近くも記載されているが、その多くが所在不明とされてきた。しかし、新井榮蔵氏や鈴木淳氏の研究成果によって、田安德川家にまとまって伝来していることが明らかとされる^②。これらは江戸時代中期以降に書写された資料で、当該目録に記載される書目と概ね一致するため、当時の伝授資料の内容が詳らかとなる。田安德川家（田藩文庫）には一千点あまりの資料が伝来するが、そのうち入木道伝書は二百点近くに及ぶ。薬師寺に伝来する資料約二百六十点（入木道伝書だけでなく、歌書類も含み混む^③）との連関が期待されよう。

田安德川家旧蔵の約二百点の入木道伝書は、世尊寺家五十点・持明院家百十七点・その他三十九点に大別される。『田藩文庫目録と研究』に於いて、資料の略書誌は掲載されるが、入木道伝書は書名だけで内容が不

明なものも少なくない。そこで、本稿では世尊家の伝書として伝わる五十点を取り上げ、資料の解題と一部影印を掲載する。持明院家、およびその他に分類される資料については別稿に譲りたい。書誌情報も一部重複するが、本稿末尾に一覧の形で再掲した。同内容で書名の異なる資料も多いことから不完全ながら、「日本古典籍総合目録データベース」⁴⁾などを参照して、可能な限り伝本の所在状況や研究状況なども反映した。

さて、世尊寺家は代々宮廷の書き役として従事し、「能書の家」とされる。藤原行成（九七二〜一〇二七）を祖として、十七代行季（一四七六〜一五三二）まで脈々と続き、その書は世尊寺流と呼ばれた。世尊寺家は行季で断絶するが、その後は、持明院基春（一四五三〜一五三五）・基規（一四九二〜一五五一）・基孝（一五二〇〜一六一一）へと入木道が相伝される。当該資料群もその様相をうかがい知るものであるが、経朝（一二一五〜一二七六）著『心底砂』や行房（？〜一三三七）著『右筆条々』などが含まれていない点においては注意が必要であろう。また、世尊寺流の書法は、行房・行尹に入木道を伝授された尊円法親王を祖とする青蓮院流などにも受け継がれ、多くの入木道伝書が編まれたことがわかる。なお、当該資料群には森矩章・尹祥親子が関与していることが奥書よりうかがえ、書写年次の推定も含めて今後の課題は多い。

なお、今回は雛形の類いを海野が担当し、理論書の類いを金子が担当した。力量不足による過誤も多いと思うが、ご批評を乞う次第である。

（金子）

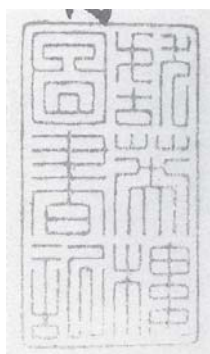
【凡例】

(1) 【解題】として書名（よみ）、伝書の内容、表紙、料紙、外題・内題、奥書を記し、末尾に備考として伝本所在状況や翻刻・伝本研究などの現状を示した。また、後掲の「田安徳川家旧蔵入木道伝書一覧」には、書名（よみ）の他、編著者、装丁、数量、寸法、丁数、印記、請求番号、目録番号などの書誌情報を集約した。

(2) 本解題を作成するにあたって、奥書等可能な限り原本に忠実に翻刻するようにつとめたが、読みやすさへの配慮から次のような処置をとった。

- ア. 平仮名・片仮名は、現行の字体に統一した。
- イ. 繰り返し記号（踊り字）は、平仮名は「々」、漢字は「々々」、それぞれ二字以上の繰り返しは「〜」で統一した。
- ウ. 奥書など長文の場合は、私に句読点を付したものもある。

【主要蔵書印】



C 「献英楼図書記」



A 「田藩文庫」



B 「田安府芸台印」

【解題】

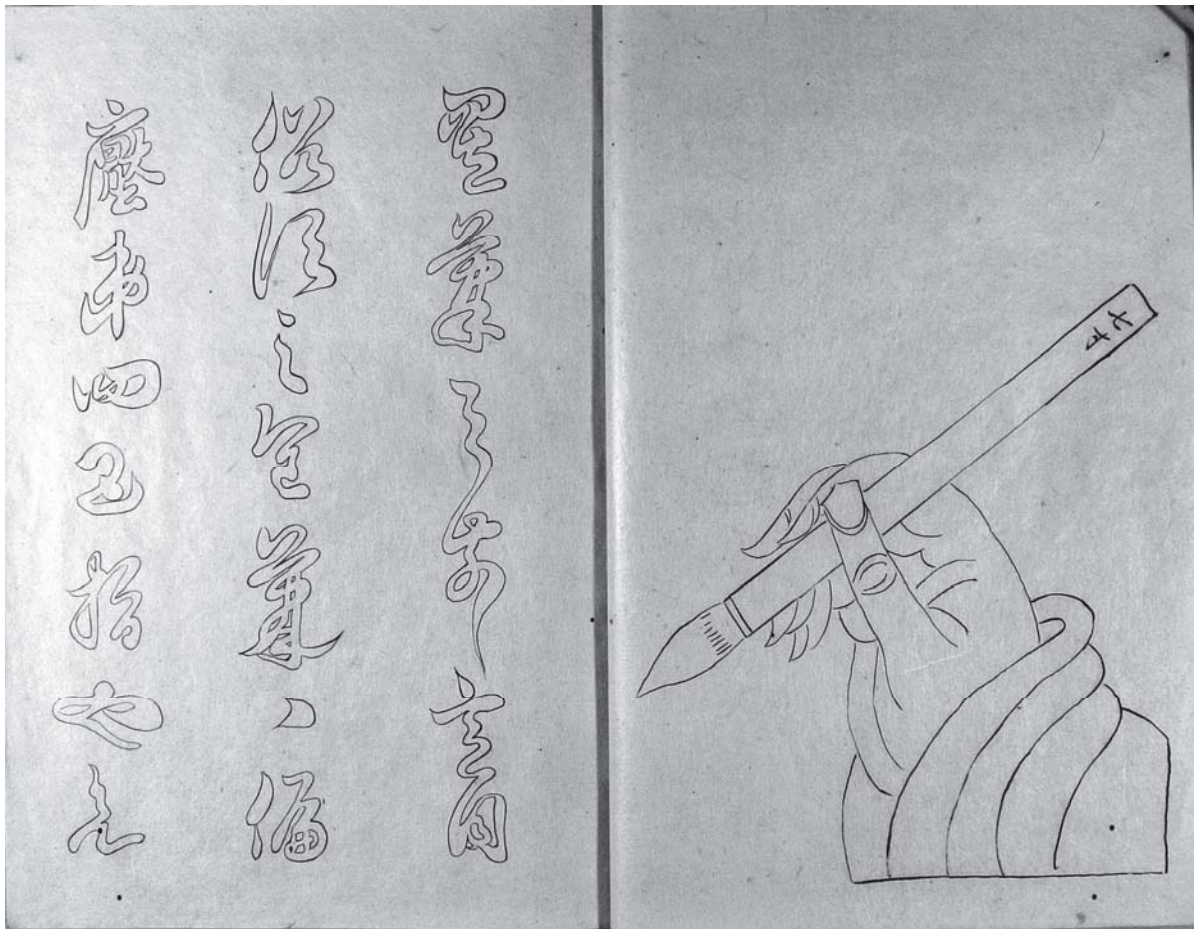
1 十二点画（じゅうにてんかく）

世尊寺一

三筆の一人、弘法大師・空海（七七四〜八三五）に仮託した大師流の
入木道伝書。

写本一冊。表紙は薄墨色地に水玉文の紙表紙、見返しは本文共紙、料
紙は薄様。外題は、「十二点畫 世尊寺一」と表紙左肩に直書きされる。内
題は、「十二点畫 世尊寺一」（扉題）と記される。内容は、巻首に「執筆
法」の図（白描）を載せ、「執筆法」について記したものを謄写（双鈎）
したもの。「執筆法」の後に「使筆法」として十二種の点画について記し、
その後に筆（穂の長さや筆管の長さ）について記す。巻尾の奥書には「右
弘法大師從韓方明相承之三代之法口傳尤多委細者于口傳之書祥也 中納
言藤原基孝記之」と記され、持明院基孝が弘法大師の口伝として書写し
ている。

「十二点画」と題する伝本は少なく、現時点において四天王寺大学恩頼
堂文庫（一三九八）に所蔵されるばかりである。しかし、「執筆法」「使
筆法」や「弘法大師執筆使筆法」などとして蔵する場合も確認され、今
後の精査が必要といえる。また、藤木敦直（二五八二〜一六四九）の「使
筆法」や屋代弘賢（一七五八〜一八四二）の「高野大師真蹟書訣」など
との関連も検討する必要がある。

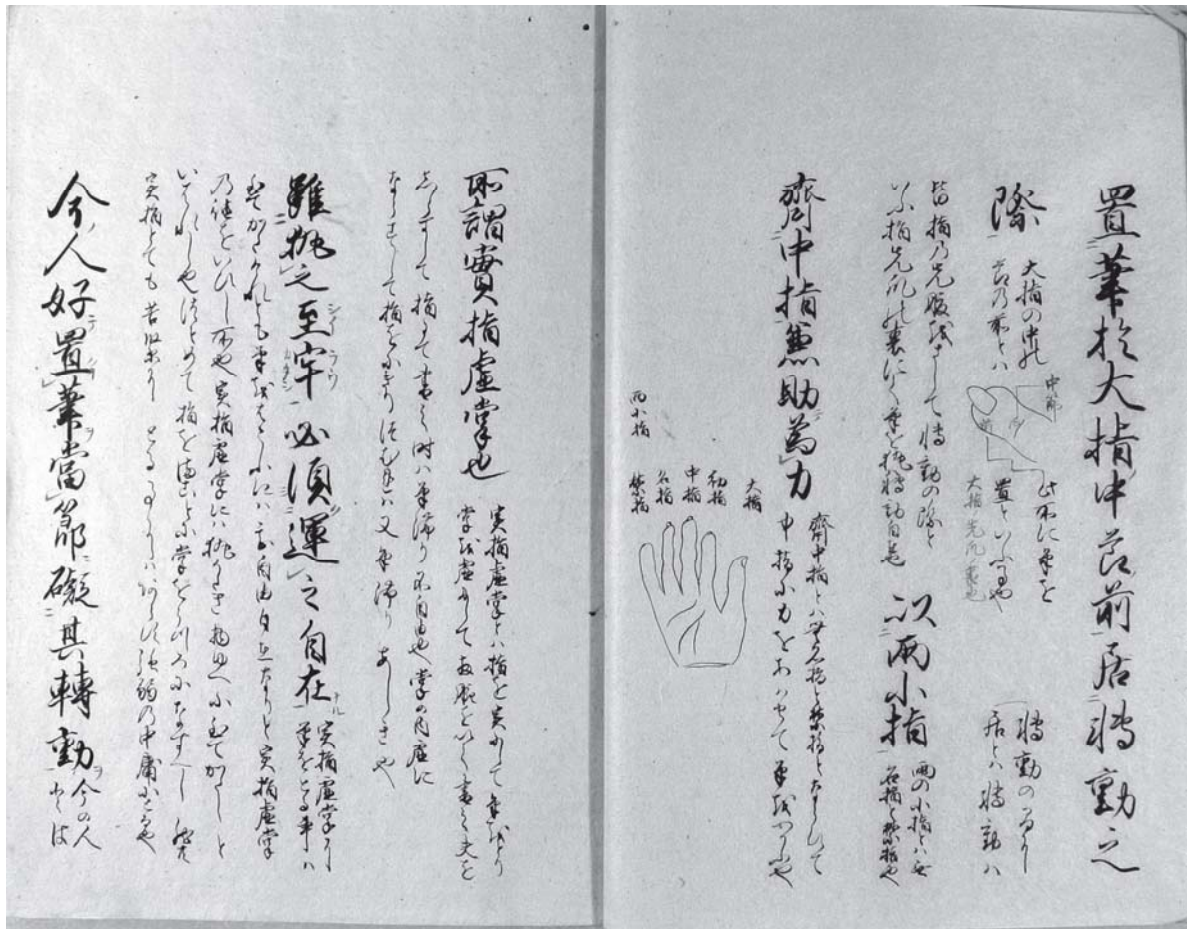


弘法大師・空海に仮託した入木道伝書「十二点画」の注釈書。漢文体で記される『十二点画』に、返り点や送り仮名を朱筆で記し、解釈を付したものの。

写本一冊。表紙は薄墨色地に水玉文の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「十二点畫抄」世尊寺二と表紙左肩に直書きされる。

内題は、「十二點畫抄」世尊寺二（扉題）とあるほか、「執筆法」「使筆法」「十二筆勢秘訣」と確認される。巻首に「高野大師在唐傳來執筆法」、及び「権大納言行成卿家傳／前大納言基定卿御傳授」と記される。「入木道之事格別之因懇望誓約之上口傳之旨趣令相傳者也 寛永壬午年二月吉辰基定ノ森九郎兵衛」と、寛永十九年（一六四二）持明院基定（一六〇七〜一六六七）の本奥書が記される。それを後に、森尹祥（一七四〇〜一七九八）の高祖父・矩章（九郎兵衛、生没年未詳）が書写したと思しい。なお、「行成卿家傳」とするが、後代的な内容が含まれており、三蹟の一人・藤原行成（九七二〜一〇二七）の関与は薄く、後世に仮託されたものと考えられる。基定が世尊寺家の家伝として相伝している様子が窺える。

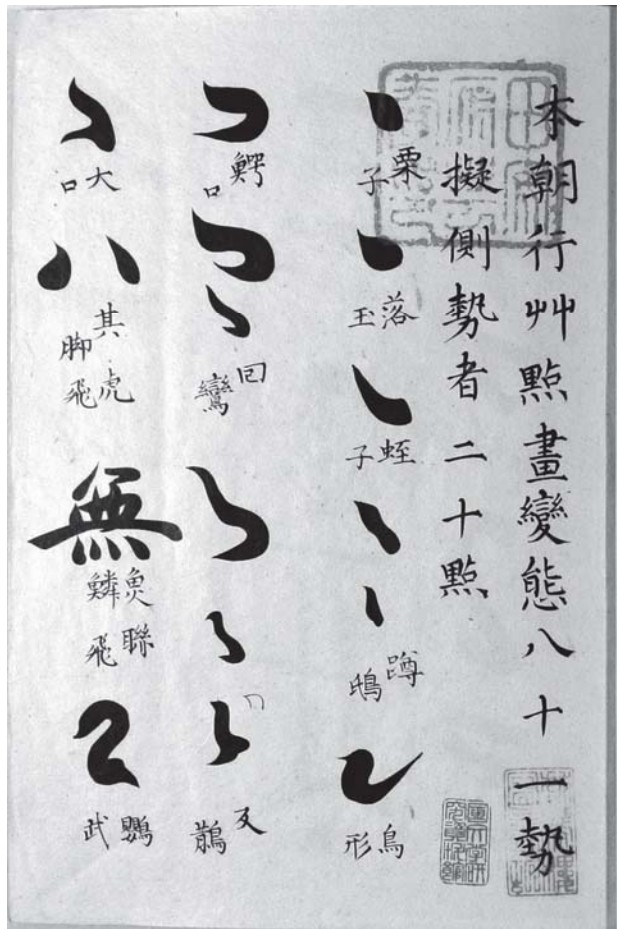
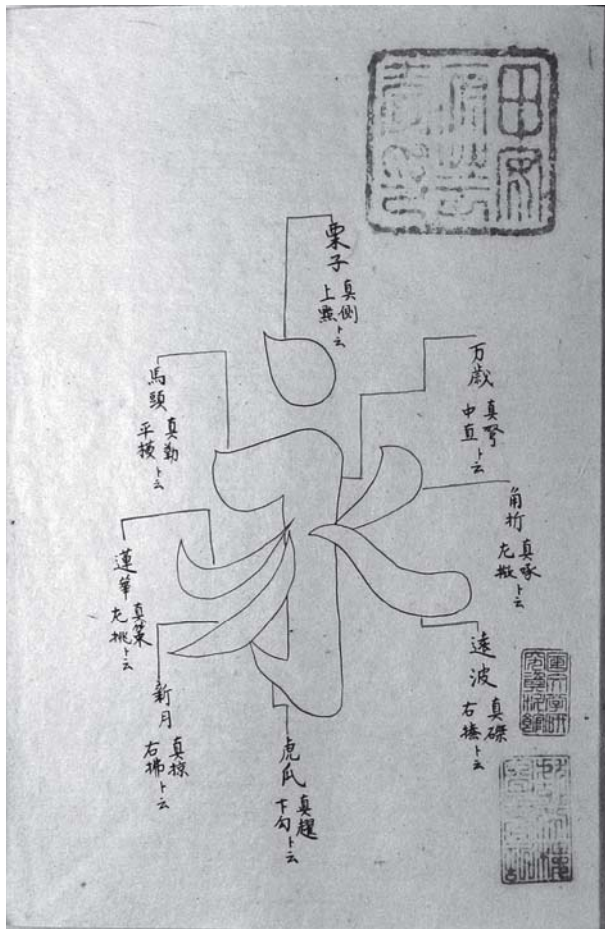
伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を参照する限りにおいて、孤本と思しい。



3 筆法八十一勢（ひつぽうはちじゅういちぜい） 世尊寺三・四

空海に仮託した入木道伝書。世尊寺三（以下①）は、「本朝行艸點畫變態八十一勢」として「擬側勢者二十點」、「擬勸勢者十一畫」、「擬努勢者十豎畫」、「擬趨勢者十一挑」、「擬策勢者十一畫」、「擬掠勢者五撇」、「擬啄勢者七短撇」、「擬磔勢者六捺」に分け、八十一種の点画の造形を示したもので、奥書には道風・佐理・行成らより伝来した旨を記す。世尊寺四（以下②）は、①の具体例を空海・道風・佐理・行成より集字し、籠字（双鉤）で示しながら、簡単な説明を付したものである。

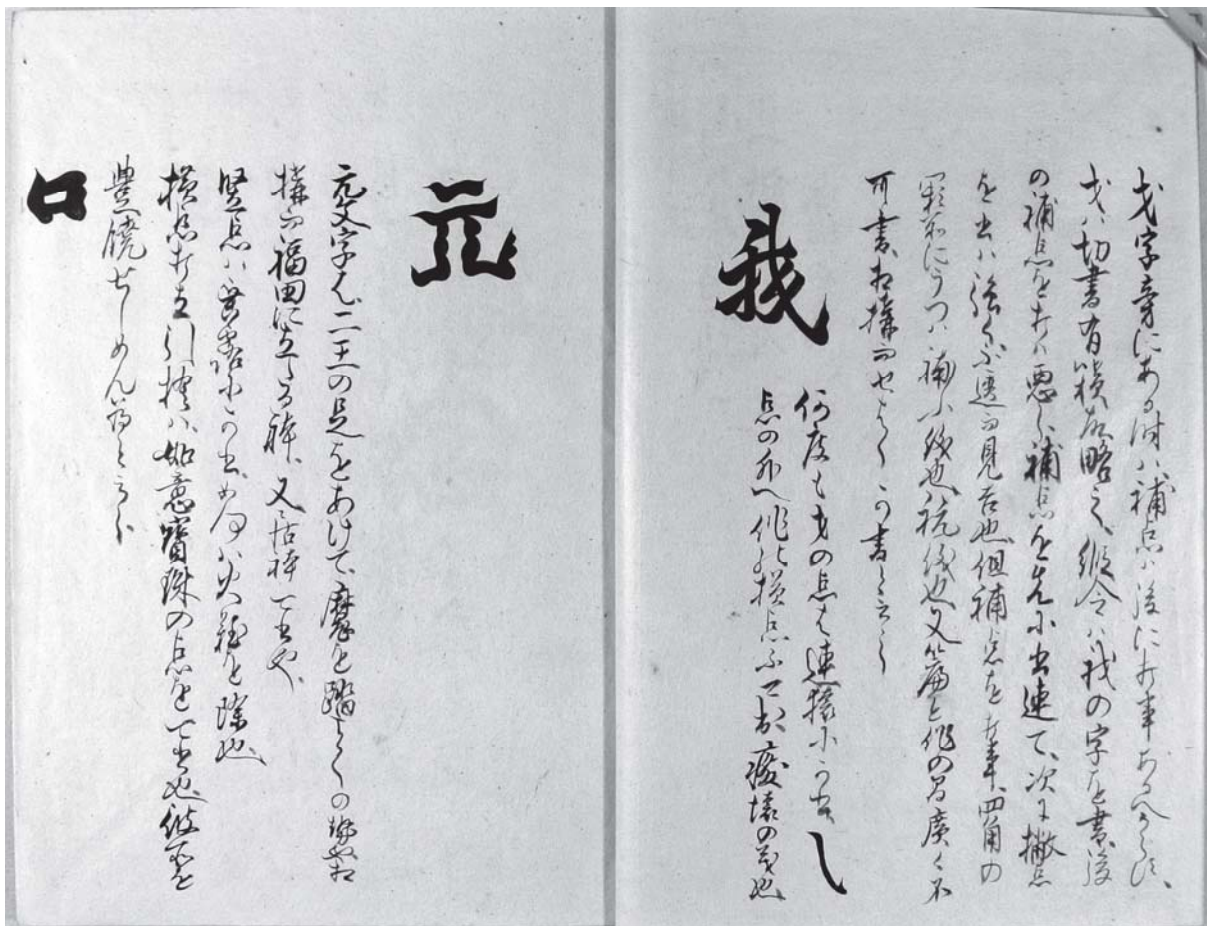
写本二冊。表紙は墨黒地に水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「筆法八十一勢」世尊寺三（四）と直書きされる。内題は「筆法八十一勢」世尊寺三（四）（扉題）とそれぞれ記される。本文は①漢文体、②漢字片仮名交じり文。①「右八十一勢空海肇賦心於八方取法四時象形於万類寓物而作数勢之點畫道風佐理行成傳之爾来流世公武貴賤學之隨事轉用各有趣矣」、②「右八十一勢者高野大師之真作而入木道之血脈也其筆使自然之妙書集之而令學于家童者也（花押）」應永二年乙亥十月仲旬從世尊寺家令相傳畢 藤実秋「右一卷元和二年弥生十日於持明院基定卿 御館潔齋之上奉成傳授兒曹等此一卷曾而莫出于窓外云尔 寛文二年十月三日 於武陽櫻田徹士森九郎兵衛源重章記之」尹祥曰筆道抄之中玉置半助門人 嶋田平助作以八十一勢文字取合等于自作之趣書之曾平助非作不可惑云々 源公風」とそれぞれ本奥書が記される。②の奥書より、一条実秋（一二八四〜一四二〇）、持明院基定、森矩章、尹祥、尹祥の子、公風の手を經ていることが窺える。伝本は他に薬師寺に伝存する。



4 前中書王御抄（さきのちゆうしよおうみしよ） 世尊寺五

兼明親王（九一四〜九八七）に仮託した入木道伝書で、内容は「諸額之次第」に始まり、「神願札書事」「縁起書事」などと続き、「十二筆法之事」で終わる。世尊寺行尹の口伝を記した『入木道抄』（世尊寺二十七）と近似する項目も散見されるほか、大師流の伝書にも近い点もある。室町時代に成立したとされる『麒麟抄』に一部収載される。

写本一冊。表紙は墨黒地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「前中書王御抄 世尊寺 五」と直書きされる。内題は「前中書王御抄 世尊寺 五」（扉題）と記されるほか、巻首に「入木道抄」（巻首題）と記される。本文は漢字平仮名交じり文。巻尾に、「右十二意其事短而其心甚深唐國張公旭所授顔真卿也 天慶九年八月日親王兼明誌之」「右一卷者前中書王御抄也猥不可出篇中者也寛弘八年正月九日藤原行成記之」「此一巻者拾遺納言行成卿末孫從行高卿傳之猥不可外覽者也 文明九年二月日諫議大夫藤基春 權中納言藤基規 中納言藤原基孝 左近中将藤原基久 二品良恕親王」「正保二年三月日基定 森九郎兵衛へ」と四種の本奥書が記される。奥書より世尊寺行高（一四二〜一七八）が文明九年（一四七七）に持明院基春に伝授し、以後基規、基孝、基久、良恕親王（一五七四〜一六四三）を経て、正保二年（一六四五）に基定より森矩章に相伝されたもの。天慶九年（九四六）の兼明親王、寛弘八年（一〇一一）の行成の本奥書は偽奥書と考えるのが妥当であろう。伝本は少なく、薬師寺蔵「前中書御抄」（A12）と同書か。

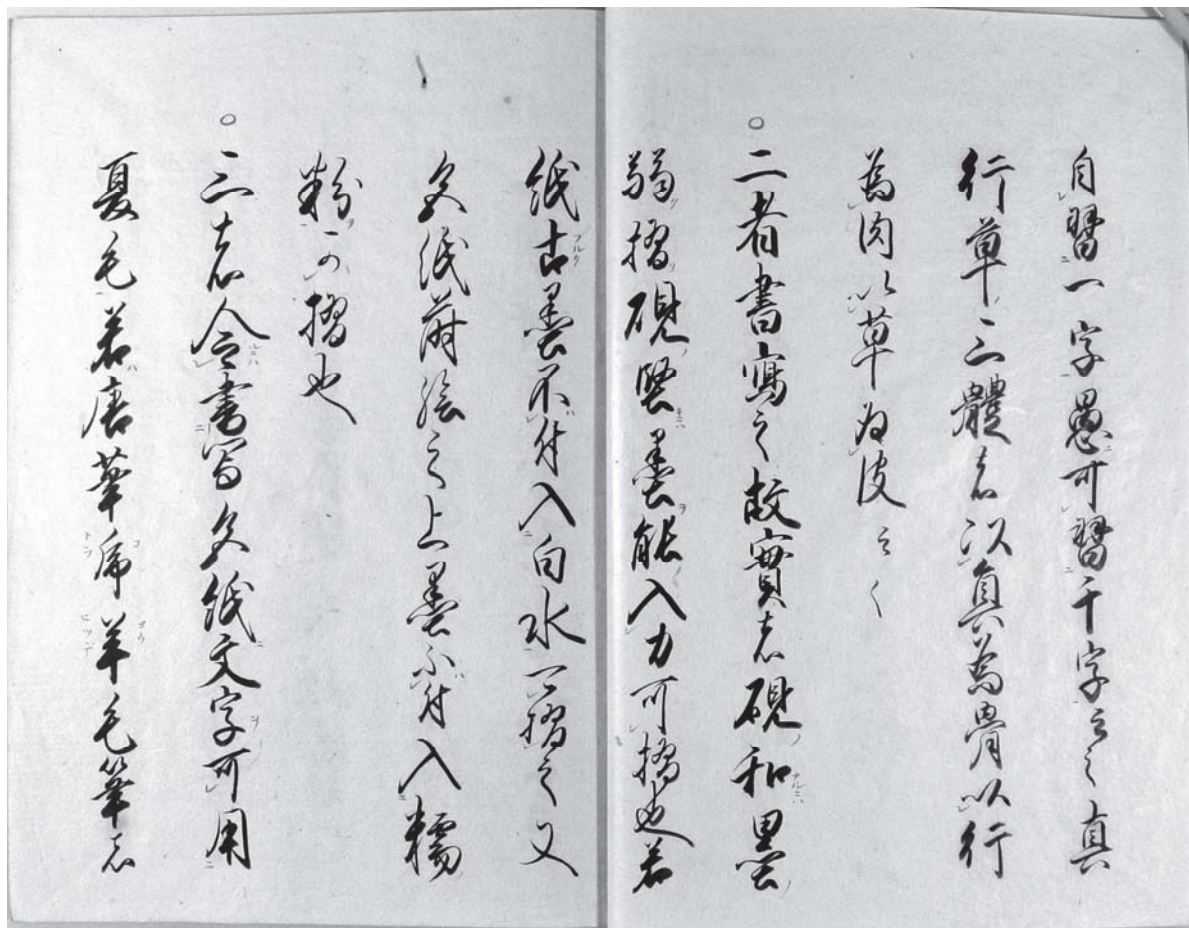


藤原佐理（九四四〜九九八）に仮託された入木道伝書。巻尾の行成の本奥書も偽奥書か。内容は、手習いの心得や筆・墨など道具の扱い方、墨の濃淡や墨継ぎについて言及しており、「得手習能書有三種之品」「書寫之故實」「令書写色紙文字可用夏毛」「墨付本書雙紙者」「不謂親疎上下手本書者」「筆墨所持之墨者」「書雙紙歌者」「消息之法可奉貴人状者」の八箇条を漢文体で記す。

写本一冊。表紙は墨黒地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「昭陽殿八曲 世尊寺六」と直書きされる。

内題は「昭陽殿八曲 世尊寺六」（扉題）と記されるほか、巻首に「昭陽殿八曲 照者作昭為得」（巻首題）と記される。また、「依後中書王令藤原佐理書」と記される。巻尾に、「右八曲如斯深可思之 拾遺行成」と本奥書が記される。返り点や送り仮名、訓などが朱筆で加筆される。

伝本は少なく、現状、田藩文庫以外には薬師寺（昭陽殿八曲 D10）に確認されるばかりである。



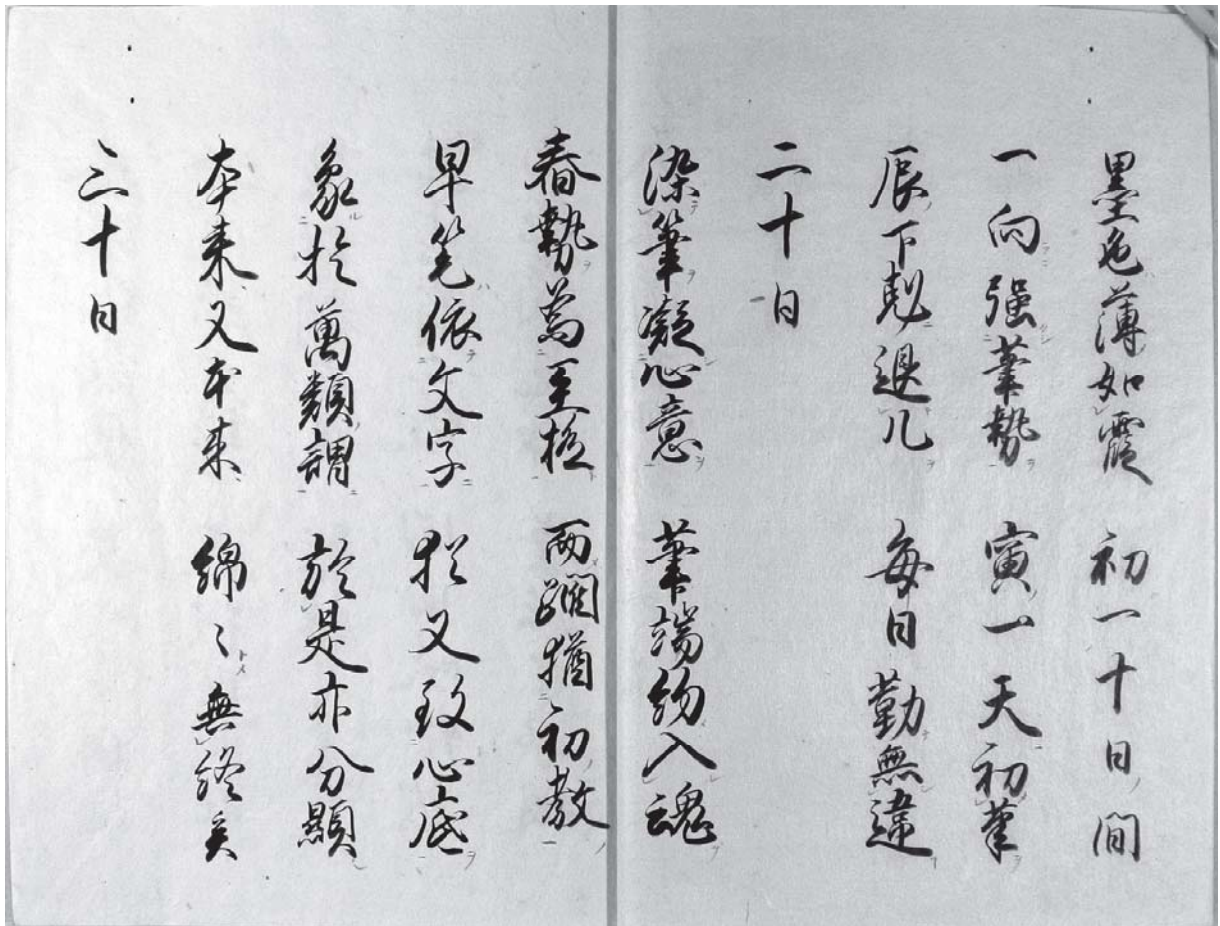
6 入木道百日執行法（じゅぼくどうひやくにちしつぎようほう）

世尊寺七

藤原行成に仮託した入木道伝書。百日を十日ごとに分けて書（入木道）の学び方を記したものだ。座り方や筆の持ち方から始まり、最初の十日間は筆勢を強くすることに重きをおき、反復練習する旨が記されている。

写本一冊。表紙は薄山吹色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「入木道百日執行法^{世尊寺七}」と直書きされる。内題は「入木道百日執行法^{世尊寺七}」（扉題）と記されるほか、巻首に「入木道百日執行之法」（巻首題）とある。本文は漢文体で記され、返り点や送り仮名、訓が朱筆で加筆される。巻尾に、「寛仁三年五月六日従二位行権大納言侍従藤原朝臣行成」と本奥書が記され、寛仁三年（一一一九）に行成が四十八歳の時に記したものとされるが、疑わしい。

伝本は少なく、田藩文庫の他には、二松學舎大学（竹清文庫）・センチリー文化財団（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫寄託）・葉師寺（C16）などに所蔵が確認される。



7 入木初学式三十六法（じゅぼくしよがくしきさんじゅうろつぽう）

世尊寺八・九

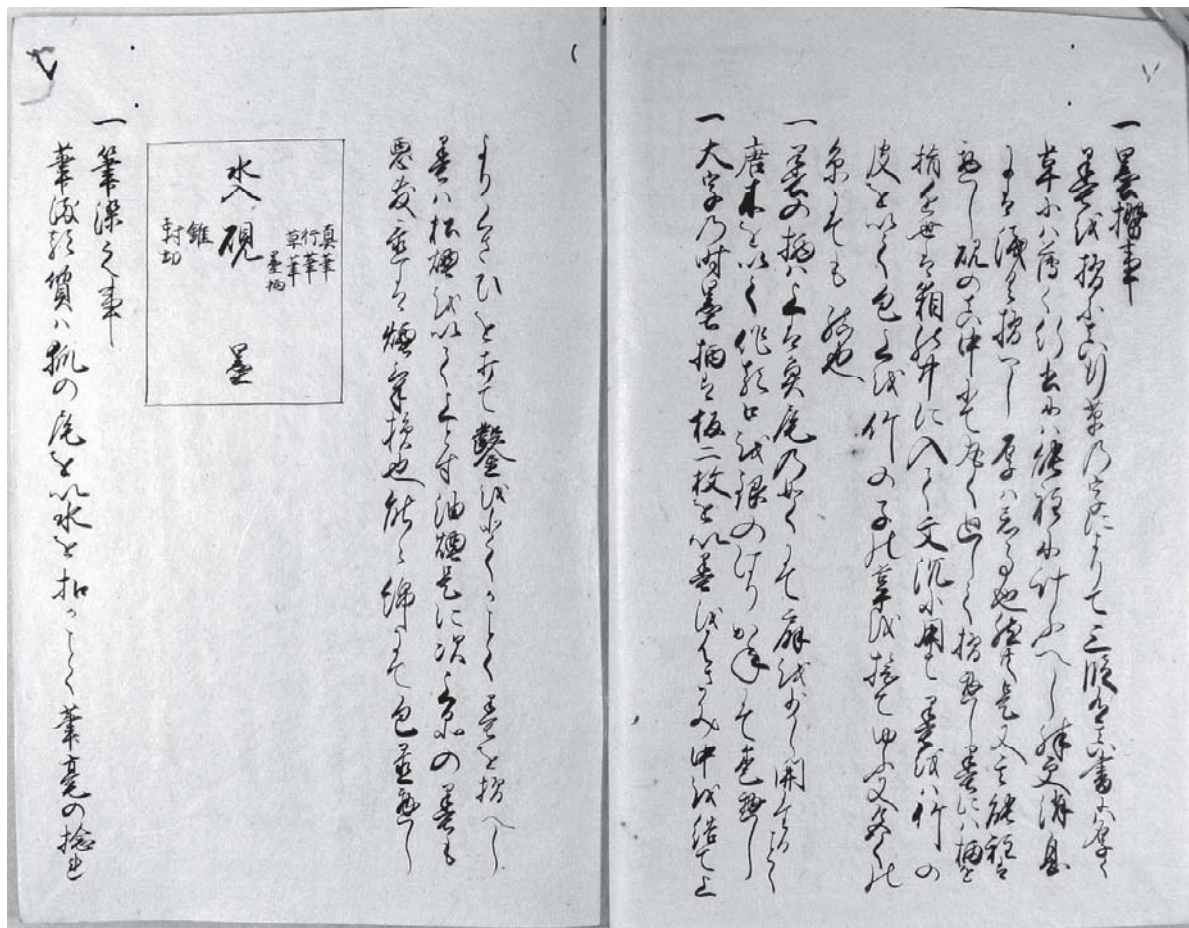
世尊寺行尹の書写した入木道伝書を持明院基春が書写したもの。前半は「入木初学式」（世尊寺八）、後半は「入木道之事」と題して「三十六法」（世尊寺九）を収載する。

「入木初学式」は、手本事・硯之事・墨摺事に始まり、筆染之事、執筆事、手本写習事、紙當之事、三賢筆跡之事などについて言及している。

「入木道之事」は、「入木」について空海や王羲之の逸話より始まり、初学には三十六点の法を学ぶべしとしている。弘法大師真書四点之法、小野道風十四点之法、参議佐理卿八点之法、大納言行成卿十点之法、計三十六点（点画）の造形を籠字で示し、「右三十六點之法行草用之而自在可走筆也」と結んでいる。末尾に「大納言行成卿假名之法」を載せる。

写本一冊。表紙は薄山吹色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「入木初学式／三十六法」^{世尊寺 八九}と直書きされる。内題は「入木初学式／三十六法」^{世尊寺 八九}（扉題）と記されるほか、巻首に「入木初学式」と、六丁表に「入木道之事」とある。本文は漢字平仮名交じり文。巻尾に、「右世尊寺行尹卿以自筆之書写之 永正二年六月廿三日 持明院前参議基春」と本奥書が記される。

『入木初学式』の伝本は宮内庁書陵部や薬師寺（C14）などに、『入木道之事』の伝本は宮内庁書陵部や四天王寺大学恩頼堂文庫などにそれぞれ所蔵される。



大師流の点画について言及した入木道伝書。「三十六法」(世尊寺九)の注釈書的な伝書。多くが図解で示すが、豎針・臥針・糸点・半月から始まる三十六種の点画について、具体例(各点画が用いられている漢字)を示しながら口伝された内容を記している。「三十六点之法口傳」のほかに、「仮名之法」を収める。「三十六法」が項目だけを列記するのに対して、捨結・直結・延曲・幽玄・直納・捨移・移捨について実例を示して説明している。

写本一冊。表紙は薄山吹色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「三十六法口傳^{世尊寺十}」と直書きされる。内題は「三十六法口傳^{世尊寺十}(扉題)」と記されるほか、巻首に「三十六点之法口傳」(巻首題)とある。本文は漢字片仮名交じり文。「右三十六点并仮名之法无執心之輩努々勿傳之矣 享祿二年正月日 諫議大夫基春」右三十六法口傳依繁勝令止出於門人子孫々々 明和八年秋九月二日清書之 源尹祥」と二種の本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥するかぎり孤本と思しい。



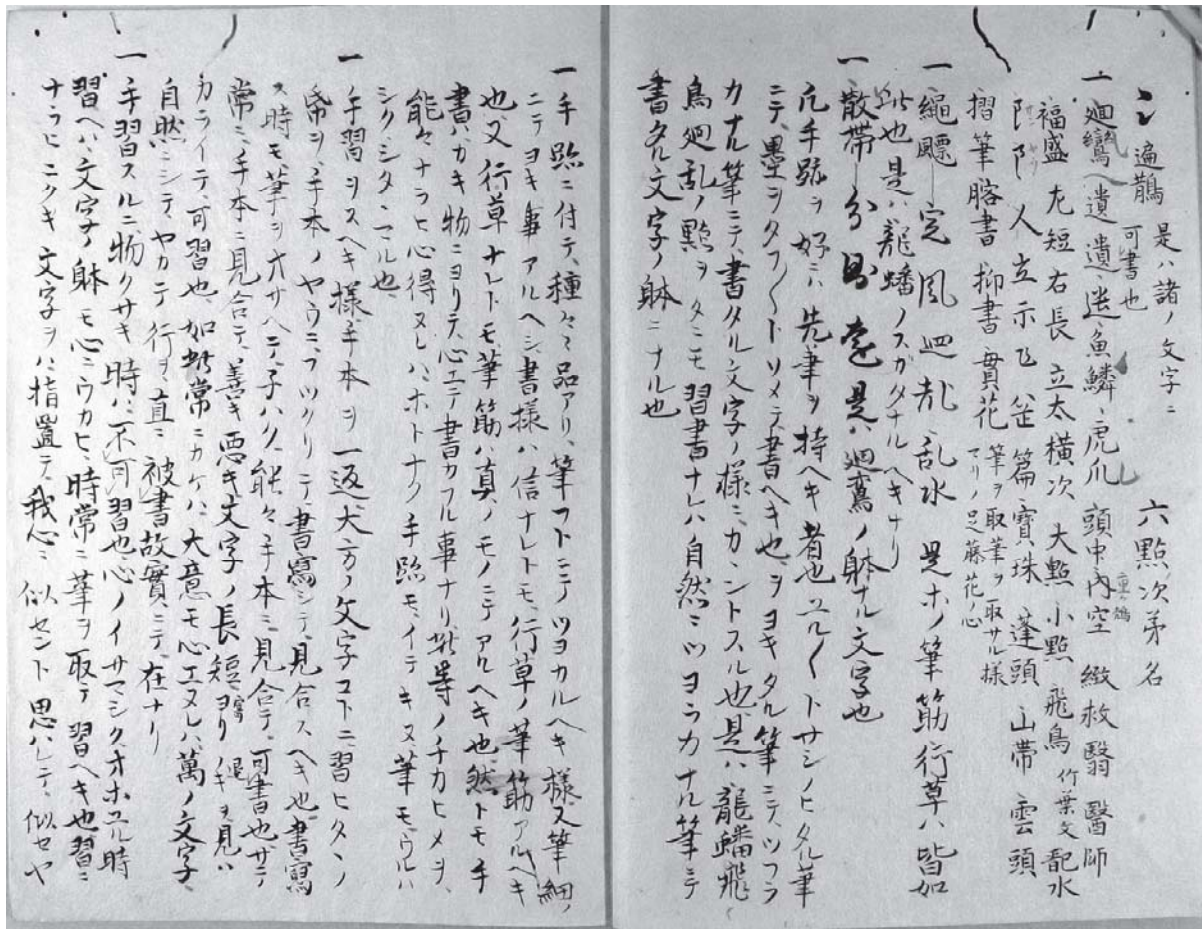
9 世尊寺殿口伝(せそんじどのくでん)

世尊寺十一

世尊寺行高(一四一二〜一四七八)の記した入木道伝書を持明院基春が書写したもの。『手習口伝』(世尊寺十三)の増補版と思しい。『手習口伝』の冒頭に記される内容によつて、高野大師(空海)による「魚養口伝」なるものが、藤原教長(一一〇九〜一一八〇?)の目を経て、世尊寺家に伝来したとされる。朝野魚養(生没年不詳)の口伝か否かは定かではないが、教長の口伝『才葉抄』との関連性は指摘できよう。

写本一冊。表紙は薄山吹色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「世尊寺殿口伝^{手習}十一」と直書きされる。内題は「世尊寺殿家傳 十一(扉題)」と記されるほか、巻首に「一、手習口傳」とある。本文は漢字片仮名交じり文。「此冊ケ条者故世尊寺行高卿以自筆寫之彼本則所持也類本之為一帖奥ニ寫置者也 大永六年^{丙戌}八月五日今日進發旅行也 急假間落字多端歟 藤(花押)」「右手習

篇目集者世尊寺侍従行季筆跡也^予所望之處写與之者也是者類本又人にも為写遣者也又此奥ニ注付事入木之道奥儀七ヶ条大事是也相傳之分随思出注置者也此外条々事者別ニ注付畢自余事者執心之人ニ先中間候共輒此奥書付候事於子孫可成心得者歟七ヶ条之事也自然端々之事淺深用捨懇望之方^江可申之旨師匠許之上者聊可成其覚悟也」「右一帖者世尊寺侍従行季模写之尤入木道之亀鏡呼可謂鴻寶者歟可禁外見而已 永正二年冬十月日参議藤末葉(花押)」と本奥書が記される。伝本は少なく、薬師寺「世尊寺家傳」(D 37)と同書か。金子⁵⁾に翻刻がある。



遍鵲 是ハ諸ノ文字ニ可書也

六點次弟名

一 廻鷲(遺遺) 迷魚鱗、虎爪 頭中内空 綴救翳 醫師

福盛 尤短右長 立太横次 大點 小點 飛鳥 竹葉文 配水 摺筆 啓書 抑書 貫花 筆ヲ取筆ヲ取ナル様

一 繩懸 定風 廻札 乱水 是ホノ筆筋行草ハ皆如

一 散帶 分 是 廻鷲ノ躰ナル文字也

凡手跡ヲ好ハ先筆ヲ持ヘキ者也^{ユル}トサシノヒタル筆ニテ墨ヲタフ^トトソメテ書ヘキ也ヲヨキタル筆ニテツラカナル筆ニテ書タル文字ノ様ニカ、ントスル也其ハ龍端飛鳥廻乱ノ點ヲタニモ習書ナレハ自然ニツヨクナル筆ニテ書タル文字ノ躰ニナル也

一 手跡ニ付テ種々ノ品アリ、筆ヲトミ^ニツヨカルヘキ様又筆細ニテヨキ事アルヘシ書様ハ信ナレトモ行草ノ筆筋アルヘキ也又行草ナレトモ筆筋ハ真ノモノニテアルヘキ也然トモキ書ハカキ物ニヨリ天心ニテ書カフル事ナリ故等ノチカヒメヲ能クナラヒ心得ヌレハホトナク手跡モイテキヌ筆モウルハシクシタ、マル也

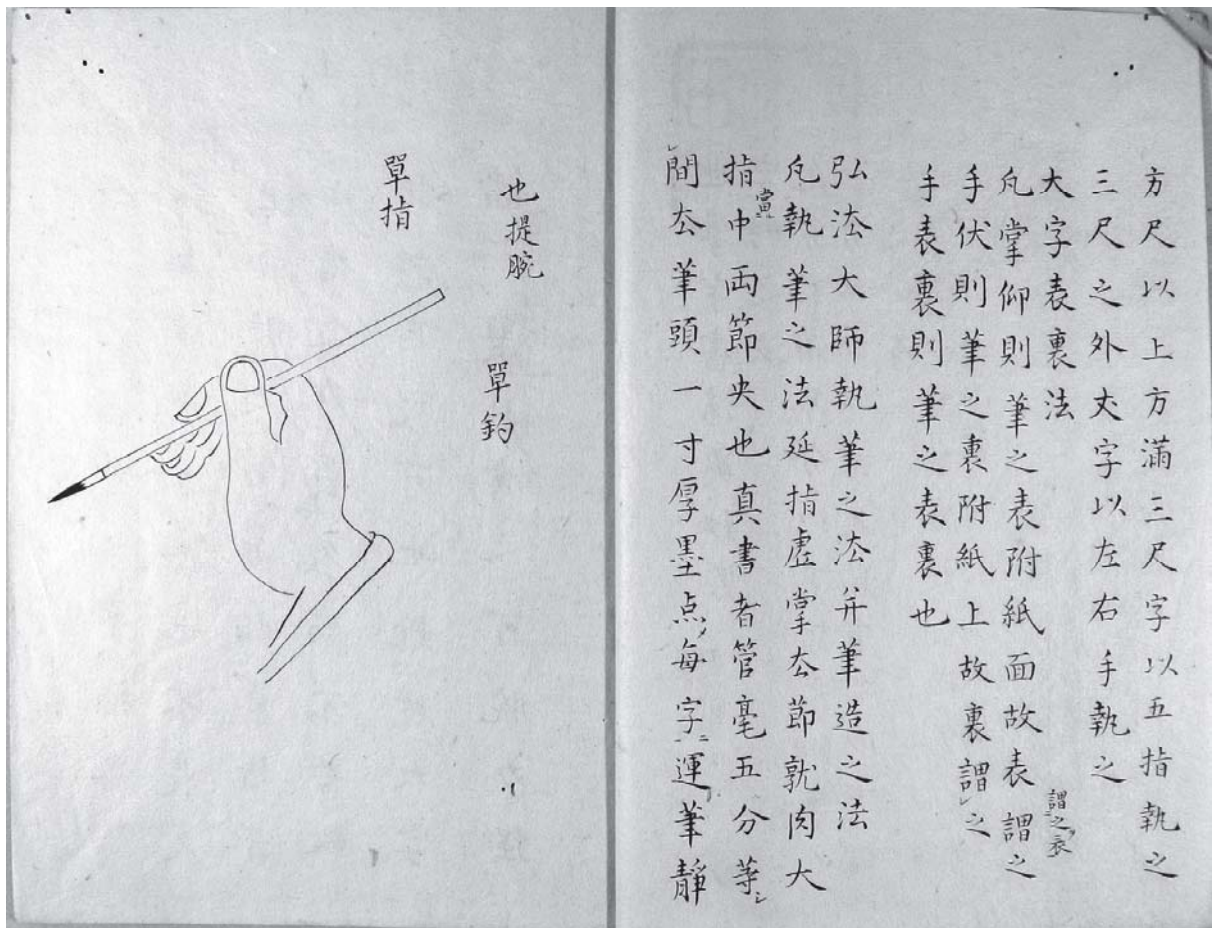
一 手習ヲスヘキ様本本ヲ一返大方ノ文字ヲコトニ習ヒタ、ノ常ヲ、手本ノヤリニフツクリテ書寫シテ見合スヘキ也書寫ス時モ筆ヲサハシテ子ハク能ク手本ニ見合テ、可書也サテ常ニ手本ニ見合テ、善キ悪キ文字ノ長短端々見合ハカライテ、可習也如常ニカケハ大意モ心エヌレハ萬ノ文字ヲ自然ニシテヤカテ行テ直ニ被書故實ニテ在ナリ

一 手習スルニ物クサキ時ハ不可習也心ノイサミクオホニル時習ハハ文字ヲ躰モ心ニウカヒ、時常ニ筆ヲ取テ習ヘキ也習ニナラヒニクキ文字ヲハ指置テ我心ニ似セント思ハレテ、似セヤ

藤原行成に仮託された入木道伝書。内題に「世尊寺書法奥秘書」とあることから、世尊寺を名乗る八代目・行能藤原行能（一一八〇〜？）以降の成立と考えられる。内容は、字形之法・大字執筆之法を載せる。大字執筆之法では、弘法大師・空海の執筆法・造筆法を引く他、三蹟の道風・佐理・行成の筆法（点画の表現）についても図解を交えて説明している。

写本一冊。表紙は薄山吹色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「奥秘書世尊寺 十二」と直書きされる。内題は「奥秘書世尊寺 十二（扉題）」と記されるほか、巻首に「世尊寺書法奥秘書」（巻首題）とある。本文は漢文体。巻尾に、「大納言行成卿奥秘以此書入木道之為極秘也 前参議藤原基春」此一卷者入木道之血脈也於當家深秘之書也 権大納言藤原基定」と二種の本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥するかぎり孤本とらしい。薬師寺に所蔵される「奥秘書世尊寺書法奥秘書」（D43）と同書か。



11 手習口伝(てならいくでん)

世尊寺十三

世尊寺行高の記した入木道伝書を持明院基春が書写したもの。『手習口伝』の冒頭に記される内容によつて、高野大師(空海)による「魚養口伝」なるものが、藤原教長の目を経て、世尊寺家に伝来したとされる。

朝野魚養の口伝か否かは定かではないが、教長の口伝『才葉抄』との関連性は指摘できる。また、世尊寺家や持明院家の伝授内容の享受の様相がうかがえる資料のひとつと言えよう。

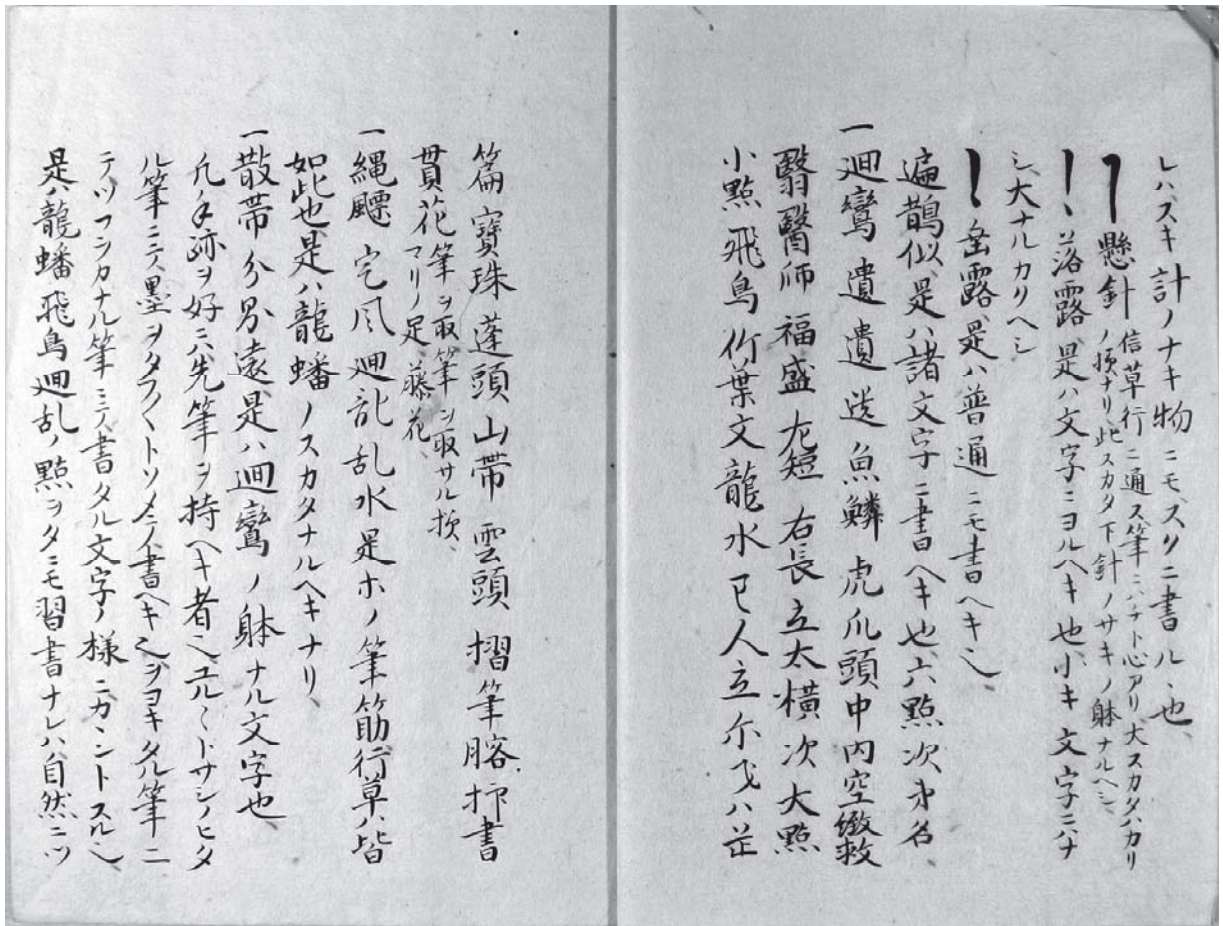
写本一冊。表紙は鳥の子地に藍色の打曇文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「手習口傳」世尊寺十三」と直書きされる。内題は「秘手習口傳」(扉題)と記されるほか、巻首に「手習口傳」(巻首題)とある。本文は漢字片仮名交じり文。「文正元年丙戌卯

月上幹日書写之」右一帖者世尊寺侍従行季模写之尤入木道之龜鑑可謂鴻寶者歟可禁外見而已 永正二年冬十月日 参議藤原末葉(花押)」との本奥書が記され、行季の模写本の存在を示す。巻尾には「享和改元歳

九月写之 經亮 同月校合了 誤写誤字本ノマ、ニセシナリ」との奥書の他、藤原教長に関する注が記される。奥書によれば、京都梅宮大社の禰宜で有職故実

家の橋本経亮(一七五五〜一八〇五)が書写したとする。本書はその写しか。行間や頭部に朱書きで「亮云」と経亮の注が附される。

伝本は少なく、薬師寺「世尊寺家傳」(D37)と同書か。「世尊寺殿口伝」(世尊寺十一)と概ね重複するが、「又追而書加之」を欠く。金子によつて「世尊寺殿口伝」(世尊寺十一)との校本が示される。



空海や藤原行成に仮託される入木道伝書で、藤原基規(一四九二〜一五五一)が校訂したとされ、十巻にも及ぶ内容は南北朝時代頃までの秘事口伝を集大成したものとされる。内容は執筆法、書式、文房四宝などを収める。「本朝書籍目録外録」を信ずれば、室町時代後期までの成立。

写本三冊(上・中・下)。表紙は白茶色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「麒麟抄 卷第一 第二 第三 十

三上」(①)と直書きされる。内題は巻首に「麒麟抄巻之第一通序并序」と記されるほか、「麒麟抄目録巻第一」「麒麟抄二巻(三巻・四巻・五巻・

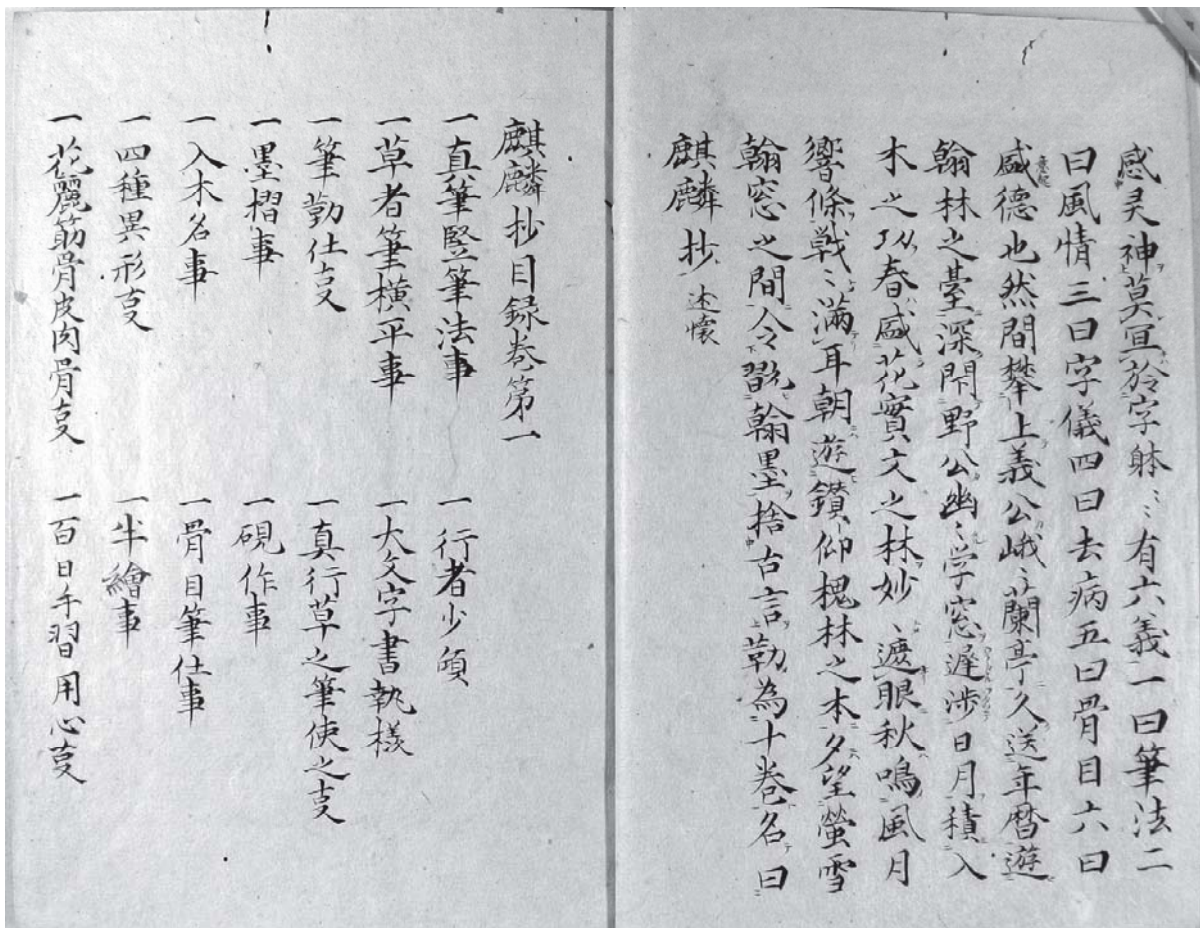
六巻・七巻・八巻・九巻) 目録」(目録題)などが確認される。本文は漢字片仮名交じり文。①「寛永五年卯月十九日秀賢卿以御本令校合畢

〔一 所御本ヨリクワシキ処アリ 圖形見事也〕「元和二年十二月十一日夜中此一巻写 敦直」

③「永享十三年大簇日書写畢」「右秘抄者写本十巻也而勒為一冊凡麒麟難出千歳況於末代哉聊後世為備証本造字筆法等條々之式不見分所加了簡者也入木之所作不堪言彼云是尤憚多實為類本志書写之呼汗顔云々深蔵紙窓可禁外見而已 大永第八曆 戊子 正月十七日 参議藤基規」「右一巻者 予

入木道令傳授持明院黄門基孝卿之剋彼本令拝借令膳写者也端十餘丁 予書之至奥雇他筆畢 慶 戊 仲夏念七 夫部侍郎秀賢」との本奥書が記される。

伝本は多く、宮内庁書陵部や国会図書館などに写本が所蔵される。江戸時代前期に六冊本が刊行されるほか、『続群書類従』や『日本書画苑』に翻刻が収載され、春日井市道風記念館より抄注が出される。⁽⁷⁾

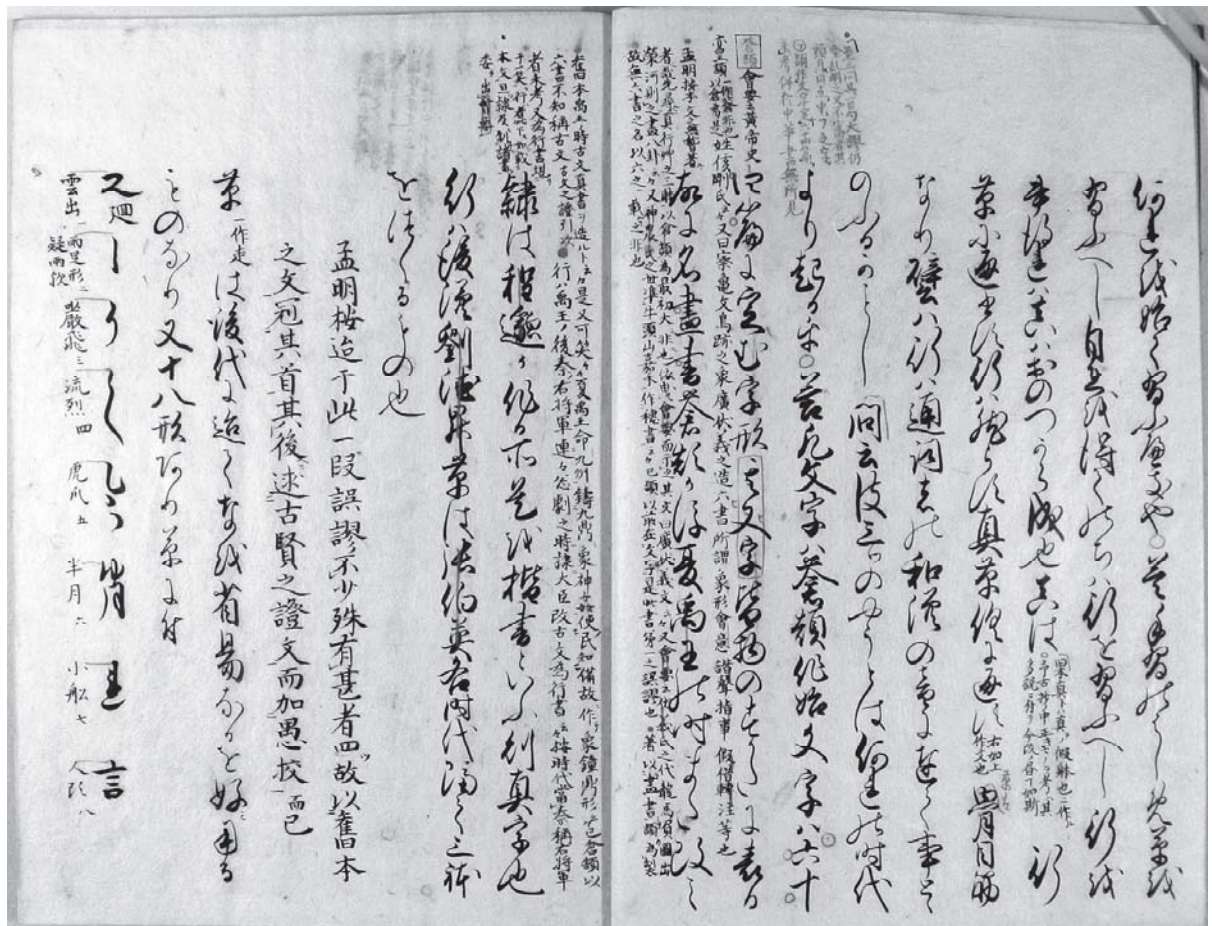


14 烏羽玉靈問答抄（うばたまれいもんどしよう） 世尊寺十五上・下

藤原行成に仮託した室町時代の入木道伝書。「烏羽玉」は「丸くて黒い」ものを指すことから書を指す言葉として用いられ、書を書く上での筆遣いや字形・墨継ぎ、連綿や散らし書きについて問答形式で記している。同じく行成撰とされる『烏羽玉靈抄』と混同される場合があり、二種存することが指摘される。『金玉積傳集』に収載される。

写本二冊で、十五上①は「愚校注解」と注が付され、十五下②は本文のみ。表紙は、①藍色（無紋）の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。②薄山吹色地に水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙で料紙は薄様。外題は、①表紙左肩に「烏羽玉靈問答抄 世尊寺十五上」の書き紙は薄様。②表紙左肩に「入木秘 烏羽玉問答抄 世尊寺十五下」と直書きされる。内題は①「烏羽玉靈問答抄 愚校注解」（扉題）、「烏羽玉靈問答抄」（巻首題）と記される。②「入木秘 烏羽玉問答抄 単」（扉題）、「烏羽玉問答抄」（巻首題）と見られる。本文はどちらも漢字片仮名交じり文。②「享和元年九月十八日写之尤可秘々々 経亮」と本奥書が記され、京都梅宮大社禰宜・有職故実家の橋本経亮の手を經ている。そのほか、①「孟明按此抄後人ノ添加後寫廢是不少見覽之輩能々回工夫考虚実取用之時者豈吾道之大助又製作之功已不空曰トモ権亜相公之撰宣不違者乎 明和六年首夏吉日誌之 臨池末学世古貞清」との識語が附される。

伝本は、宮内庁書陵部や東大史料編纂所、北野天満宮などに所蔵される。葉師寺（D13）と同書か。『続群書類従』や金子に翻刻がある。



15 夜鶴庭訓抄 才葉抄 (やかくていきんしょう さいようしょう)

世尊寺十六

藤原伊行著『夜鶴庭訓抄』と藤原教長口伝『才葉抄』の合写本。

写本一冊。表紙は墨・朱・藍の墨流しの紙表紙。見返しは本文共紙、

料紙は薄様。外題は表紙左肩に「夜鶴抄^{伊行}／才葉集^{世尊寺十六}」と

直書きされる。内題は「夜鶴集^{伊行}／才葉集^{世尊寺十六}」(扉題)と記される

ほか、「夜鶴庭訓抄 従四位上伊行誌」、「夜鶴抄^終」、「才葉集」などと

確認される。どちらも、本文は漢字平仮名交じり文で記される。

「夜鶴抄」は『夜鶴庭訓抄』のことで、世尊寺家第六代・伊行の著し

た入木道伝書。『群書類従』(以下「類従本」)に収載され、類従本の奥書

によれば、女の建礼門院右京大夫のためにしたためたとされる。『夜鶴庭

訓抄』の末尾には奥書等はない。本文上欄や行間に墨と朱で注記が記さ

れ、他本との校合の跡が見える。伝本は多く、青蓮院や宮内庁書陵部な

どに所蔵される。『群書類従』などに翻刻が収載されるほか、青蓮院本が

影印・翻刻される。⁽⁹⁾ 永由徳夫氏によつて校本が示される。⁽¹⁰⁾

『才葉抄』は、教長の口伝を記したもので、冒頭に安元三(一一七七)

年に高野山の庵室にて口授されたと記される。別名を「筆法才葉集」「筆

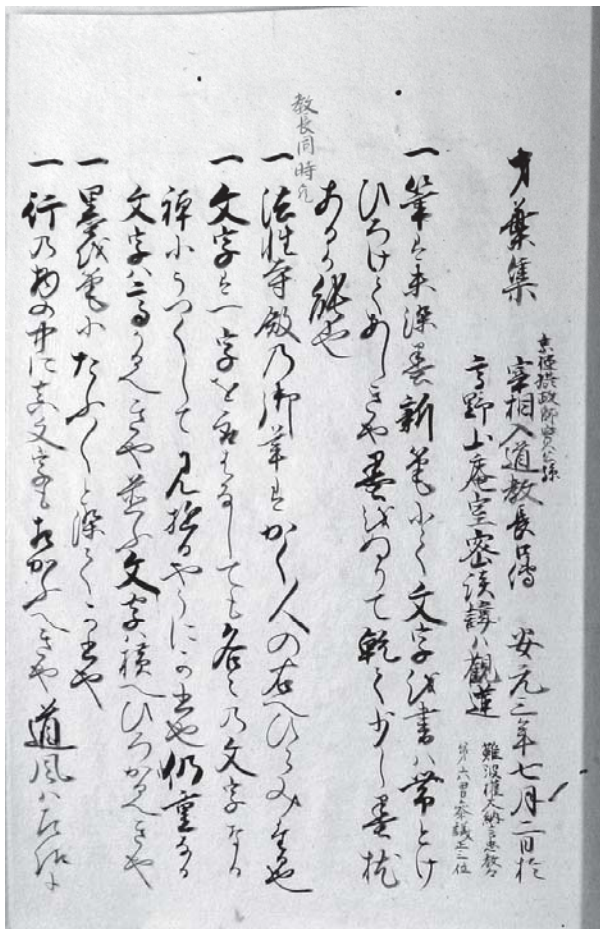
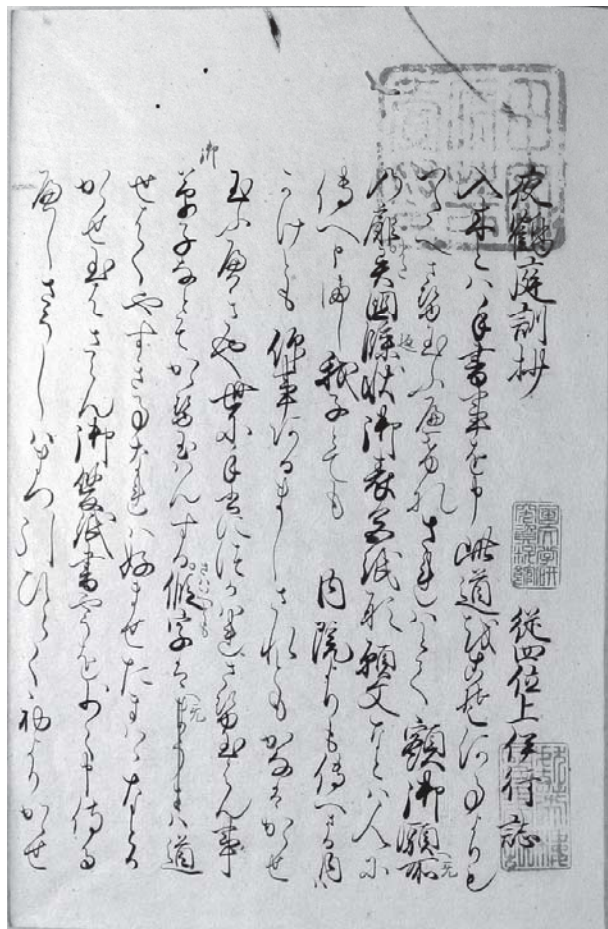
体抄」とする。また、本書巻尾には「右一卷千代丸依所望書与之畢 承

元三年五月八日 行能」と記されるが、類従本に見られる識語はない。

本文内容より四十七条本(類従本系統)に分類される。伝本は龍門文庫

や四天王寺大学恩頼堂文庫などに五十本近く確認されており、『群書類

従』等に翻刻が収載されるほか、金子⁽¹¹⁾による校本などがある。⁽¹²⁾



鎌倉時代の公卿で、世尊寺家第八代・行能が著した入木道伝書。伊行著『夜鶴庭訓抄』に倣った構成で、書札に関する項目を追加したもの。

内容は、手習の事、大嘗会御屏風の事、額の事、御表の事、御願所の扉の事、年中行事の障子の事、経の事、戒諒の奥の事、外題の事、双紙の事、入木の功と申事、詩の書様の事、灯前の書写の事、雨中の書写の事、墨摺る事、書札の次第の事、上処の事、繪旨院宣国宣の事、紙の置き方、内封外封の事、之し字事、闕字之事、判形之事、立文の事、公方へ申事、文を締めて結ぶ事、内裏の額書人の事、内額書人々の事、額書て有る勅賞所々の事、諸寺額書人の事、悠紀主基屏風書人々の事、賢聖障子略頌云、天下能書得名誉人々事、三賢之聖跡と申事などが記される。

写本一冊。表紙は墨・藍・朱の墨流しの紙表紙。見返しは本文共紙、

料紙は薄様。外題は表紙左肩に「夜鶴抄行能 世尊寺十七」と直書きされる。

内題は「夜鶴抄行能 世尊寺十七」（扉題）と記されるほか、巻首に「夜鶴

書札鈔」（巻首題）と確認される。本文は漢字片仮名交じり文。「右此書

傳條々我家之秘本也穴賢後覽輩可レ秘云云書状之奥儀如件 建治元年八

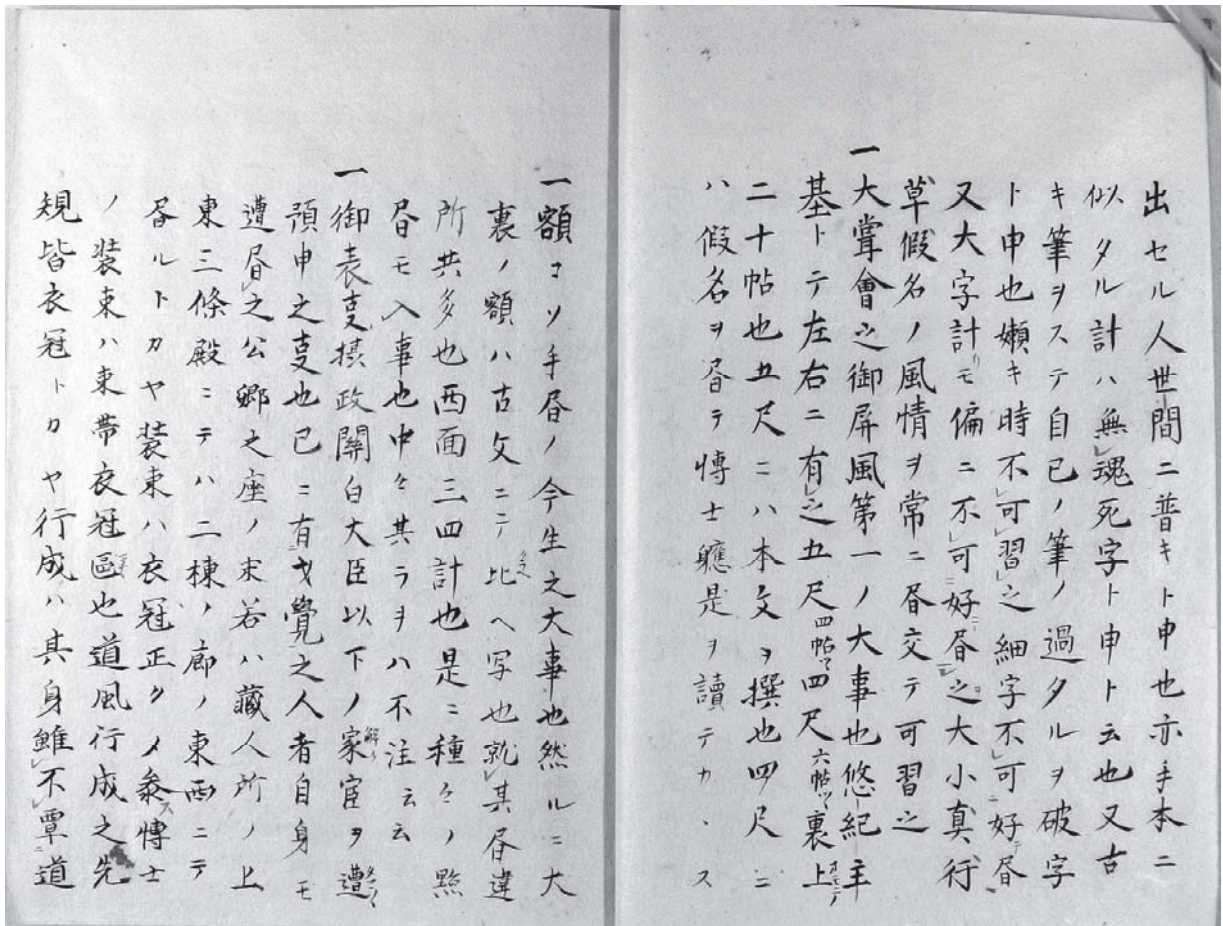
月日正三位行能 人王九十一代後宇多院御宇之初也」と行能の本奥書が

記される。朱で注記が加筆され、巻尾に「六尺五寸間屋之屏風色紙形」

に関する項目が書き足される。

伝本は、宮内庁書陵部、内閣文庫などに所蔵される。『日本書画苑』に

翻刻が収載される。



出セル人世間ニ普キト申也亦手本ニ
似タル計ハ無魂死字ト申ト云也又古
キ筆ヲステ自己ノ筆ノ過タルヲ破字
ト申也嬾キ時不可習之細字不可好
又大字計モ偏ニ不可好昏之大小真行
草假名ノ風情ヲ常ニ昏交テ可習之
一大嘗會之御屏風第一ノ大事也悠紀主
基トテ左右ニ有之五尺四帖四尺六帖裏上
二十帖也五尺ニハ本支ヲ撰也四尺ニ
ハ假名ヲ昏テ博士聽是ヲ讀テカ、ス

一額コソ手昏ノ今生之大事也然ルニ大
裏ノ額ハ古文ニテ比ニへ写也就其昏違
所共多也西面三四計也是ニ種々ノ點
昏モ入事也中々其ラヲハ不注云云
一御表吏撰政關白大臣以下ノ家官ヲ遣
預申之吏也己ニ有ニ覺之人者自身モ
遭昏之公卿之座ノ末若ハ藏人所ノ上
東三條殿ニテハ二棟ノ廊ノ東西ニテ
昏ルトカヤ装束ハ衣冠正クノ參博士
ノ装束ハ束帶衣冠區也道風行成之先
規皆衣冠トカヤ行成ハ其身雖不單道

17 入木抄（じゅぼくしょう）

世尊寺十八

南北朝時代の尊円法親王（一二九八〜一三五六）の入木道伝書。尊円法親王は、世尊寺家第十一代行房、および同第十二代行尹に書法を学び、その口伝を『入木口伝抄』などの入木道伝書に書き留めている。

写本一冊。表紙は白茶色地に水玉文様の紙表紙で、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「入木抄篇目」^{世尊寺}十八」と直書きされる。内題は「入木抄篇目」（扉題）、「入木抄篇目」（目次題）と記される。

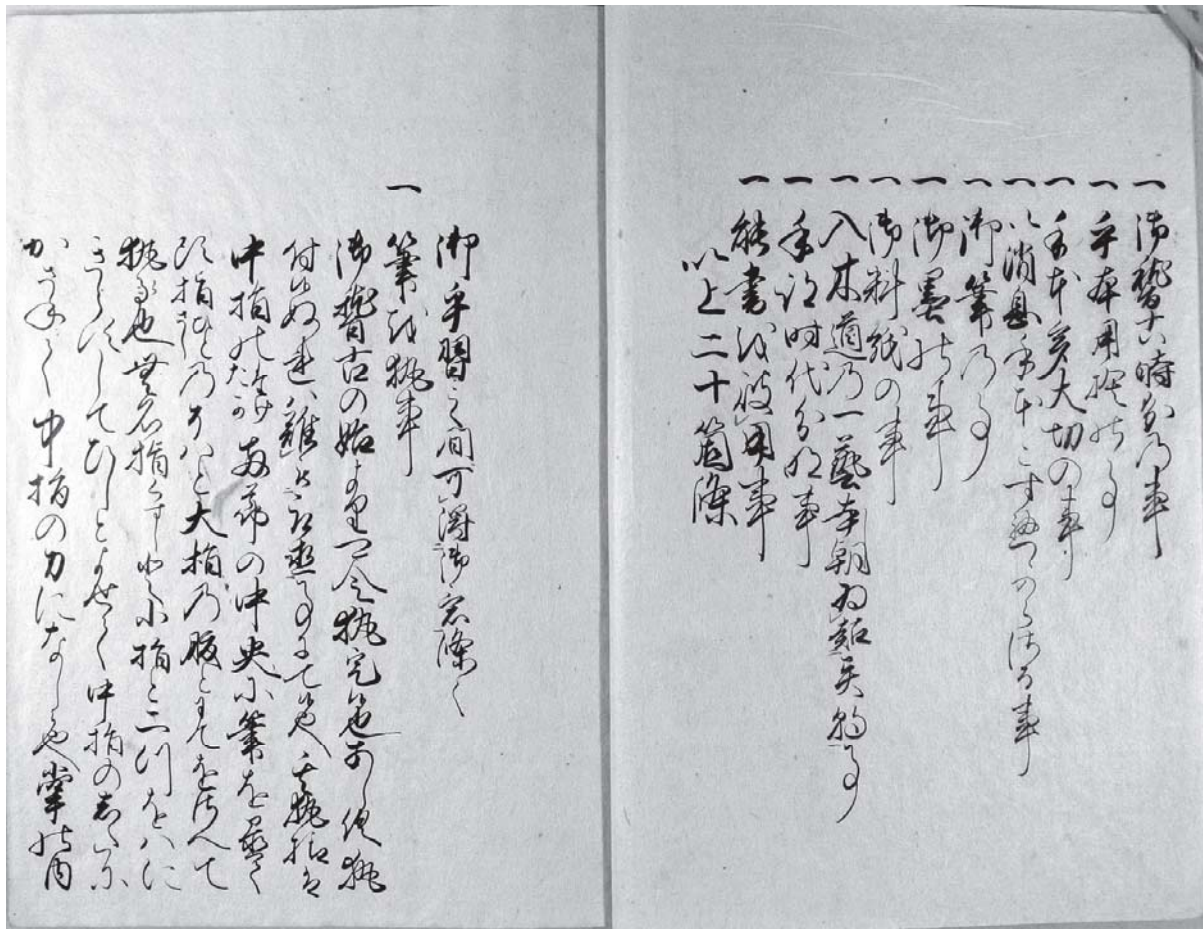
「文和元年十一月十五日注之 主上御手跡事為御稽古每事可計申入之他就被仰下逢行房朝臣行尹卿等口傳之事御手習之肝要篇目取要書之 更々不可有外見者也 臨池末生尊圓」と本奥書が記され、文和元年（一三五

二）十一月十五日、後光厳天皇の御稽古のために、行房・行尹等の口伝より二十項目の秘説をまとめたもので、同日、天皇の読書始めにつづく手習始めに進覧したものとされる。また、尊円法親王の本奥書の他、巻尾に「入木抄は大乗院宮御述作にて世尊寺家の口傳也、委細は本文に有

然共数返の書寫あやまりおほし、此本は當青蓮院尊真王より前天台坐主准后宮へをくらしめ玉ふを天明元年閏五月拝借し奉り謹而臨寫し家寶となすことしかり 入木道末葉源尹祥」と森尹祥の本奥書が記され、尊円

法親王から尊応准后（一四三二〜一五一四）に伝えられ、天明元年（一七八一）に臨写されたものらしい。

伝本は多く、『群書類従』雑部、『日本思想大系』二三、『入木道三部集』などに翻刻が収載される。⁽¹³⁾ 伊藤緑苔氏に伝本研究がある。⁽¹⁴⁾

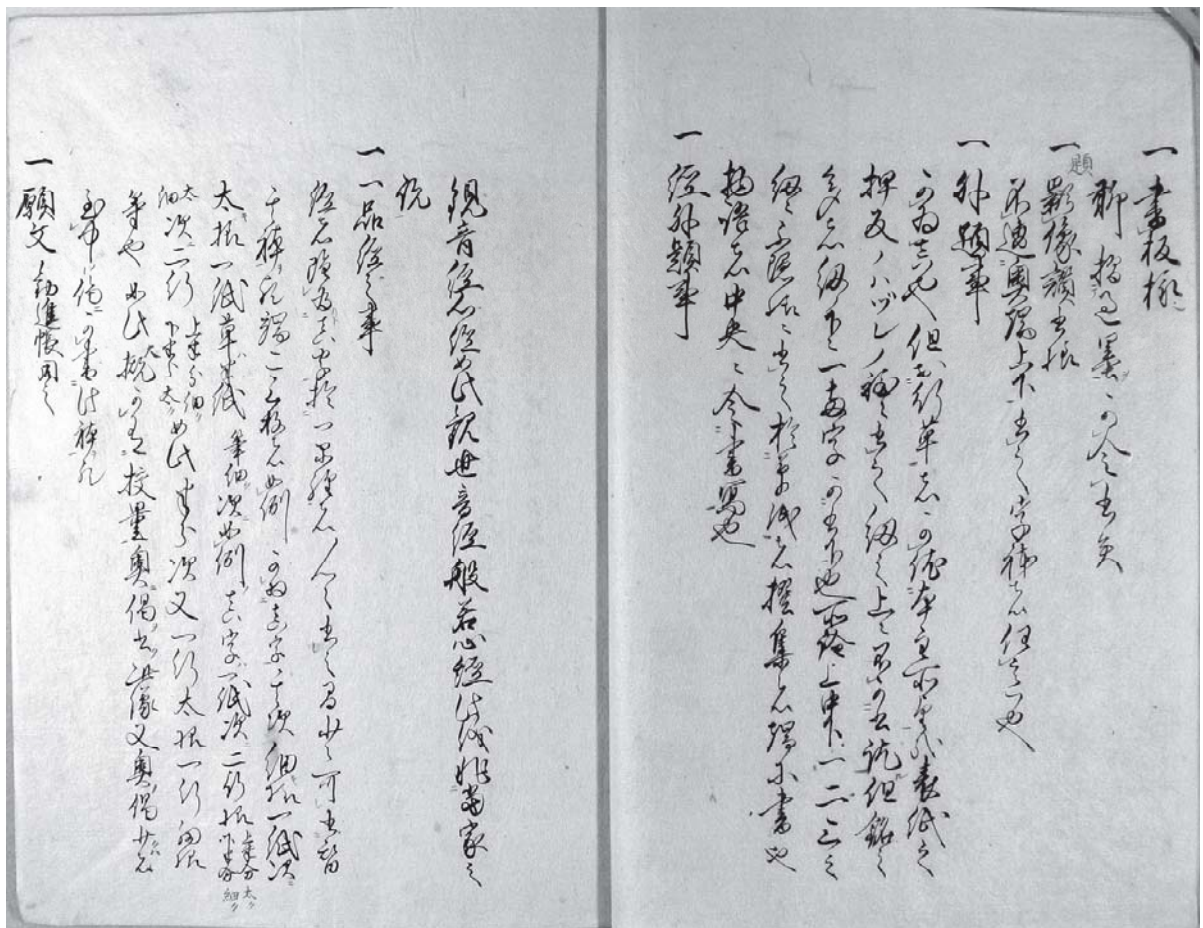


18 入木篇目集追加（じゅぼくへんもくしゅうつか） 世尊寺十九

室町時代の入木道伝書の一つ。別名「世尊寺侍従行季二十ヶ條追加」などと呼ばれる。奥書より世尊寺行尹（一二八六〜一三五〇）の撰したものと思しいが、別書では、世尊寺行高（一四一三〜一四七八）や行季（一四七七〜一五三三）、行尹の子行忠（一三二二〜一三八一）とする説も見られる。様々な伝書に転載されるがゆえに、撰者に混乱が見られるものと思われる。いずれにしても、世尊寺行房（？〜一三三七）の『右筆条々』より、肝要と思しい二十ヶ條を抜き書きしたもの。

写本一冊。表紙は白茶色（無紋）の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「入木篇目集追加 世尊寺 十九」と直書きされる。内題は「入木篇目集追加 世尊寺 十九」（扉題）と記されるほか、巻首に「入木篇目集追加」と確認される。本文は漢字平仮名交じり文。巻尾に、「此廿ヶ條者故世尊寺行尹卿以自筆寫之、彼本則所持也、為類本一帖之奥写置者也 大永六年丙戌八月五日近日進発旅行也、急々間落字多端也 藤（花押）（飛鳥井雅綱卿也）（權大納言 永祿六年八月廿一日出家）」と本奥書が記され、注記によれば室町時代の公卿・歌人である飛鳥井雅綱（一四八九〜一五六三）とする。

「入木篇目集」としては伝本は少なく、他に薬師寺（A 62）に所蔵されるばかりである。「世尊寺侍従行季二十ヶ條追加」としては、宮内庁書陵部などに所蔵され、『続群書類従』に書陵部蔵本の翻刻が収載される。金子による「世尊寺殿口伝」（世尊寺十一、「手習口伝」の増補部分）との校本がある。

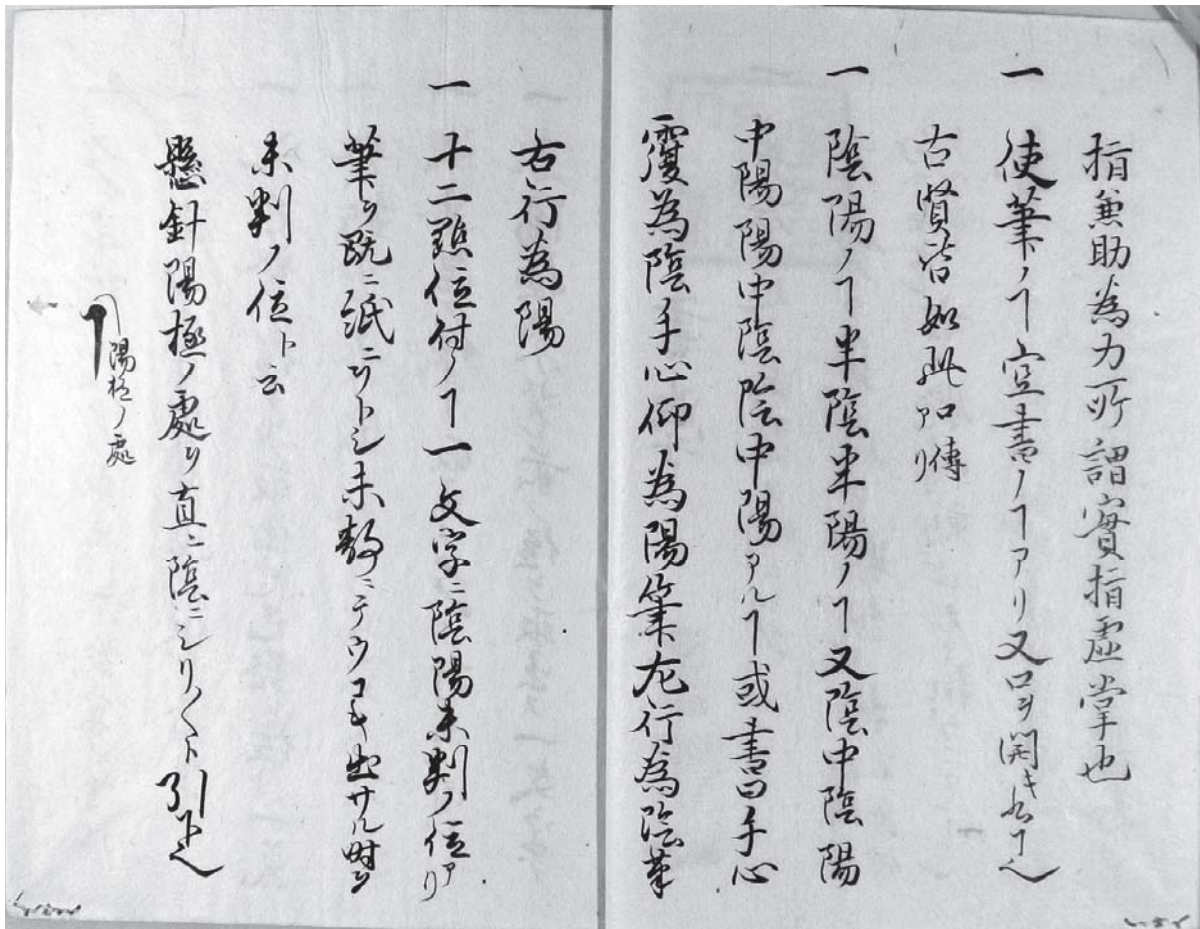


初学者向けに認められた入木道伝書。座り方・構え方などの所作から始まり、執筆の事、使筆の事、陰陽の事、十二点位付の事が記される。十二点位付の事では、点画の図解を示しながらそれぞれの点画について要点をまとめている。

写本一冊。表紙は淡黄色（無紋）の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「入木道初学次第 世尊寺 廿」と直書きされる。内題は「入木道初学次第」（扉題）、「書學」（巻首題）と記される。

本文は漢字片仮名交じり文。奥書等はない。

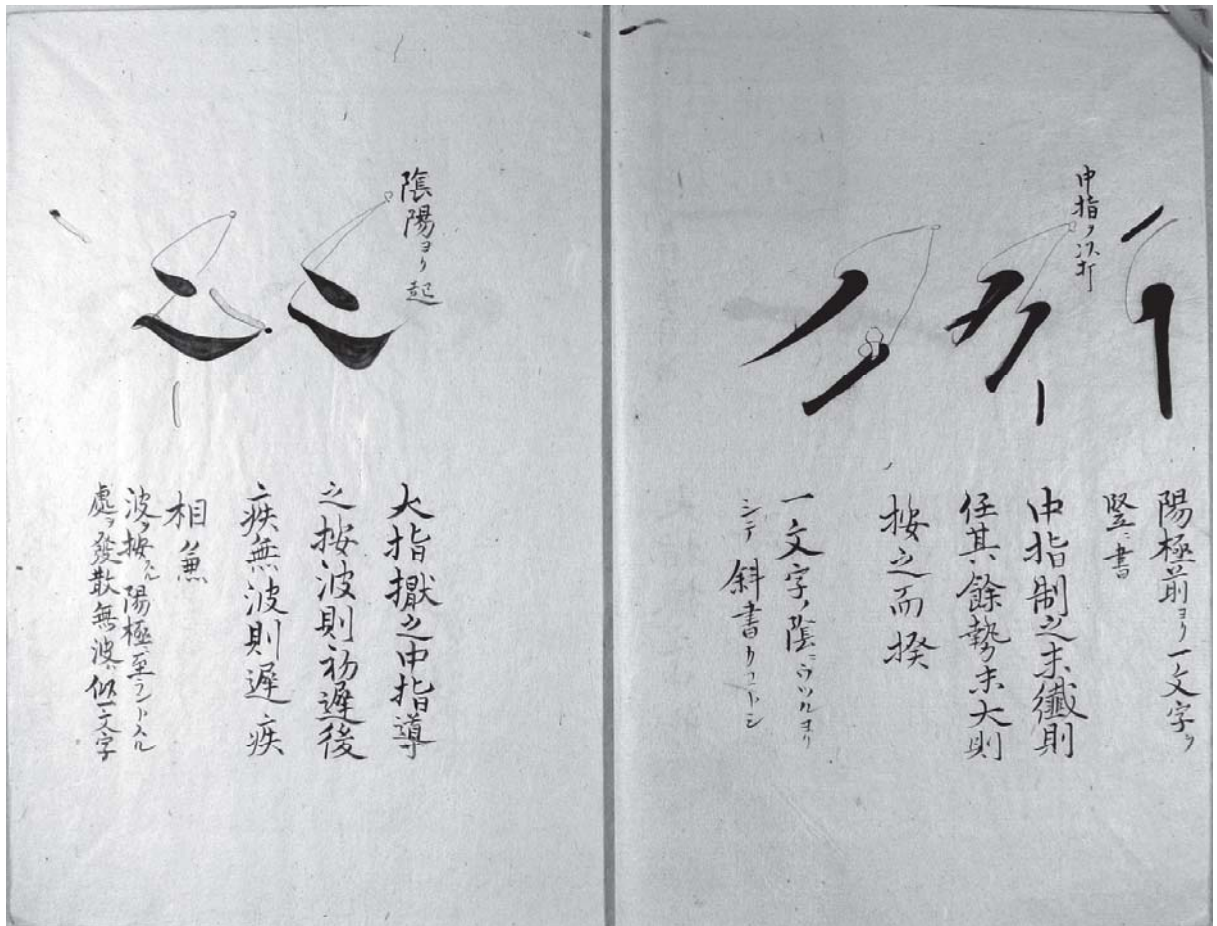
伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥するかぎり孤本と正しいが、「十二点」については、「十二点」（世尊寺二十一）ほか、他書に合写されるものも多く確認される。



「入木道初学次第」(世尊寺二十)に記される「十二点位付」が単独に著されたもの。前掲書との相違は、陰陽二種の図解が示されているところにあるか。

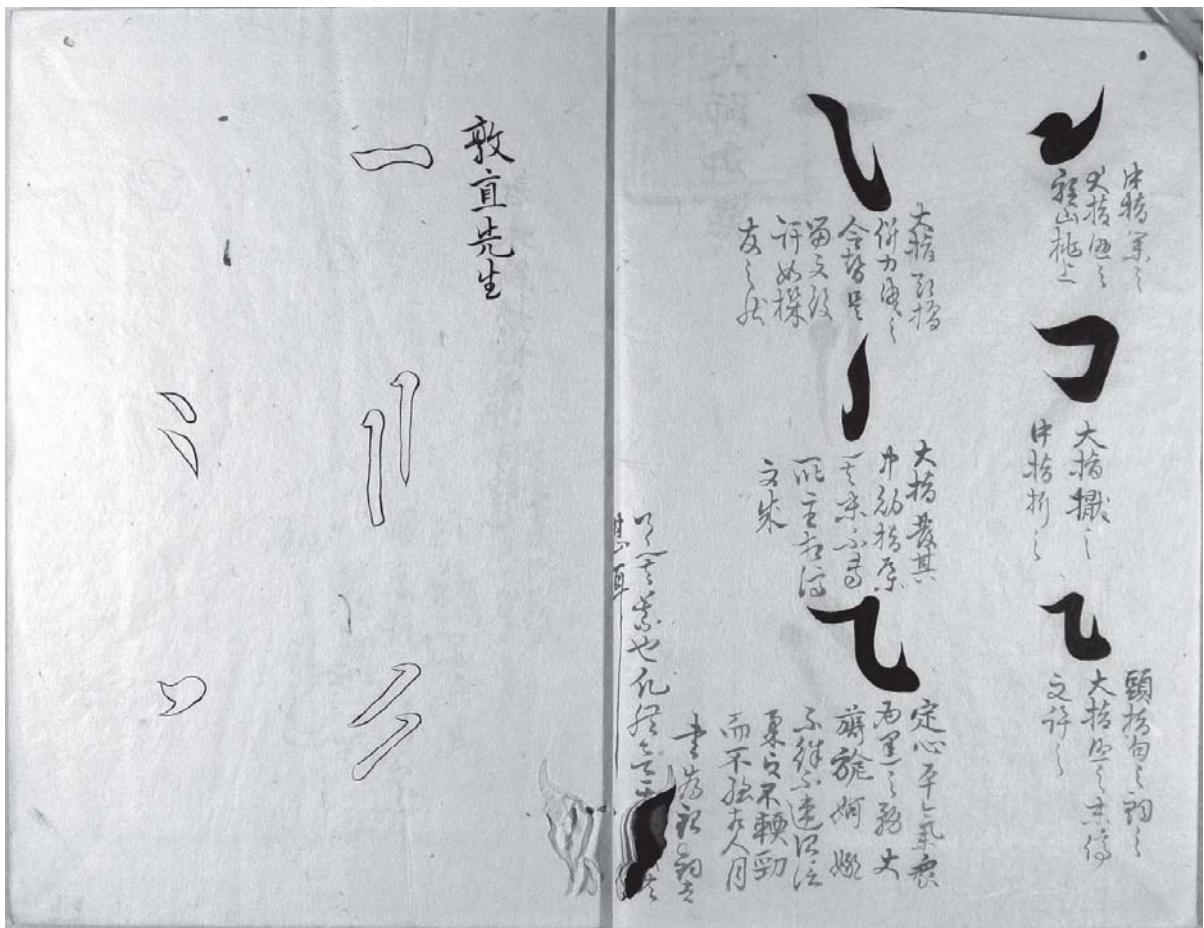
写本一冊。表紙は墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「十二点世尊寺廿一」と直書きされる。内題は「十二点」(扉題)と記される。本文は漢文体、及び漢字片仮名交じり文。点画の図とともにそれぞれの要点が記される。奥書等はない。

伝本は、宮内庁書陵部に「書法十二点」が所蔵されるが同書か。「十二点画」との連関も含めて今後の精査が必要とされる。



大師流の祖・空海を始め、京都賀茂社の神主・藤木敦直(一五八二-一六四九)など、大師流の能書の点画を籠字で示したもの。

写本一冊。表紙は墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「點畫寫世尊寺廿二」と直書きされる。内題は「朱松山點畫写使筆法」(扉題)と記される。内容は、「大師御點」にはじまり、「敦直先生」「寂源僧正」「自寛公」「蓮臺院」「文恭院殿」「生直先生」「司直先生」「筆者不知」「先生之書」「近衛前摂政殿家熙公」などの書した十二点画を摸写している。本文は墨と朱で点画の説明が付される。本書の奥書はないが、「寂源僧正」の末尾には「右寂源十二点 家孝公御所持■真蹟写之」と記され、その後には朱書きで「當流ハ先大師ノ御墨付ヲ書覺テ後道風ニテモ義之ニテモ可移十二点是當流ノ書母也是ヲ習テ行成ナトニウツルニヨリテ趣大ニ相違セリト云々」と記される。当該部の前半は、「十二点」(世尊寺二十一)と内容が一致する。伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥するかぎり孤本とらしい。薬師寺に「点画」(A 65)が所蔵されるが同書か。



三蹟より世尊寺に伝わったとされる入木道伝書であるが、大師流の伝書の流れを汲むか、後代的な内容が散見される。

写本一冊。表紙は墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「入木用筆傳世尊寺二十三」と直書きされる。内題は「入木用筆傳世尊寺二十三」(扉題)、「入木用筆傳」

(巻首題)と記される。「右此一帖者三蹟累代口傳為入木之要須者也穴賢不可及外見而已 文和二年二月下旬書之 行忠」と記されるほか、「筆

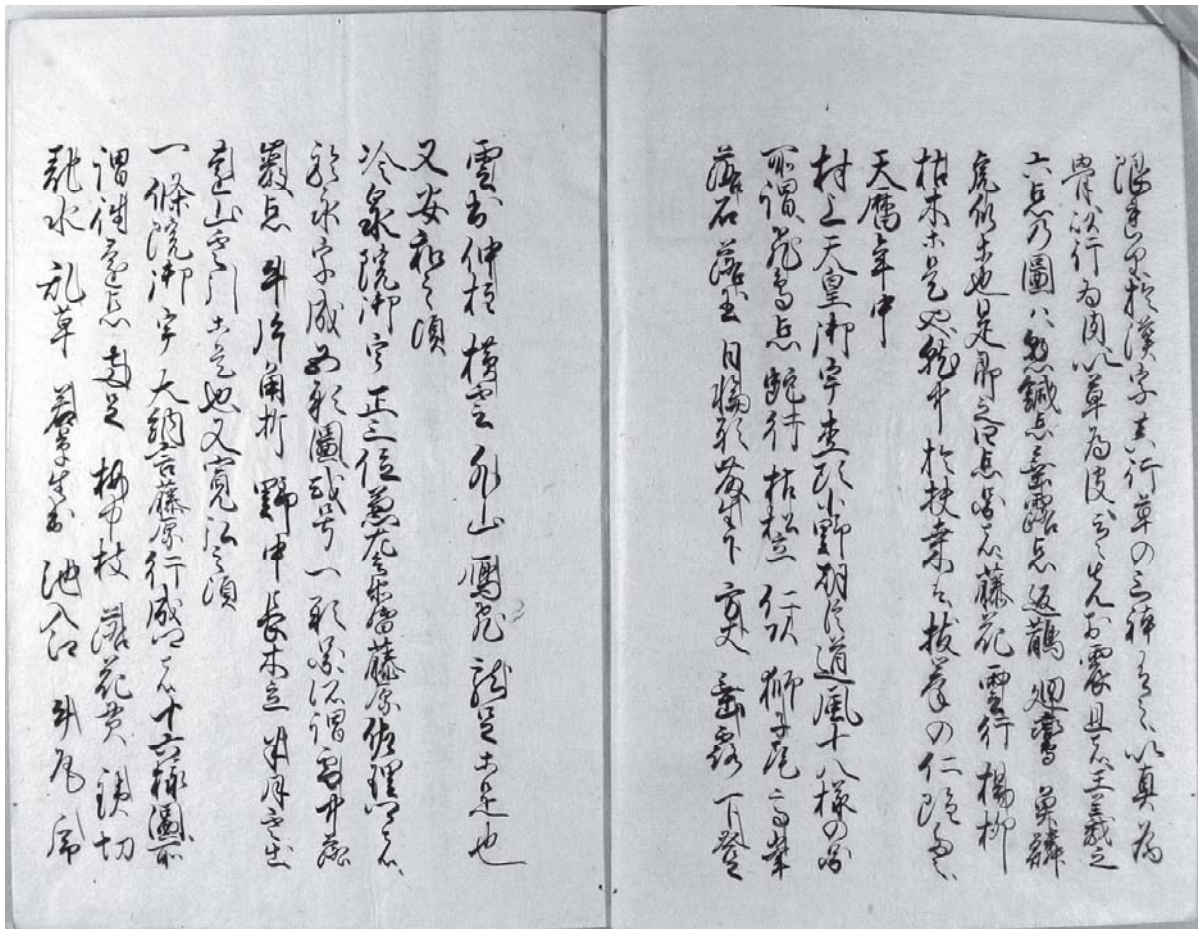
法無盡なりといへとも此等には不可過聊不可有外見者也 慶長十六年

辛仲夏吉日書之 中納言藤原朝臣基孝」と本奥書が確認される。世尊寺

行忠(一三二二〜一三八一)を経て、持明院家に伝わる様子がうかがえる。また、巻尾に「入木道之事依懇望誓約之上令傳受者也 寛永十七

年六月朔日 基定/森九郎兵衛男」とも記される。

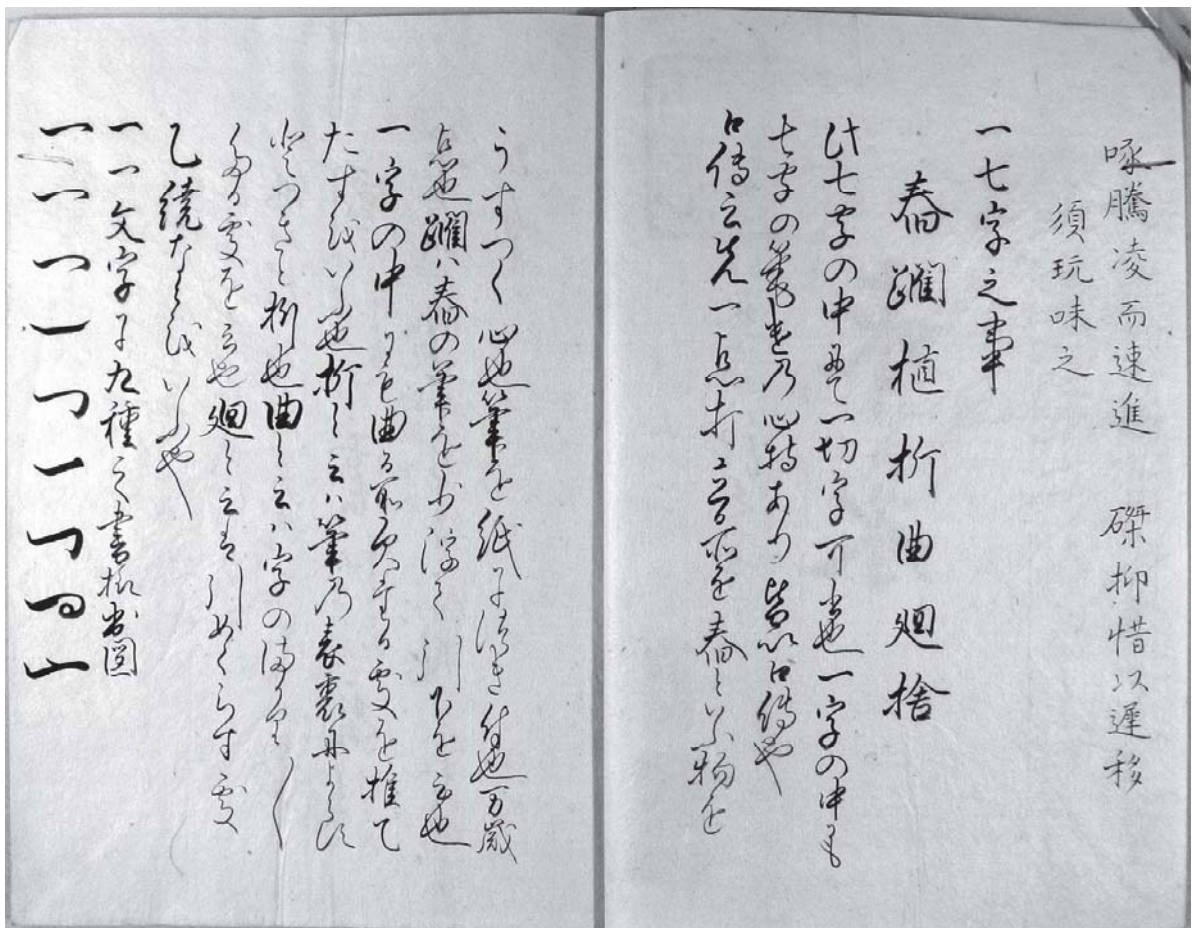
伝本は少なく、静嘉堂文庫や薬師寺(C22)などに所蔵される。小松茂美氏によつて一部翻刻される⁽¹⁵⁾。



内題より、世尊寺家十二代・行尹の口伝と思しい入木道伝書。筆法永字八法之事より始まり、七字之事、執筆之法、用筆八記図、磨墨事、皮肉骨之事、染筆事などが記される。後半に「白河経朝（行成卿ノ九代孫）五重記」「翰林禁経九成法」が収められる。

写本一冊。表紙は白土色（無紋）の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「筆法永字八法」世尊寺 廿四と直書きされる。内題は「夜鶴抄」行尹卿 永字八法 世尊寺 二十一（扉題）と記される。巻尾に、「右一巻者當家之庭訓也令授与に基規朝臣畢 藤行季」と本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍目録データベース」を一瞥する限り孤本と思しい。



尊円法親王著『入木抄』に注釈を付したものを。別名を「臨池抄」。

写本一冊。表紙は墨黒色地布目押しの紙表紙で、見返しは本文共紙、

料紙は薄様。外題は表紙左肩に「^冠入木道篇目」^{一名臨池抄}廿五」と直書きさ

れる。内題は「^冠入木道篇目」（扉題）、「入木抄」^{一名臨池抄}篇目」（目次題）

と記される。本文末尾には「文和元年十一月十五日注之」「御手跡之事為

御稽古毎事可計申入之由被仰下逢行房朝臣行尹卿等口傳事等御手習之肝

要篇目取要書之、更々不可有外見者也 臨池末生御判親王」と本奥書が

記されること、本書の内容・構成などから、尊円法親王の『入木抄』に

相違ないが、頭注部や行間等に墨や朱で注が書き加えられる。また、巻

尾には、「此書さいつ比 柏亭先生より請求うつし置侍るに先生の縁にて

山くち何某か家の本と松田氏の家の本とたかひに照しあはせ覽ければ一

章の闕あり、いま是を補ひ師の許へさしけ我もまた写置て諸門葉にあか

たととするのみ」と奥書が記される。年紀等は記されていないが、奥書

脇に朱で「明和六年丑夏四月上旬書之」との注記が記され、本書の来歴

を知る。また、それらの本奥書の間には、「右入木抄者、青蓮院尊円親王

御作也依為、後光嚴院帝御所被献此卷也三井佛地院長円僧正門下自

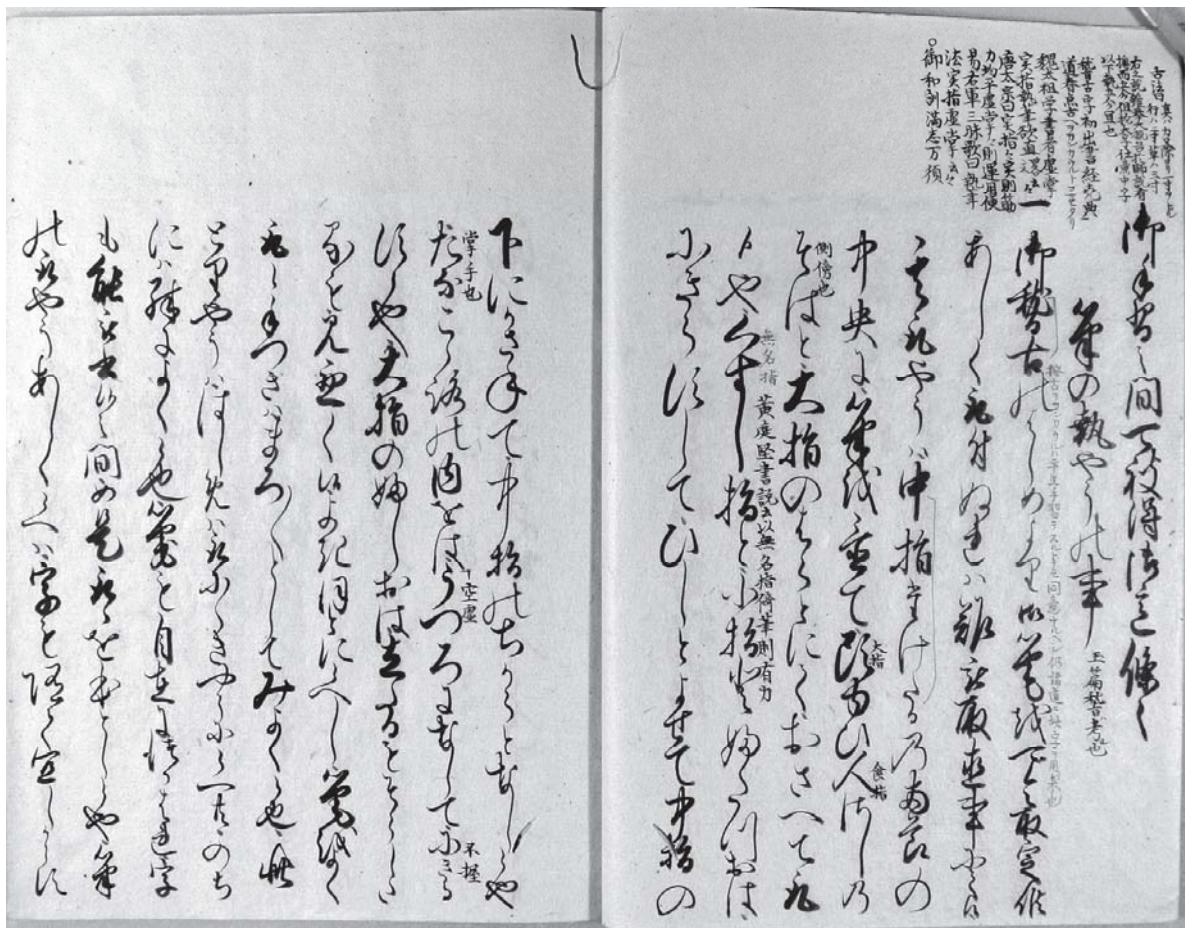
雲軒正恵某仍懇望令授與者也、寶永五年戊子五月中浣、陰涼軒正賛在判」

と、別本の奥書が転記されるほか、魚養から尊證親王（一六五一〜一六

九四）までの能書を列記する。

『入木抄』の伝本は、宮内庁書陵部ほか三十本近くが確認されるが、

注が付されたものについては精査が必要とされる。



行尹の口伝を尊円法親王が建武三年（一三三六）に記した入木道伝書。

写本一冊。表紙は白茶色（無紋）の紙表紙で、見返しは本文共紙、料

紙は薄様。外題は、表紙左肩に「入木道抄^{世尊寺}廿七」と直書きされ、内

題は一丁表に「入木道抄^{世尊寺}二十七」（扉題）、二丁表に「入木道目六」

（目録題）、四丁表に「入木道抄」（巻首題）とそれぞれ記される。口伝

の内容は、拾遺納言（行成）以来、世尊寺家に秘伝として伝わる書式に

関することを中心に、計二十項目が並ぶ。世尊寺行房著『右筆条々』の

ほか、伝兼明親王著『金玉積伝集』などに記される項目との一致が確認

される。尊円法親王の本奥書「此一巻者拾遺納言以来之家傳従行尹卿傳

之、猥不可及外見者也 建武三年正月日入木末葉（花押）」のほかに、「右

一巻者入木道之要枢也、依大王命禁外見者也 大永二年五月八日入木末

葉（花押）記之」「右一巻者入木道之秘法先師教誡嚴重也、然依室町殿御

所望奉相傳者也 永禄十二年十二月十五日臨池末流二品（花押）親王誌

之」「此一巻者入木道之深秘而覺恕准后之芳翰也、依難去所望加卑詞畢

入道無品覺圓親王記之」と三種の本奥書を有する。記される花押や注記

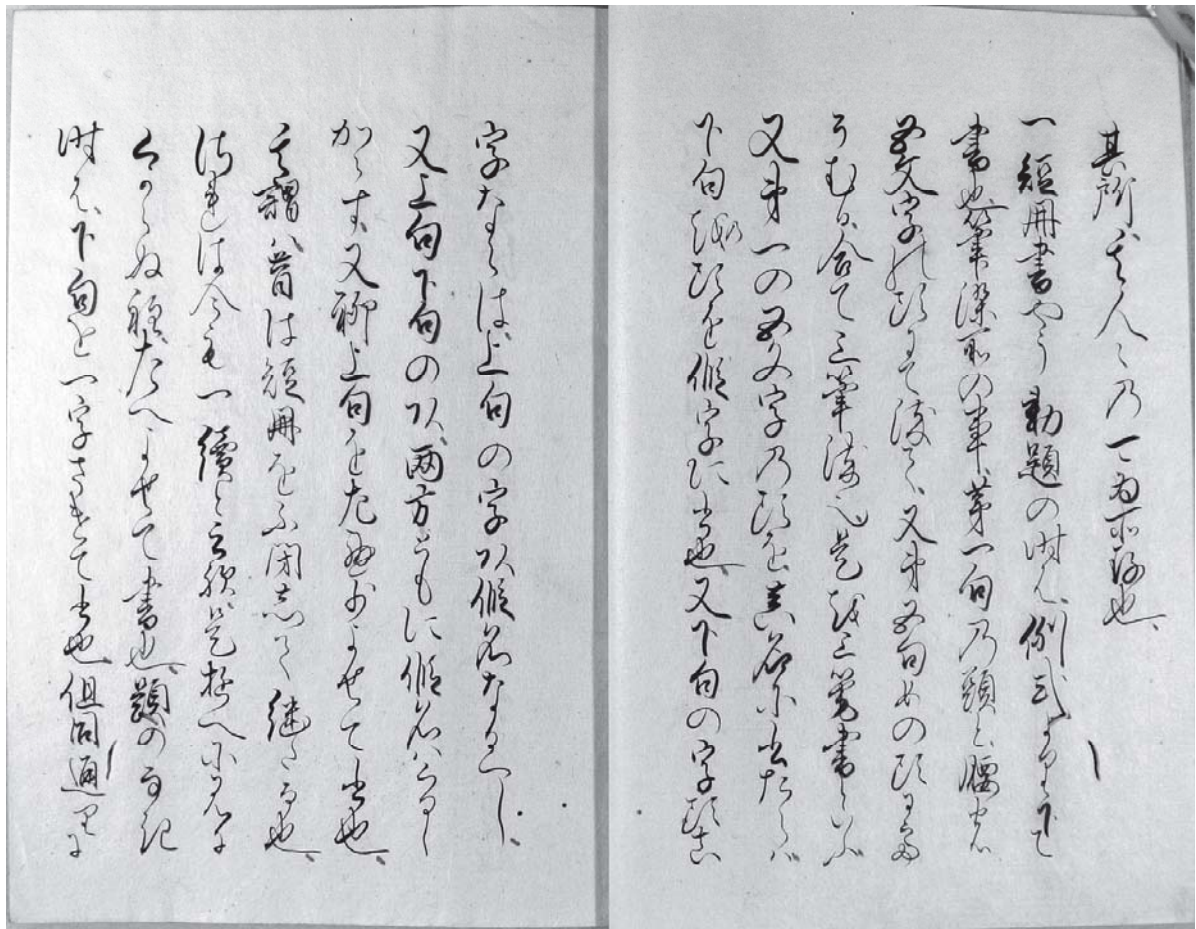
（朱筆）の内容から、尊鎮法親王（一五〇四〜一五五〇）が大永二（一

五二二）年に書写し、室町殿・足利義昭（一五三七〜一五九七）の所望

により、永禄十二（一五七〇）年に覺恕法親王（一五二一〜一五七四）

が、後に覺圓親王（良恕法親王、一五七四〜一六四三）が書写している。

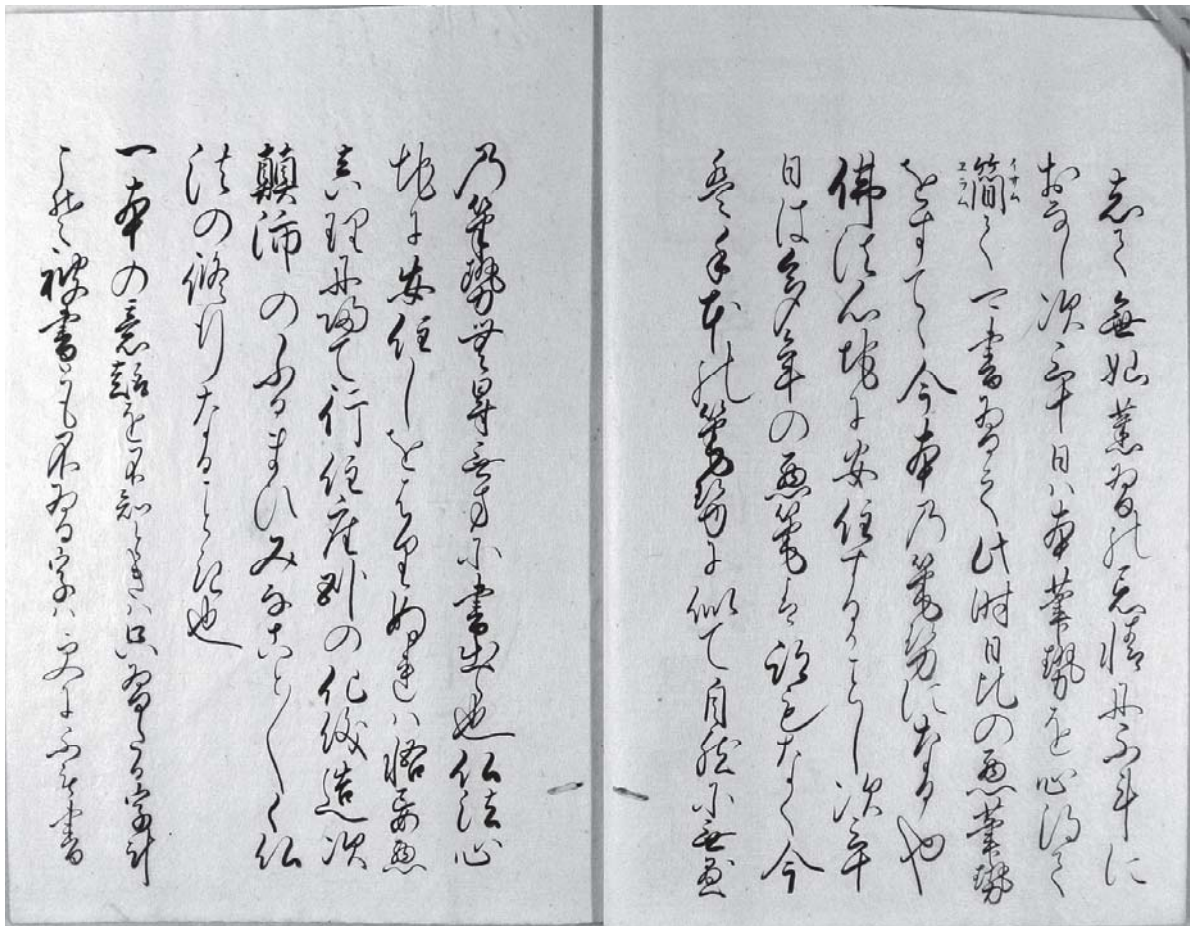
伝本は他に薬師寺に所蔵される。金子¹⁶による翻刻がある。



尊円法親王が世尊寺家の行房・行尹の口伝を記した入木道伝書。

写本一冊。表紙は白土色(無紋)の紙表紙で、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、表紙左肩に「十三箇条之記^{世尊寺}廿八」と直書きされる。内題は、一丁表左端に「十三箇条之記^{世尊寺}二十八」(扉題)、二丁表右端に「入木道十三ヶ条之記」と記される。巻尾に、「右十三箇条者行房朝臣行尹卿等口傳而入木道之要樞也依千代菊丸所望書之更々不可有外見者也 康永三年正月七日 尊圓」、「依屋山隼人佑執心雖為秘抄十三箇条令直授畢 天正十六曆夷則中旬 臨池末流(花押) 親王」と尊円法親王の本奥書と天正十六年覚想法親王(一五二一〜一五七四)の本奥書が記される。内容は、藤原教長の口伝『才葉抄』の中から、書を書く際の心得を中心に援引している。他に、藤原伊行著『夜鶴庭訓抄』より、用具の善し悪しやそれらの用い方に関する項目が抜き書きされる。ただし、本文内容を比較すると、言い回しなどが異なるため、単純な抜き書きではない。また、行房・行尹の口伝を記した他の入木道伝書や尊円法親王の『入木抄』などとの連関が考えられる。

なお、伝本は少ないが、宮内庁書陵部所蔵『入木道十三ヶ条』(御歌所本、一六二―一七二)が確認される。本書との異同は全く見られず、本文の改行等が一致し、書写される文字が似通っていることから、田藩文庫本と書陵部本は親子関係にある可能性が高いといえる。金子⁽¹⁷⁾による翻刻がある。



尊円法親王が後光厳天皇の御手習始めに際して著した入木道伝書。

写本一冊。表紙は白茶色（無紋）の紙表紙で、見返しは本文共紙、料

紙は薄様。外題は表紙左肩に「入木抄 世尊寺 廿九」と直書きされる。内

題は「入木抄 世尊寺 二十九」（扉題）、「入木抄篇目」（目次題）と記され

る。巻尾に「文和元年十一月十五日注之、主上御手跡事為御稽古每事可

計申入之由就被仰下逢行房朝臣行尹卿等口傳之事御手習之肝要篇目取要

書之、更々不可有外見者也 臨池末生尊圓」と記され、文和元年（一三

五二）十一月十五日、後光厳天皇の御稽古のために、行房・行尹等の口

伝より二十項目の秘説をまとめ、進覧したものとす。尊円法親王の本

奥書のほか、「入木抄は大乗院宮御述作にて世尊寺家の口傳也、委細は本

文に有然共数返の書寫あやまりおほし、此本は當青蓮院尊真王より前天

台坐主准后宮へをくらしめ玉ふを天明元年閏五月拝借し奉り謹而臨写し

家寶となすことしかり 入木道末葉源尹祥」と、森尹祥の本奥書が記さ

れる。『入木抄』（世尊寺十八）と同じ奥書が記される。

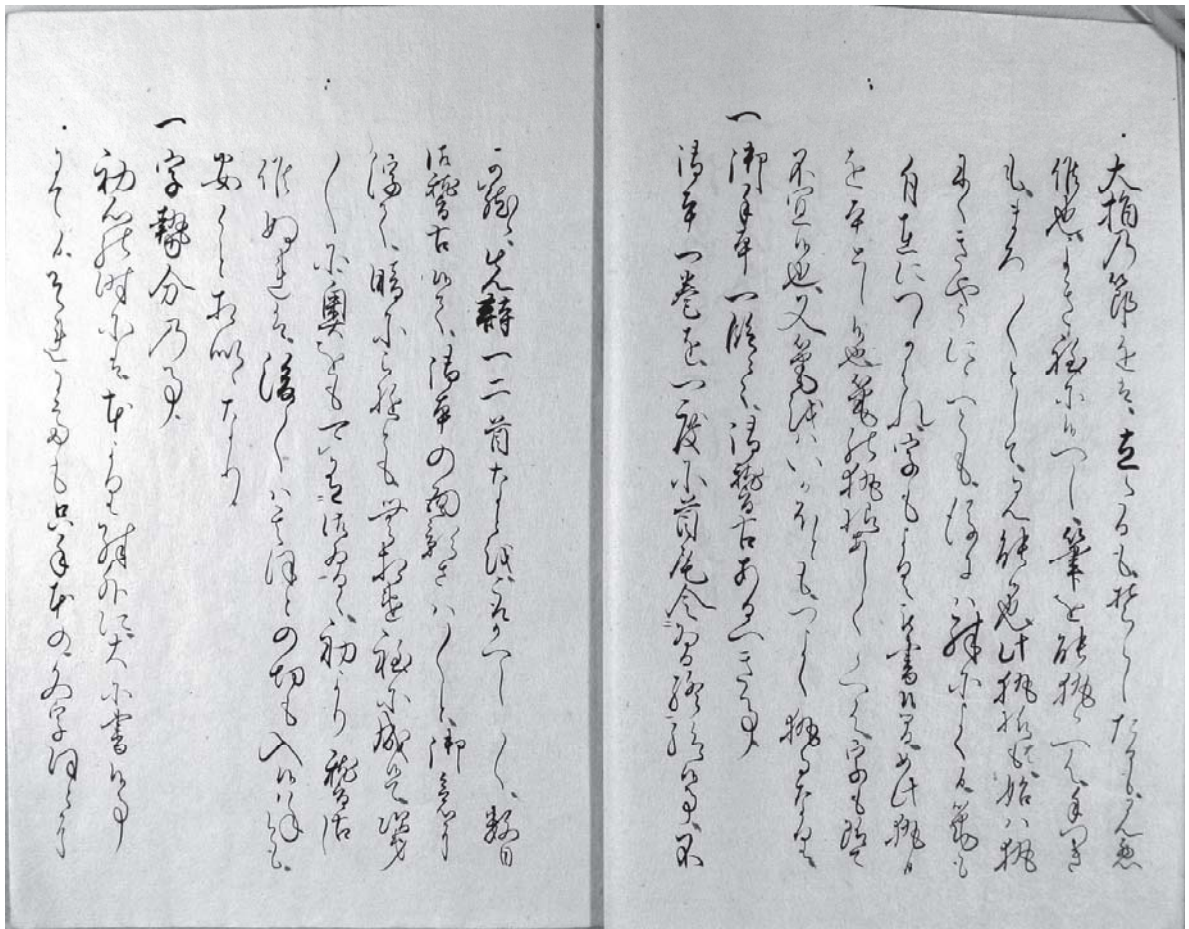
伝本は、宮内庁書陵部などに所蔵される。『入木抄』は『群書類従』雑

部、『入木道三部集』、『日本思想大系』二三などに所収される。田安德川

家旧蔵資料には、「入木抄」（世尊寺十九）、「入木抄」（世尊寺二十）など、

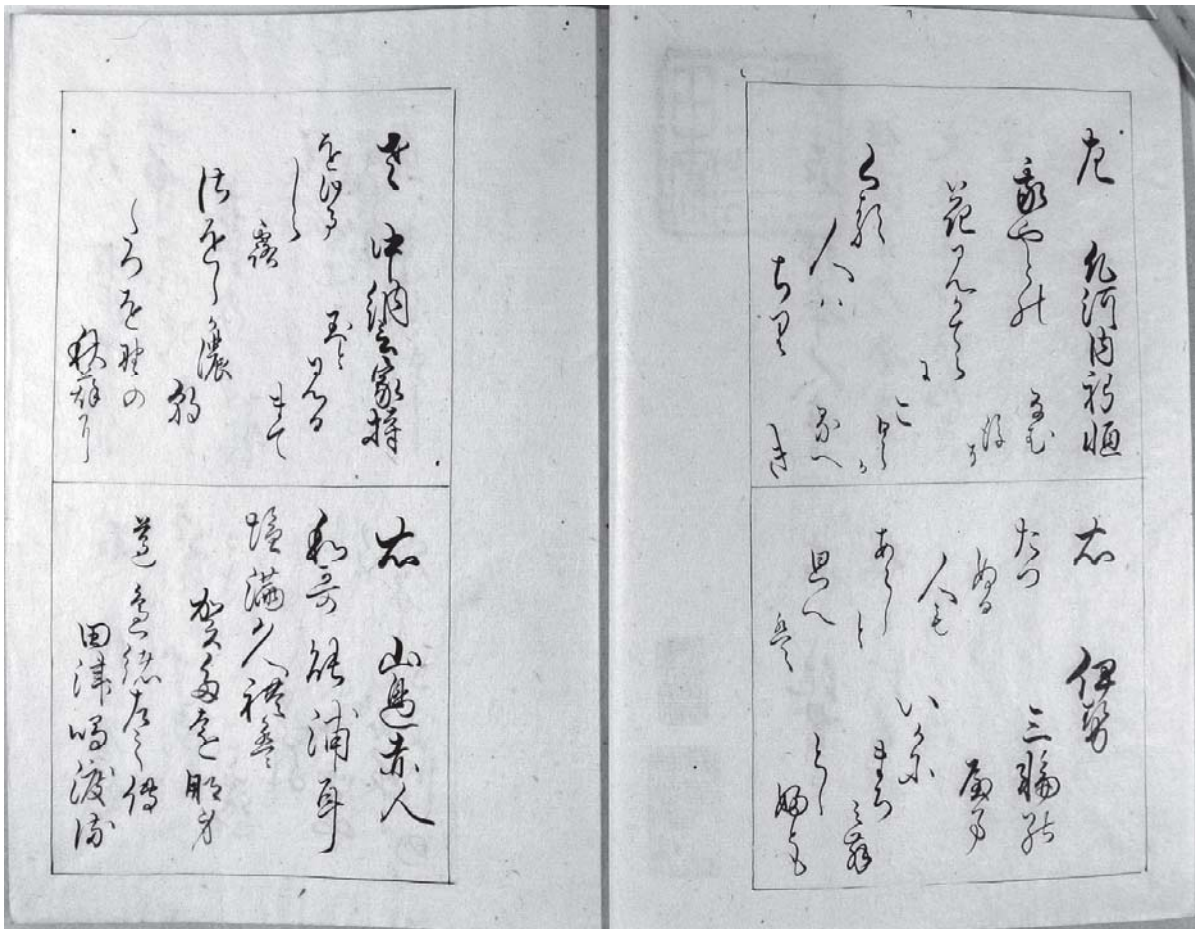
複数冊の『入木抄』を有する。後者は注釈書と目されるが、本書と前者

との連関については、今後の精査が待たれる。



藤原公任撰『三十六人撰』所載の柿本人麻呂(六六〇?—七二四)から中務(九一二?—九九一?)に至る平安時代の和歌の上手、三十六人(三十六歌仙)の和歌を各一首記した色紙形。

写本一冊。表紙は白土色地の布目押し文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「色紙かた 世尊寺 三十」と直書きされる。内題は「色紙かた 世尊寺 三十」(扉題)と記される。巻尾には「右一卷者入木道之色紙形、従世尊寺行高卿乞而令相傳之畢。藤基春」の本奥書があり、持明院基春(一四五三—一五三五)が、師の世尊寺行高(世尊寺家十六代)より相伝したものと知られる。
基春は戦国期の公卿。行高から世尊寺家の説を受け、世尊寺行季(一四七六—一五三二)に伝えたが、行季の薨去により世尊寺家が断絶すると入木道を相伝し、宮中の書役を務めた。
一丁に散らし書きの色紙二枚を上下に書写する。



30 悠紀主基本文色紙形草案（ゆきすきほんもしきしがたそうあん）

世尊寺三十一

天明七年（一七八七）十一月二十七日に行われた光格天皇（一七七
一八四〇）の大嘗祭に用いられた本文屏風の色紙形の草案。

写本一冊。表紙は墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは本文共
紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「色紙形草案 悠紀主基本文 保考書写 世尊寺三十一」
と直書きされる。内題は「色紙形草案 悠紀主基本文 保考書写 卅一（扉題）と記される。

巻尾に「天明七年十一月十一日書進 書博士賀茂保孝（朱書印） 家蔵」

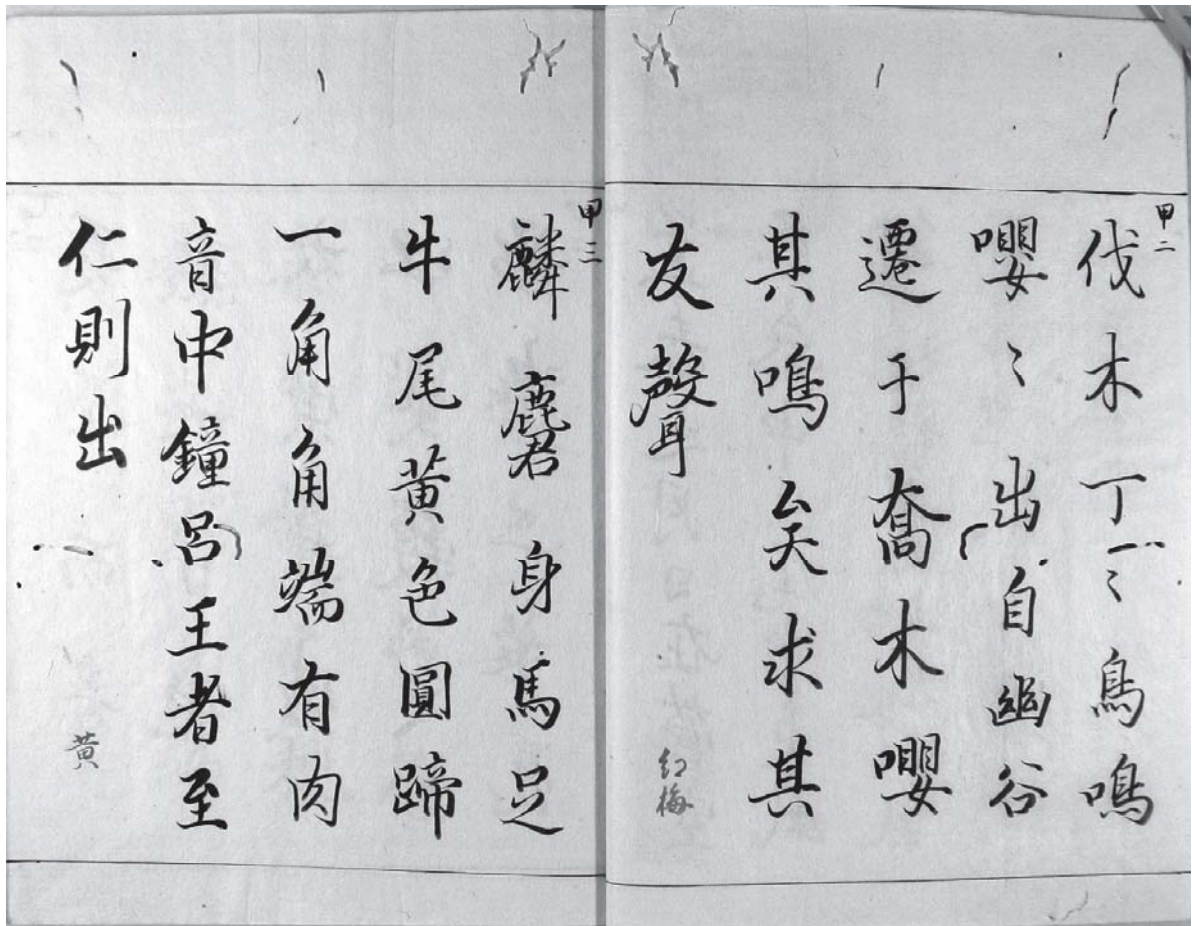
「天明之度御再興五尺御屏風唐絵也 本文勘者 ユキ 高辻殿 スキ 五條殿

画 土佐土佐守」「此色紙形書法他流へ勅筆様 持明院様ナト」無之當家

へ御尋有之傳來有之二付清書被仰出候保考乍未練清書仕候事二御座候當
道之大慶不過之候」「右色紙形者岡本甲斐守以直筆之草案摹書之 寛政三

辛亥年十一月中旬」の奥書がある。岡本保考（一七四九—一八一八）は、

京都上賀茂神社の祠官。書博士。岡本邦氏・花山院常雅に大師流を学び
伝えた。大嘗会には、大和絵に和歌の色紙形を押す悠紀主基屏風と唐絵
に漢詩句の色紙形を押す本文屏風が用いられたが、本文屏風は長らく作
成されず、この度に復興された。当館蔵田安德川家旧蔵『悠紀主基御屏
風本文 悠紀主基御屏風色紙和歌』（持明院五）にも同内容が記録される。
また、センチュリー文化財団蔵松平定信旧蔵入木道書一式の中にその転
写本がある。一戸涉氏論考参照。⁽¹⁸⁾



31 寂源僧正夢想之文字（じやくげんそうじょうむそうのもじ）

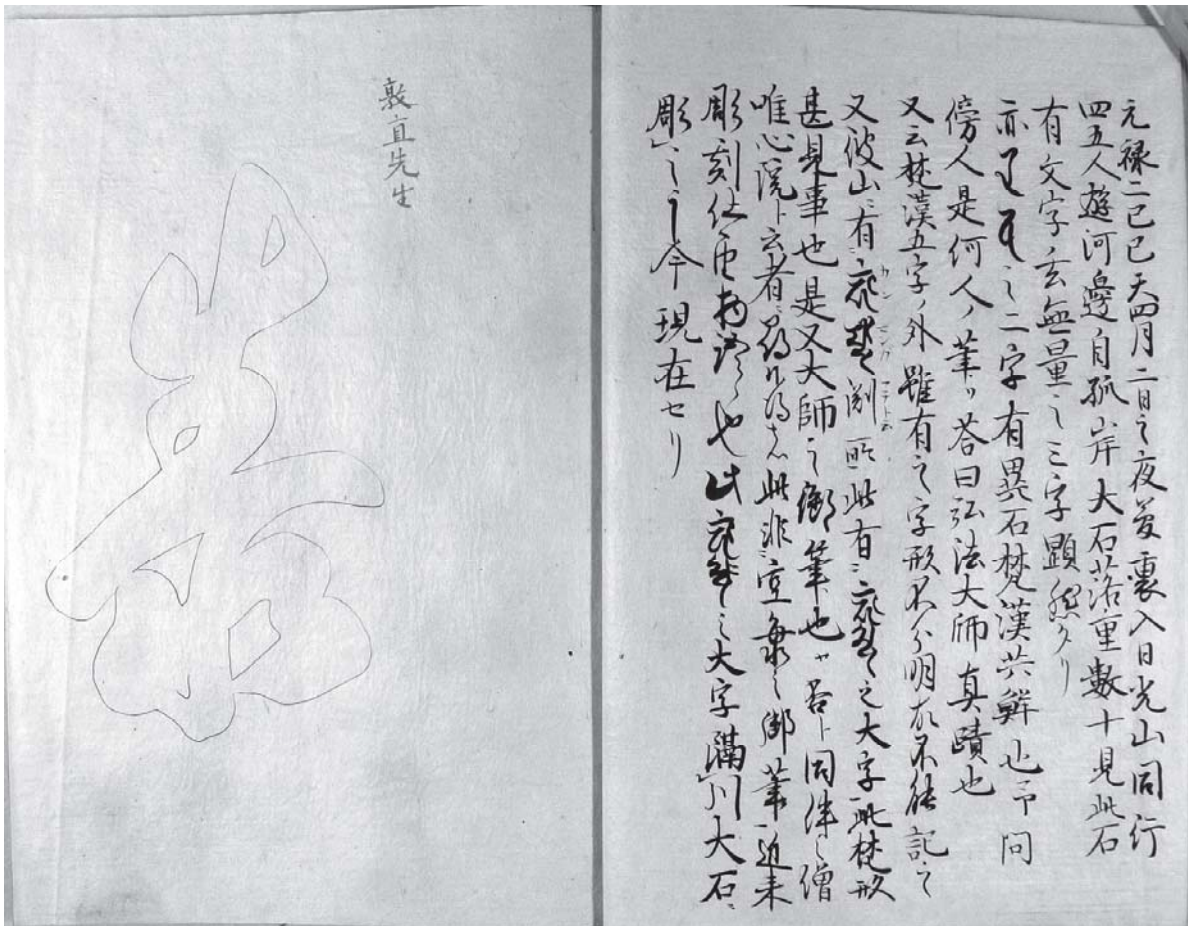
世尊寺三十二

筑後国月光院（後に蓮台院）御井寺（三井寺とも）第五十代座主・寂源（一六三〇—一九六）の文字の双鉤を謄写したるもの。寂源は京都賀茂社の神官・藤木甲斐守敦直（一五八二—一六四九）の次男で、松尾芭蕉（一六四四—一六九四）の『猿蓑』に収められた俳文「幻住庵記」に「筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが嚴子にて、此たび洛にのほりいまそかりけるを、ある人をして額を乞ふ。いとやすやすと筆を染て、幻住庵の三字を送らるる。頓て草庵の記念となしぬ」と記される能筆であった。本書の後半は藤木敦直の文字を同じく双鉤で謄写する。

写本一冊。表紙は淡黄色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「寂源僧正夢想之文字」世尊寺卅二と直書きされる。内題は「寂源僧正夢想之文字」（扉題）と記される。冒頭に

「寂源僧正（朱）夢想之文字」と記した後に「玄」「無」「量」「イ」「ア」を半葉に一文字ずつ書き、その末に、「元禄二己巳天四月二日之夜、夢裏入日光山同行四五人、遊河邊、自孤岸大石落重數十、見此石有文字、玄無量之三字顯然タリ。亦「イ」「ア」之二字有異石。梵漢共鮮也。予問傍人、是何人ノ筆ソ。答曰、弘法大師真蹟也。又云、梵漢五字ノ外、雖有之字形不分明、故不能記之。又、彼山二有「イ」「ア」、測所、此有之「イ」「ア」之大字、此梵形甚見事也。是又大師之御筆也。否ト同伴之僧唯心院ト云者ニ尋候得者、此非空海之御筆。近来彫刻仕候由。物語候也。此「イ」「ア」之大字、隔川大石ニ彫之、于今現在セリ」と文字の由来を書く。次いで「敦直先

生」と朱書され、双鉤の謄写が続く。

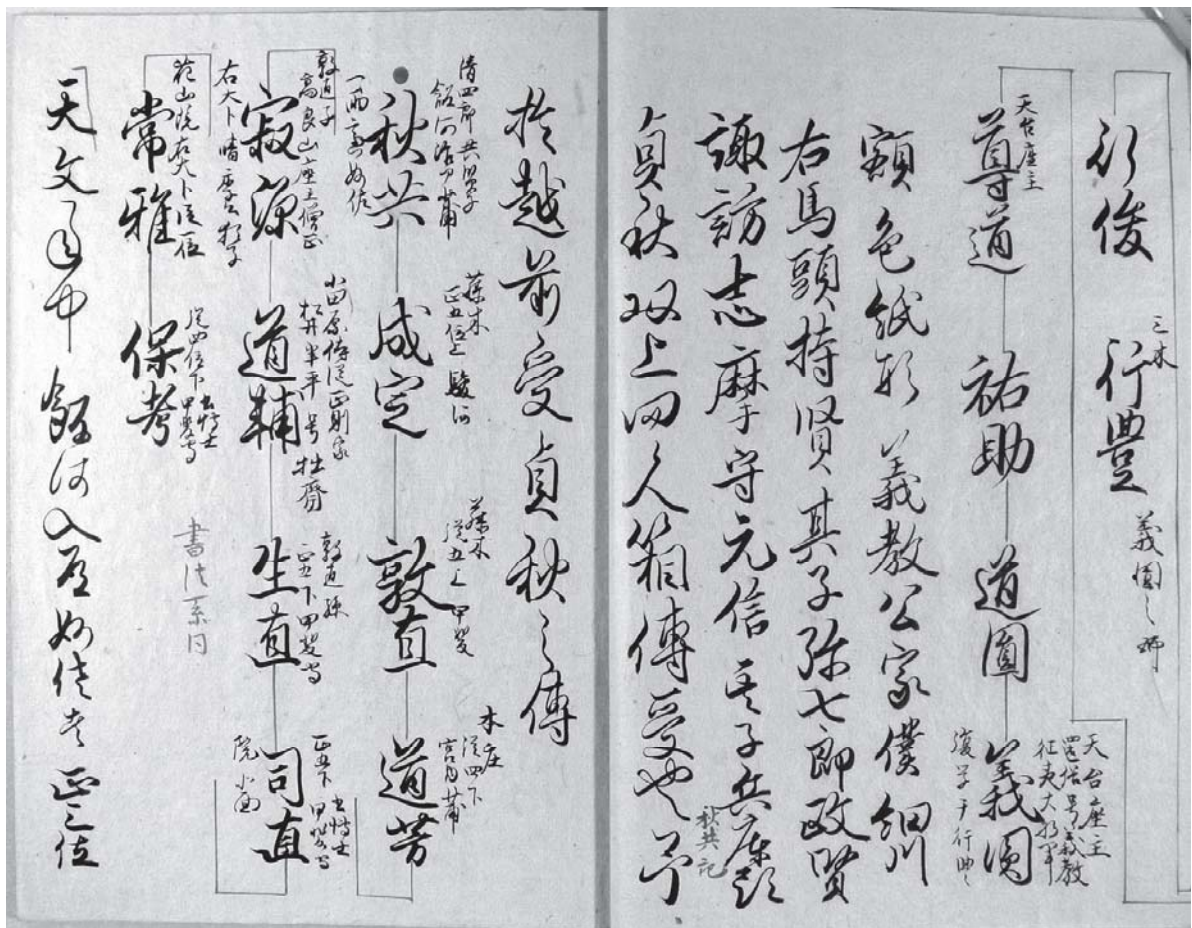


書博士・岡本保考（一七四九〜一八一八）の著とされる入木道伝書。

藤原行成を祖とする世尊寺流の略系図を載せる。その後には飯河秋共（生没年未詳）を筆頭に、藤木成定・敦直に続き、書博士・保考までの書法の系図を示す。その他、勅筆様や青蓮院、持明院家などについて言及する。末尾には、武家之御旗事、額について記されている。

写本一冊。表紙は藍色（無紋）の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は藍の打曇の料紙に「世尊寺家略系以下之事 卅三」と墨書され、表紙左肩に貼付される。内題は「世尊寺家略系以下事」（扉題）と記される。巻尾には、「寛政^{丙辰}年七月從四位下賀茂考 隨筆に」との奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥するかぎり孤本とらしい。世尊寺家の系図は青蓮院蔵「世尊寺現過録」などが存するが、本系図は世尊寺家が没した後の流れも示す。書流として、偽系図等慎重に判断する必要がある。



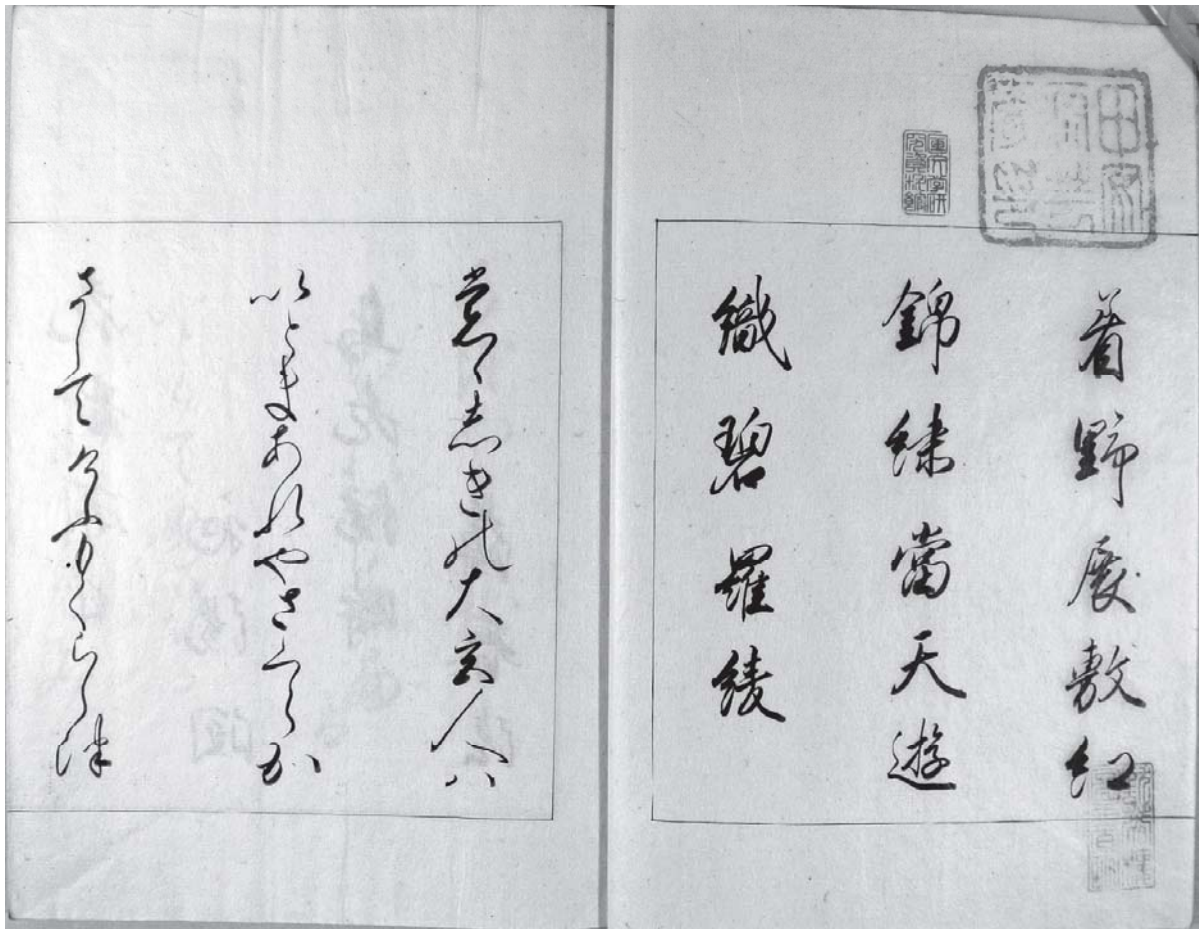
『和漢朗詠集』から春興（二二、二五）、雨（八三、八六）、落花（一二六、一三二）などの漢詩句と和歌を抜き出して散らし書きした色紙形。

乾坤二冊（乾Ⅱ①、坤Ⅱ②）。

写本二冊。表紙は墨色の布目押しの紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に、①「詩歌色紙形 乾^{世尊寺}三十四」、②「詩歌色紙形 坤^{世尊寺}三十五」とそれぞれ直書きされる。内題は、①「詩歌色紙形 乾^{世尊寺}三十四」（扉題）、②「詩歌色紙形 坤^{世尊寺}三十五」とそれぞれ記される。乾冊の末尾に、色紙形の枠線を墨書し、「依後宇多院勅命、祖父経朝卿以家法被奉調進色紙形。撰不可出書窓之外者也。藤原行尹」と記す。

奥書によれば、後宇多天皇（一二六七～一三二四）の勅命を受け、世尊寺経朝（一二二五～七六）が家伝の色紙形を調進したものの。この識語の記録者の行尹（一二八六～一三五〇）は、世尊寺家十二代。坤冊末尾には、「依主上勅詔以家傳法令染筆奉進上之控也。享祿元年（一二二八）十二月諫議大夫行季」の本奥書がある。これも、奥書によれば、本書自体は、後奈良天皇（一四九六～一五五七）の命を受けて世尊寺行季（一四七六～一五三二）が進上した家伝の色紙形の手控えに基づく。

伝本は、祐徳稻荷神社中川文庫などに所蔵される。小松氏も架蔵資料を紹介するが同書か。⁽¹⁵⁾

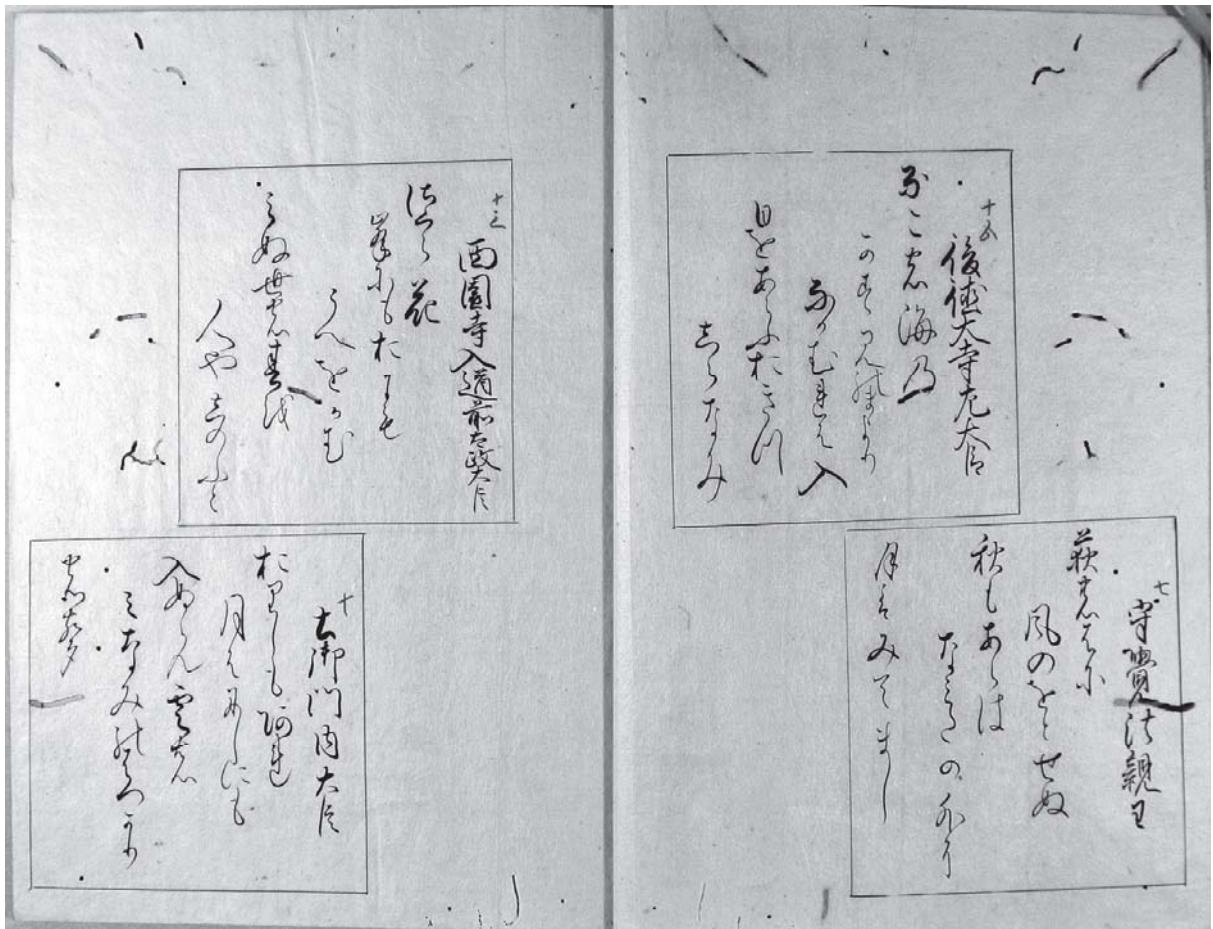


世尊寺三十七

『新三十六歌仙』（『日本歌学大系別六』所収の「三一新三十六歌仙〔丙〕」、底本は寛文元年版本）を色紙に記した色紙形。奥書によれば、世尊寺行高の揮毫した色紙形による。

写本一冊。表紙は墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「新三十六人哥合世尊寺三十七」と直書きされる。内題は「新三十六人哥合世尊寺三十七（扉題）」と記される。巻尾に、「這新三十六人哥合色紙形者世尊寺行高家傳之法、清水谷實久卿被臨寫之一軸也。更寫取而為傳書順立等追而可令校合者也。文明十八年春三月五日羽林郎將藤基春」と本奥書が記される。

『日本歌学大系別六』所収の『新三十六歌仙』は、「龍田姫風のしらべも声たてつ秋やきぬらむをかの辺の松」（後鳥羽院）から、「おしなべて花のさかりになりにけり山の端ごとにかゝるしら雲」（西行法師）に至る三十六人の和歌各一首を、左右に分けて番えるものだが、本色紙形には、「左」「右」の文字は記されない。また、本書には順徳天皇（一一九七～一二四二）の色紙形から書写されるが、作者名の右肩に数字が朱書されており、その順番が『新三十六歌仙』と一致する。また、十七番目にあたる色紙の作者は「九条前内大臣」と記されるが、朱筆で「十七権大納言基家」「九条良経公六男能書」と記されており、その注記がやはり『新三十六歌仙』と一致する。



36 神前歌仙散形（しんぜんかせんちらしがた） 世尊寺三十八、四十

横長の料紙に、上部に和歌一首、下部に歌仙の上半身を描いた白描絵を描く三十六歌仙の散らし形。世尊寺行俊本系と称されるもの。奥書等は附されない。

写本三冊。表紙は縹色（無紋）の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は紫の打曇の紙に、①「神前歌仙散形世尊寺三十八」、②「神前哥仙散形世尊寺三十九」、③「神前歌仙ちらし形世尊寺四十」とそれぞれ記されて、表紙左肩に貼付される。内題は①「神前哥仙散形世尊寺三十八」、②「神前哥仙散形世尊寺三十九」、③「神前哥仙散形世尊寺四十」とそれぞれ記される（扉題）。

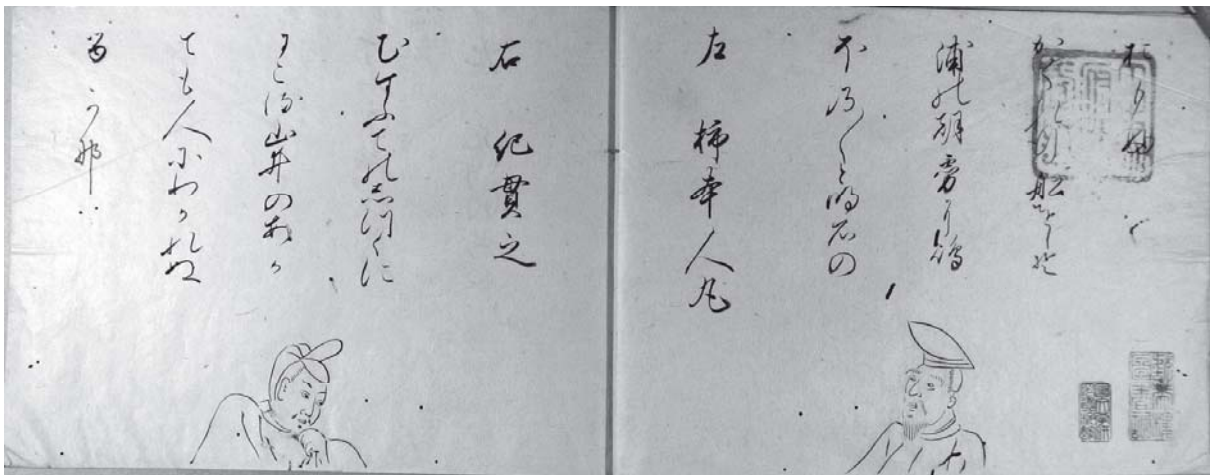
奥書は、①「以這散形為真其故者人丸貫之兼盛中務共以向合也、以其体書者為真以頭面之向書者為行、各従左以順書為草 已下可點見云尔」、②「右行のちらし形也。此ちらし形は世尊寺家の法にて尊圓親王御染筆ありしを基定卿摸しをき玉ひし也。此圖は探幽画く所にして信実朝臣の形也。其躰にかまはず面のむきたる方より書は行の法と也。此圖には正しく合り。画工によりてまちくによて家くの事古法にかなひとふとさき事信しおもふへし。日光 東照宮尊前哥仙の體もかくのことし。是は前東叡山一品公遵大王より天明二年九月八日御手つから拝借し奉り 宸筆後水尾の御讚草の形 画像共に御ゆるしをかうふりうつしをき深くおさむ。誠に千載不朽重んしたふとひふかく秘し猥になすへからさるといふ。世尊寺入木皆傳源尹祥誌之」、③「這三十六人哥合は建保年中順徳院圖繪

等御潤色在て信實朝臣にゑかゝしめ玉ひ、おほち行能卿に讚を書しめ給ひて諸社の寶殿に掲しめ玉ふ中にも、亀かをか鶴かをかは宸筆をそめられし。しかしより此圖影を當家相承して家傳とす。しかはあれと勅ありて此散かたは猥に書へからさるの仰せあり。みこ奉るならては書玉はず。草の散しかたと名つく圖画の體のむき合彼是習ある事也。 徳治二年

卯月廿五日 三位藤経尹書之「隨宣樂院宮准三宮公遵大王は中御門院第二皇子享保七年に降誕ましまして東叡山をしろしめされ、御退山の後御上京ましまし若宮御得度御戒師などのゆへか、安永五年の春御下向の砌、後桃園帝より入木道灌頂御傳受あらせられ、廣橋儀同よりかれこれきかせられしかとも、思召にはあらましのよしにつき天明元年五月廿日鶴川筑後守奉りにて仰下され、翌廿一日参殿して辻隠岐守をして申上る時に御座の間へ召せられ御児まで御退け被遊仰に曰、入木道御皆傳遊はずとまうせともあらましの御事故額法よりくはしく申上へきの御意也。爰にいたりて可秘にあらされは委細言上し奉る。其後神前歌仙の形真行の躰を可請上むねにつき則□し奉る。夏八月の比より尹祥所勞にて引籠りし中、日光山の哥仙の書躰同画像はうつさせ遊はし、同九月八日尹祥をめし玉ひ仰曰、汝先達て□しよりは悉く書法かはれり。是は御讚は後水尾帝宸筆、画は孝信也。と仰らるゝ尹祥拝見せしに此草の形也。右のおもむきを言上し又禁裏親王の遊はし物の事も言上し、則哥仙傳受の一巻も奉る。同年鶴岡八幡宮上下宮御修道ありし砌、哥仙之指し五枚御直しありし時、寛文の時は上の宮は良怒親王、下の宮は尊純親王、元文の時は公寛親王遊はさる、其御由緒也。天明二ハ公延親王□□□□□□。然

を准后宮其中を遊はされ度思召仰いられ、上下の宮の人丸を遊はさる。皆□□を悲て遊はし給ふ事也。其砌参殿して拜見を仰付られし。上下の宮ともに此人丸の書牒故、又此度も如此に遊はされし。上意のうへ入木道くはしく申候御満足の上意おなしく、行成卿より代くをへ、持明院家傳來議不朽に思召と返々の上意也。あまりのたふとさに此傳書に御意を書付をはりぬ。天明五年弥生上旬再写之 源尹祥」とそれぞれ記される。

同一構図の作例に、宮内庁書陵部に蔵される八条宮智仁親王筆『三十六人歌仙絵入冊子』(桂、三九)、『三十六人歌仙色紙形写』(桂、一一〇九)があり、前者には「以^{世尊寺}行俊卿自筆写之」、後者には「持明院中納言^基入木之一流相伝之時、以家本令書写了。深可蔵箱底者也。慶長四年初冬廿六日、李部(花押)」の奥書がある。



37 卷物三十六人歌合色紙形（まきものさんじゅうろくにんうたあわせしきしがた）
世尊寺四十一

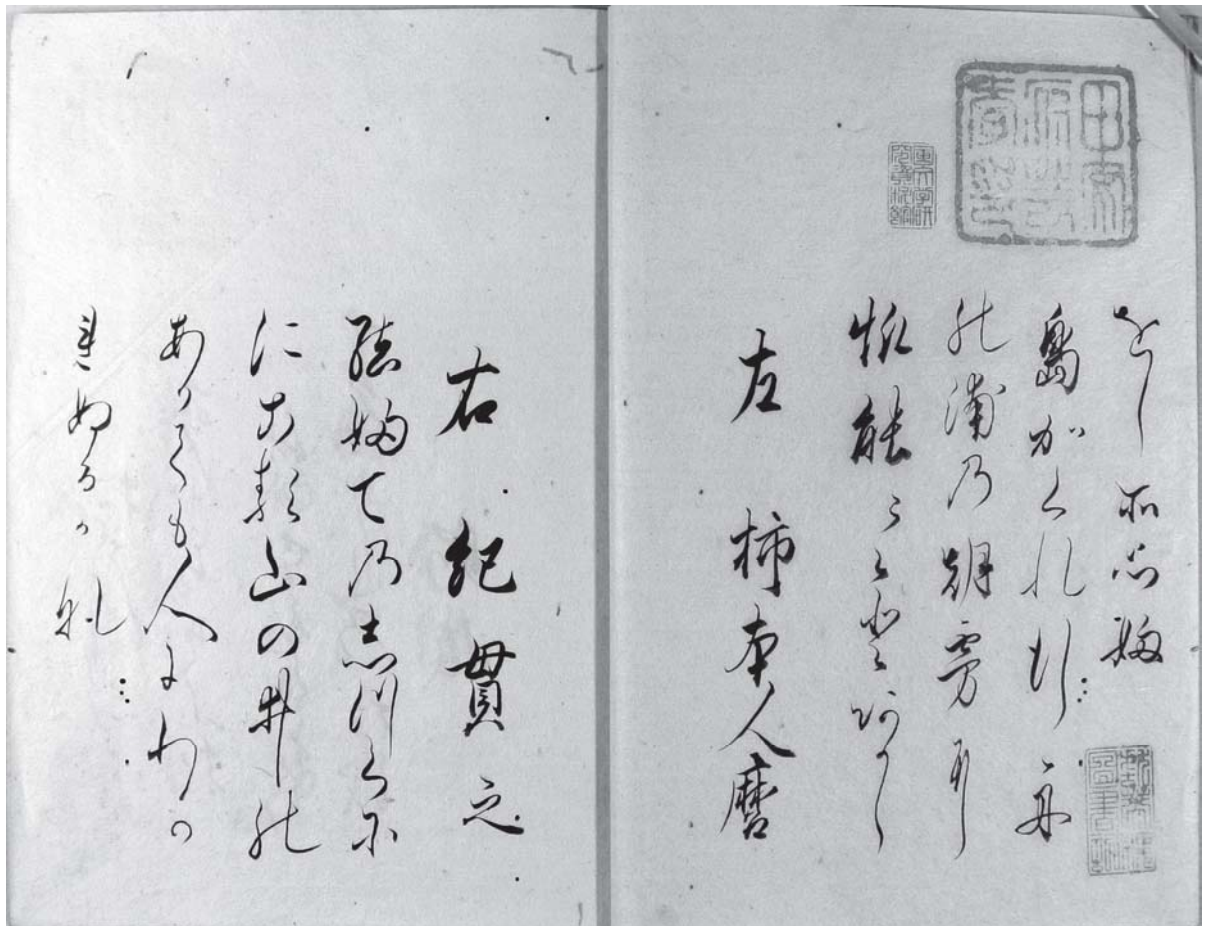
三十六歌仙の散らし形。「右者巻物に書とぎの書法也」の奥書があり、これによれば、卷子に書く際の雛形か。

写本一冊。表紙は墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙で、

本文料紙は薄様。外題は表紙左肩に「三十六人歌合色紙形」卷物 世尊寺 四十一

と直書きされる。内題は「三十六人歌合色紙形」御筆入 世尊寺 四十一（扉題）と

記される。巻尾には、「右者巻物に書とぎの書法也」と本奥書が記される。



兼明親王や空海などに仮託した入木道伝書か。内容を一瞥すると、『麒麟抄』のように様々な内容を集成したものと見られる。

写本一冊。表紙は川面に紅葉の彩色摺り文様の紙表紙、見返しは楮紙で、本文料紙は薄様。外題は「金玉積傳夜鶴抄」世尊寺四十二」との書き題簽が表紙左肩に貼付される。内題は「金玉積傳夜鶴抄上 千金莫傳」

(巻首題)、「金玉積傳問答抄」「金玉積傳翰林源底秘密集 右筆傳次第」

「金玉積傳翰林源底秘密抄」「金玉積傳集兼明親王諸額書次第」「金玉集」

「翰墨使筆次第」なども記される。「金玉積傳夜鶴抄」の末尾に「延久

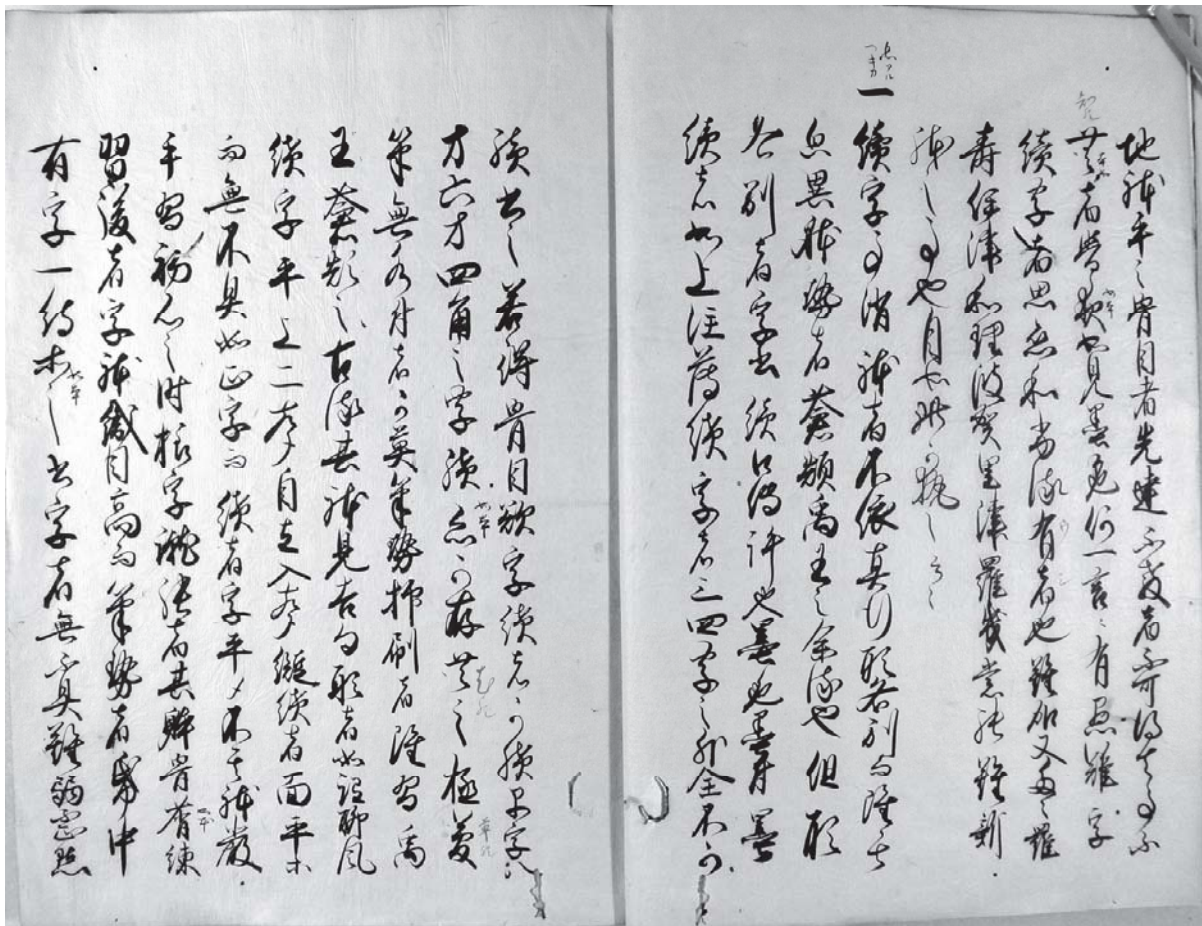
元年二月三日權大納言實名へ在判」、「金玉集」の末尾に「延文元年六月

十八日授之畢」などの本奥書が記されている。本書の巻尾には、「此一巻

見盛氏傳受之記雖然以惡筆書極草故文字無正躰仍而以愚推令写之 寛

永十五年弥生中旬 (花押)」との本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥するかぎり孤本と
思しい。が、今後『金玉積傳集』などとの連関について比較・検討する
必要性がある。

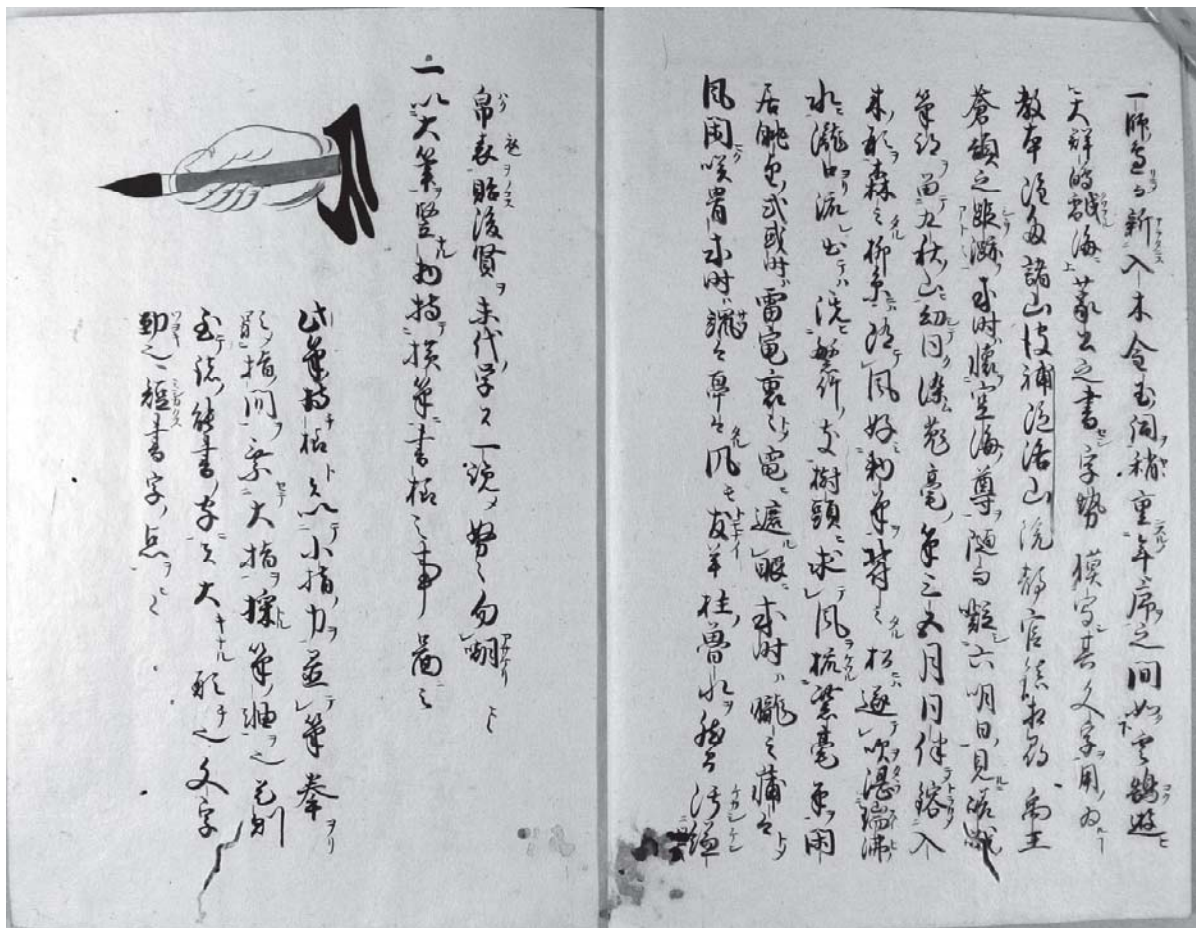


兼明親王に仮託された入木道伝書のひとつ。巻尾に「権大納言行成撰追加」と見られることから、藤原行成が撰者にあてられることもある。

『麒麟抄』との連関が指摘されるとともに、「南北朝以降に成立した伝書を加えて編まれたもの」とされ、江戸時代初め頃の成立と目される。内容は、「金玉積傳」と題して、筆・硯・墨や執筆法に関する故実について記す。中に「烏羽玉問答抄」(世尊寺十五)が取り込まれている。後半には「照陽殿八曲ノ次第」を収める。

写本一冊、もとは二冊であったものを一冊にまとめて書写する。表紙は白茶色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は表紙左肩に「金玉積傳集」世尊寺四十三」と直書きされる。内題は「金玉積傳集」(巻首題)、「金玉積傳 口傳書 前中書王ノ傳」(巻首二行目)と記される他、「烏羽玉問答抄」「烏羽玉問答集畢」「金玉積傳集 末」などと見られる。巻尾には、「天保十年己亥三月十四日寫竟」との書写奥書が記される。

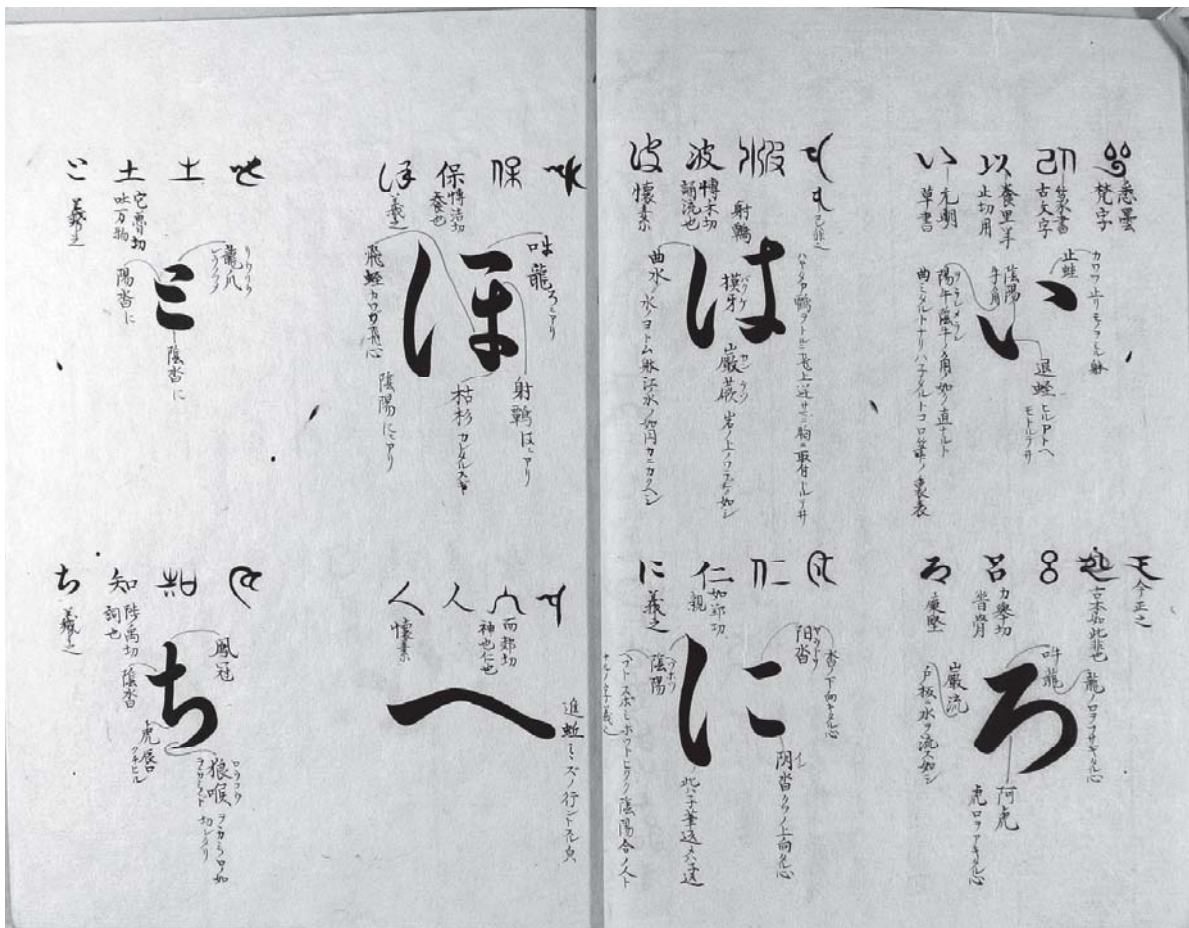
伝本は宮内庁書陵部、内閣文庫、京都大学、立命館大学、早稲田大学などに所蔵される。『続群書類従』と『日本書画苑』に翻刻が収載されるが、それぞれには相違が見える。本書は、『続群書類従』(宮内庁書陵部本)に近似する。



空海に仮託した入木道伝書で、以呂波四十七文字について言及する。以呂波の誕生より、各文字の造形について記し、細かく点画の内容（構造）について説明を付す。悉曇（梵字）・篆書・楷書・草書との比較を示す。

写本一冊。表紙は藍色（無紋）の紙表紙、見返しは本文共紙で、料紙は薄様。外題は藍の打曇紙に「以呂波本源抄 世尊寺 四十四」と墨書された題簽が表紙左肩に貼付される。内題は「愚 校 以呂波本源抄 全」（扉題）と記される。奥書等はない。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥するかぎり孤本と思しい。が、九州大学、京都大学、東北大学（狩野文庫）に所蔵される『以呂波本源』との関係性が考えられようか、今後の精査が期待される。

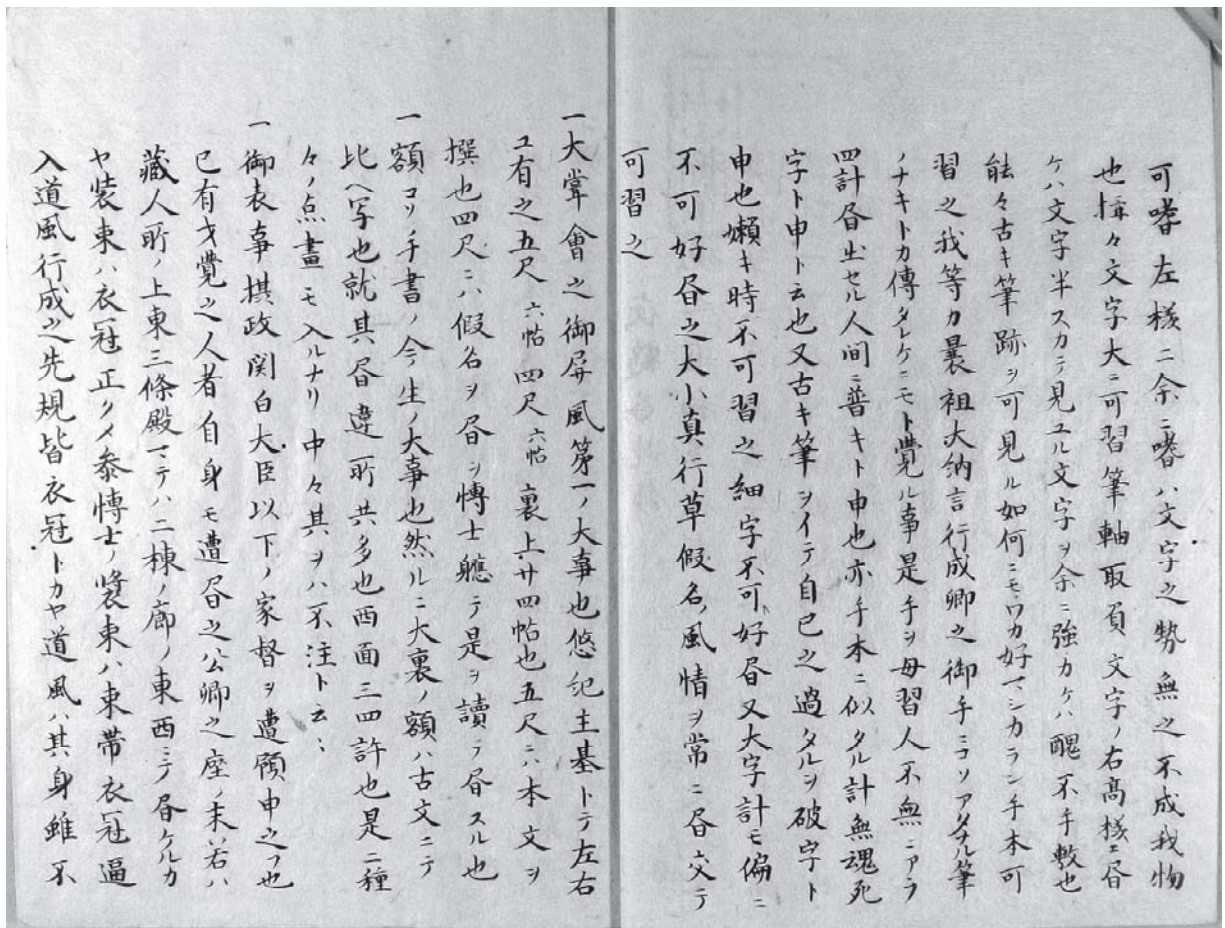


『夜鶴書札抄』（世尊寺十七）と同じ、藤原行能が著した入木道伝書。

伊行著『夜鶴庭訓抄』に倣った構成で、手習の事、大嘗会御屏風の事、額の事、御表の事、御願所の扉の事、年中行事の障子の事、経の事、戒諒の奥の事、外題の事、双紙の事、入木の功と申事、詩の書様の事、灯前の書写の事、雨中の書写の事、墨摺る事、書札の次第の事、上処の事、綸旨院宣国宣の事、紙の置き方、内封外封の事、之し字事、闕字之事、判形之事、立文の事、公方へ申事、文を締めて結ぶ事、内裏の額書人の事、内額書人々の事、額書て有る勸賞所々の事、諸寺額書人の事、悠紀主基屏風書人々の事、賢聖障子略頌云、天下能書得名誉人々事、三賢之聖跡と申事などが記される。

写本一冊。表紙は、藍地（無紋）の紙表紙。見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は表紙左肩に紫の打曇紙に「夜鶴抄 世尊寺 四十五」と墨書された題簽が貼付される。内題は「夜鶴抄」（扉題）と記されるほか、巻首に「夜鶴書札抄」と記される。本文は漢字片仮名交じり文。巻尾に、「此夜鶴抄 葉室頼孝卿 黄門侍郎尊君之雖不出宝庫、子 数日尊公之窺官暇而密々蒙許容而書写之者也、敢而不可外見云々 延宝三乙卯 歳孟陽初五 井蛙軒「寛政辰年加茂書博士之書不慮得写、尤不出窓外者也（花押）」との本奥書が記される。

伝本は諸所に十本程度確認される。『日本書画苑』に翻刻が収載される。



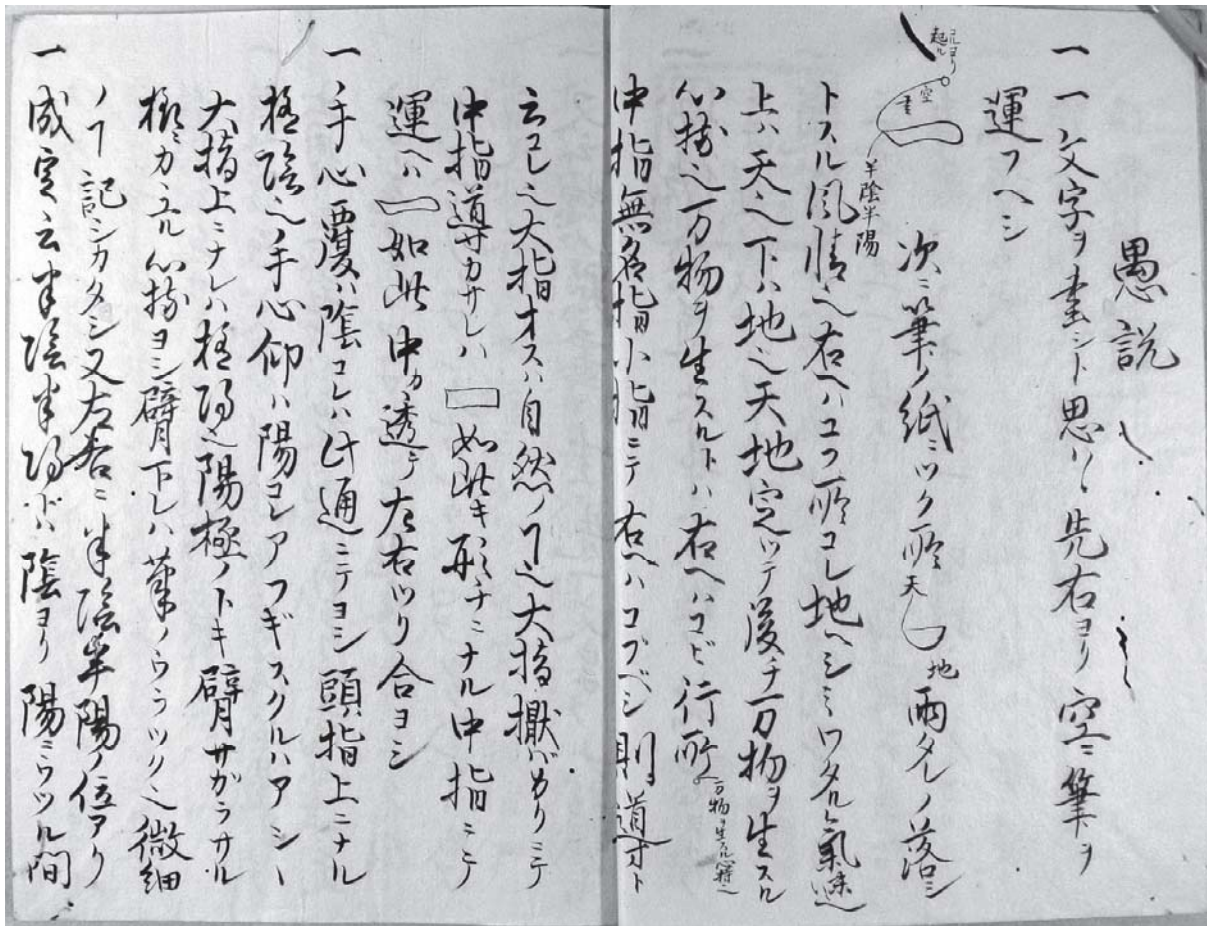
可嗜左様ニ余ニ嗜ハ文字之勢無之不成我物也極々文字大ニ可習筆軸取負文字ノ右高様ニ各ケハ文字半スカテ見ユル文字ヲ余ニ強カケハ醜不手敷也能々古キ筆跡ヲ見ル如何ニモワカ好マシカラシ本可習之我等カ曩祖大納言行成卿之御手ニソアラ筆ヲナキトカ傳タレケニモト覺ル事是手ヲ母習人不無ニアラ四計各止セル人間ニ普キト申也亦手本ニ似タル計無魂死字ト申ト云也又古キ筆ヲイテ自己之過タルヲ破字ト申也頗キ時不可習之細字不可好昏又大字計モ偏ニ不可好昏之大小真行草假名風情ヲ常ニ各々テ可習之

一大嘗會之御屏風第一ノ大事也悠紀主基トテ左右ニ有之五尺 六帖 四尺 六帖 裏上廿四帖也五尺ニ本本文ヲ撰也四尺ニ假名ヲ各々博士聽テ是ヲ讀テ各スル也一額ヲ手書ノ今生ノ大事也然ルニ大裏ノ額ハ古文ニテ比（字）也就其各邊所共多也西面三四許也是二種々ノ点畫モ入ルナリ中々其ヲハ不注ト云、一御表事棋政関白大臣以下ノ家督ヲ遺願申之フ也已有文覺之人者自身モ遺各之公卿之座ノ末若ハ藏人所ノ上東三條殿マテハ二棟ノ廊ノ東西ニテ各ケルカヤ装束ハ衣冠正クテ泰博士ノ装束ハ束帯衣冠遍入道風行成之先規皆衣冠トカヤ道風ハ其身雖不

賀茂保考著の入木道伝書。冒頭で「十二点」の重要性について説き、その後「愚説」を展開するが、藤木成定(一五五七〜一六三五)、本庄道芳(一六〇四〜一六六八)、寂源らの言を引きながら点画や執筆法など初学者の手習いに必要と思しい項目を挙げ言及する。

写本一冊。表紙は墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、本文料紙は薄様。外題は表紙左肩に「初心覚悟記」世尊寺四十七」と直書きされる。内題は「初心覚悟記」(扉題)と記される。巻尾に、「丙辰二月 書博士保考誌」「丁巳二月寫之 資寅」と本奥書が記される。

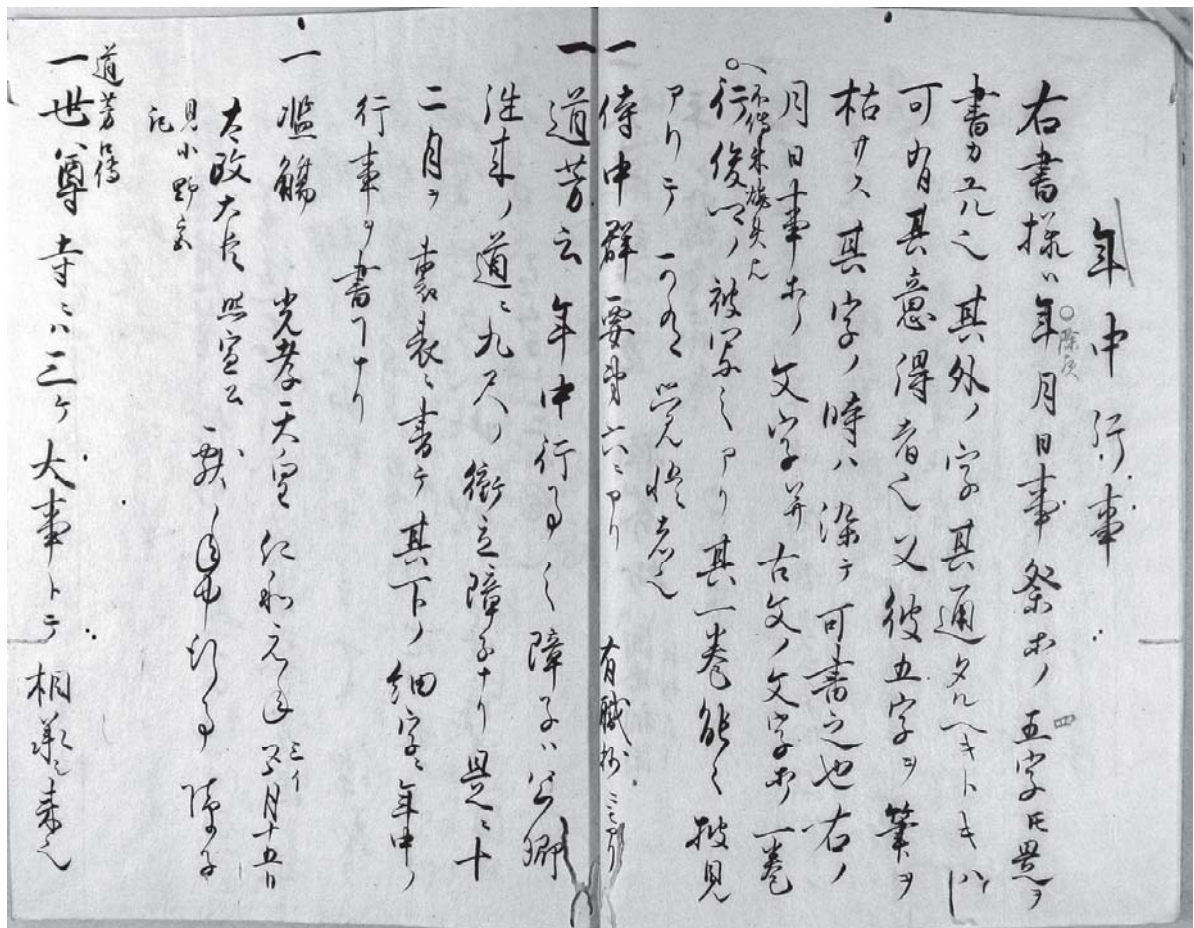
伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥する限り、高山市郷土館に「岡本先生 入木道相伝書」(内題は「入木道 初心覚悟記」)として所蔵が確認される。が、内容に異同が見られる。



藤木成定の口伝を敦直が聞き書きしたもの。額・賢聖障子・年中行事・具足櫃前字・色紙形・懐紙・下馬・下乗・書名号観念・万物感応・當之事・陰陽之事・三体之事について、それぞれ項目を挙げ記される。

写本一冊。表紙は墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、本文料紙は薄様。外題は表紙左肩に「入木秘記部類 世尊寺 四十八」と直書きされる。内題は「入木秘記部類（扉題）」と記される。巻尾に、「寛永十七年成定之口決敦直聞書ナリ 寛政九々月十九日 保考写之」と本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥するかぎり孤本とらしい。



「十二点画」(執筆法、使筆法)の注釈書で、原文を転記しつつ、割書の解説や図解を付す。

写本一冊。表紙は墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、

本文料紙は薄様。外題は表紙左肩に「點畫書法」世尊寺四十九」と直書き

される。内題は「點畫法秘訣」(扉題)と記されるほか、「執筆法」(巻首

題)、「本庄宮内少輔道芳物語」寂源僧正」などと記される。奥書は、「執筆法」

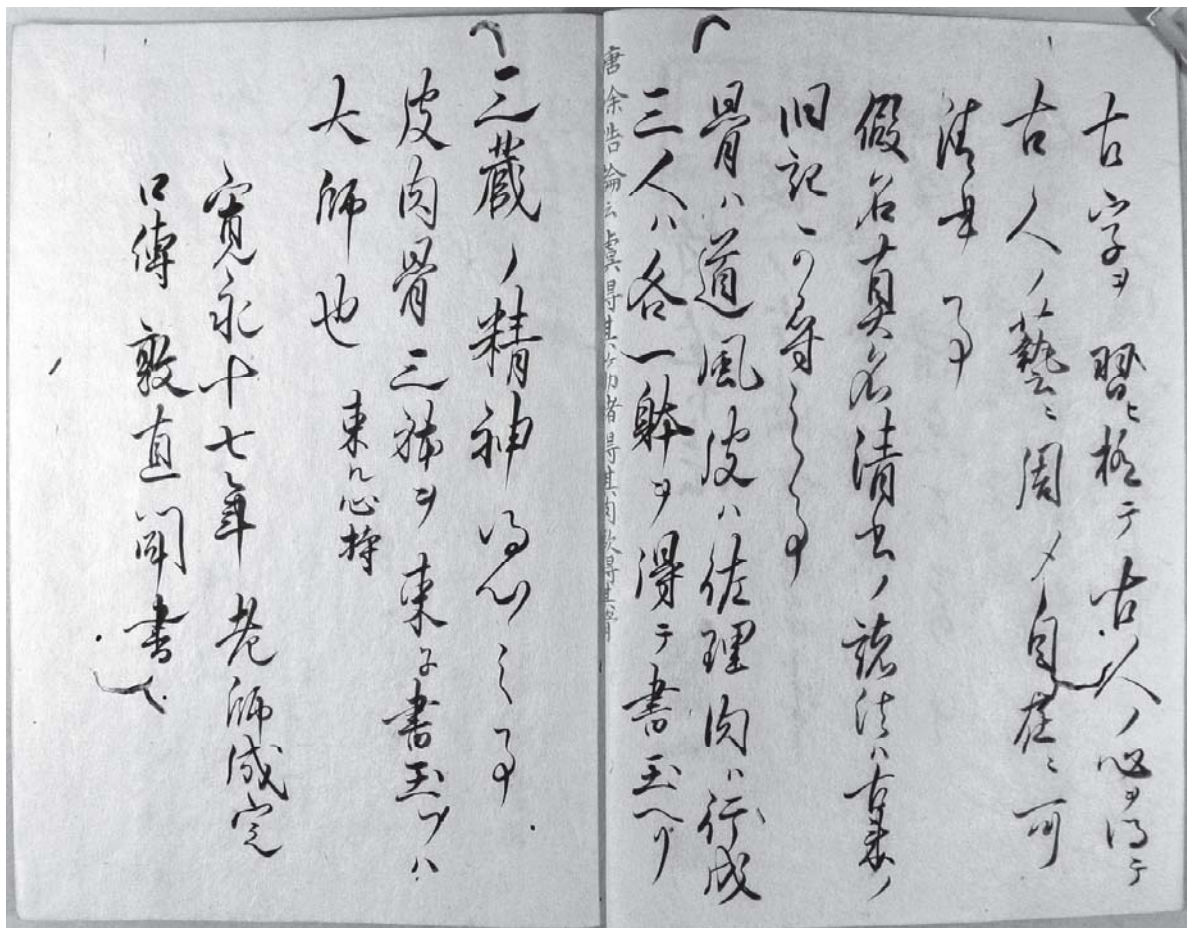
の末尾に「寛永十七年老師成定口傳 敦直聞書」、「道芳物語」末尾に「丁

巳十月二日 賀茂縣主保考上」とそれぞれ記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥する限り、孤本と

思しい。「十二点画」の伝本については、「十二点画」(世尊寺一)で記し

たが、「執筆法」、「使筆法」の伝本はともに京都大学に所蔵が確認される。



升形（正方形）に製本された『朝忠集』の模写。

写本一冊で、表紙は墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、

本文料紙は薄様。外題は表紙左肩に「朝忠中納言集」世尊寺「五十」と直書

きされる。巻首に「朝忠中納言集」と定家様で記した題簽を模写する（歌集本文部分の筆跡は定家様ではない）。奥書等は附されない。

『朝忠集』の伝本は次のように類別されている。

第一類（1）藤田美術館蔵小堀本、冷泉家時雨定文庫本、書陵部蔵（五

〇一・一四四）「七十二首を収める」

（2）正保版歌仙歌集本など「七十二首を収める」

第二類（1）本願寺本三十六人集本など「六十首を収める」

（2）冷泉家時雨亭文庫蔵資経本、書陵部蔵本（五一〇・一二

冷泉家本の転写）「八十四首を収める」

本書は、第一類の伝本の一つ。宮崎あや氏¹⁹によれば、第一類（2）は

尊経閣文庫本など十九本の伝存が確認されているが、本書は第一類のな

かでも、（2）正保版歌仙歌集に近い（例えば、三十番歌詞書・少将にて

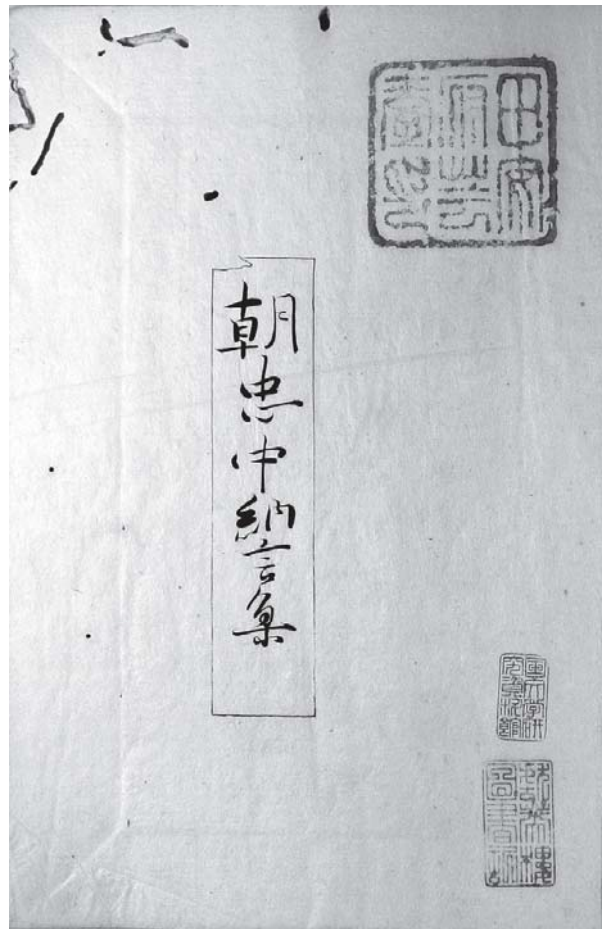
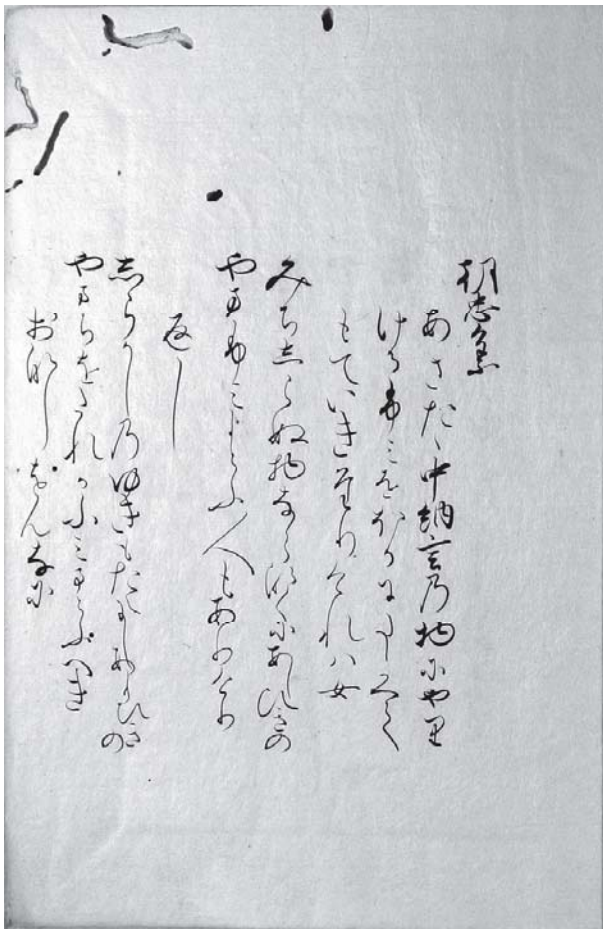
（書陵部本）——中将にて（歌仙歌集）——中将（本書）のような異同があ

る）。歌仙歌集本は巻尾に「借請右大弁入道之本。建長六年（一二五四）

十二月廿四日^{中刻}書写之。同夜於灯下校合了。在判」の本奥書を附すが、

それに対応する写本の報告はない。模写ではあるが、本書などは歌仙歌

集本の奥書の時代に近い書風を模して書写されており、注意される。



〔注〕

- (1) 国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究』日本書誌学大系94（青裳堂書店二〇〇六年）、文庫形成については、松方冬子「田安德川家蔵書の伝来について」（前掲書、四七一～四八八頁）、同「田安家蔵書の伝存について」（国文学研究資料館編『田安德川家蔵書と高乗勲文庫―二つの古典籍コレクション』古典講演シリーズ9、臨川書店、二〇〇三年）。
- (2) 新井榮蔵著『書』の秘伝―入木道の古典を読む』（平凡社、一九九四年）、『田藩文庫目録と研究』日本書誌学大系94（青裳堂書店、二〇〇六年）、浅田徹「特集 越境する文学・語学研究 表層の秘義―入木道伝書を読む 試み」（『国文学研究』一五三・一五四号、二〇〇八年三月）など。
- (3) 武井和人「薬師寺蔵「持明院家歌道書道聞書伝書」略目録（稿）」（『研究と資料』第五九輯、二〇〇八年七月）、同『中世古典籍之研究―どこまで書物の本姿に迫れるか―』新典社研究叢書277（新典社、二〇一五年）に再録。入木道目録の略書誌を転載する。

A 53

 - ① 木道書籍目六 ② 15丁 ③ 20.4 × 26.8 ④ 大和綴 ⑤ 1冊 ⑥ 写
 - ⑦ 江戸後期 ⑧ 外題の「木」は傍書、本文に朱書あり、13才より公風の識語あり
- (4) 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」
(<http://basel.nijl.ac.jp/~koten/about.html>)
- (5) 金子馨「国文学研究資料館田安德川家旧蔵『手習口伝』について」（『国文学研究資料館紀要』第四十三号、二〇一八年三月）
に影印される。
- (6) 「本朝書籍目録外録」は、『日本書目大成』第一卷（汲古書院、一九七九年）
- (7) 『麒麟抄 抄釈』（春日井道風記念館、二〇〇〇年）
- (8) 金子馨「田安德川家田藩文庫蔵『烏羽玉問答集 教長口伝抄』について」（『語文』第百五十輯（二〇一四年十二月））
- (9) 田中槐堂「青蓮院御蔵『夜鶴庭訓抄』に就いて」（『帝塚山学院大学研究論集』第六号、一九七一年十二月）、『夜鶴庭訓抄』（便利堂、一九七六年）
- (10) 永由徳夫「『夜鶴庭訓抄』の研究―本邦濫觴期書論への照射―」（『青山杉雨記念賞学術奨励論文選』第三回、二〇〇〇年十二月）、同「校本『夜鶴庭訓抄』(1)」（『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第六十号、二〇一一年三月）、同「校本『夜鶴庭訓抄』(2)」（『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第六十一号、二〇一二年三月）ほか。
- (11) 川瀬一馬「建武本宰相入道教長口伝 解説並びに譯文」（『阪本竜門文庫複製叢刊』9、阪本竜門文庫、一九七〇年）、『日本書誌学之研究』（講談社、一九七一年）、『続日本書誌学之研究』（雄松堂書店、一九八〇年）などに龍門文庫所蔵本が翻刻される。
- (12) 伝本については、金子馨「『才葉抄』の伝本について―諸本の書誌と各系統の特徴―」（『語文』第百五十二輯、二〇一五年六月）。『群書類従』所収本の校本は、同「『才葉抄』類従本系統の伝本について―附校本―」（『語文』第百五十五輯、二〇一六年六月）ほか。
- (13) 『日本思想大系』二十三（岩波書店、一九七三年）、岡籬校『入木道三部集

附・本朝能書伝』岩波文庫七七九（岩波書店、一九三二年）などに類従本の翻刻が所収される。また、小松茂美著『日本書流全史』（講談社、一九六五年）には北野克氏蔵本が翻刻される。

515K128540)による研究成果の一部です。

(14) 伊藤緑苔著『入木抄の研究』（中部日本新聞社、一九六五年）

(15) 小松茂美著『日本書流全史』（講談社、一九六五年）

(16) 金子馨「国文学研究資料館田安德川家旧蔵『入木道抄』について」『若木書法』第十七号、二〇一八年三月）

(17) 金子馨「国文学研究資料館田藩文庫蔵『十三箇条之記』について―附翻刻―」『汲古』第六十九号、二〇一六年二月）

(18) 一戸涉「近世入木道書の生成と伝播―センチュリー文化財団蔵『松平定信旧蔵入木道書一式』『弘法大師書流系図』とその周辺」『斯道文庫論集』第四十九号、二〇一五年三月）

(19) 春名好重「金玉積傳集」『群書解題』第八卷、続群書類従完成会、一九六一年）

(20) 宮崎あや「実相院蔵『朝忠中納言集』翻刻・解題」『同志社国文学』第五十七号、二〇〇二年十二月）

〔付記〕

本稿の「田安德川家旧蔵入木道伝書一覽（世尊寺篇）」の作成、及び校正など編集作業において、石丸真弥氏（資料整理等補助員）のご助力をいただきました。ここに記して、御礼申し上げます。

本稿は、JSPS科研費（挑戦的萌芽研究 海野圭介 15K12854・

田安徳川家旧蔵入木道伝書一覽（世尊寺篇）

通番	分類	書名	書名のみ	編著者	装丁	数量	寸法 (縦×横cm)	丁数 (紙数)	印記 (蔵書印)	請求 番号	目録 番号
1	世尊寺1	十二点画	じゅうにてんかく		袋綴	1	26.7×19.0	16	B C	15-708	630
2	世尊寺2	十二点画抄	じゅうにてんかくしょう		袋綴	1	26.7×19.0	21	B C	15-709	631
3	世尊寺3・4	筆法八十一勢	ひつぽうはちじゅういちぜい		袋綴	2	26.7×19.0 26.7×19.0	6 39	B C	15-710-1 15-710-2	632
4	世尊寺5	前中書王御抄	さきのちゅうしよおうみしょう	兼明親王著か	袋綴	1	26.7×19.0	20	B C	15-711	633
5	世尊寺6	昭陽殿八曲	しょうようでんはつきよく	藤原佐理著か	袋綴	1	26.7×19.1	7	B C	15-712	634
6	世尊寺7	入木道百日執行法	じゅぼくどうひやくにちしつぎょうほう	藤原行成著か	袋綴	1	26.6×19.0	9	B C	15-713	635
7	世尊寺8・9	入木初学式 三十六法	じゅぼくしよがくしきさんじゅうろっぽう	世尊寺行尹著	袋綴	1	26.7×19.0	10	B C	15-714	636
8	世尊寺10	三十六法口伝	さんじゅうろっぽうくでん		袋綴	1	26.7×19.0	5	B C	15-715	637
9	世尊寺11	世尊寺殿口伝	せそんじどのくでん		袋綴	1	26.7×19.0	10	B C	15-716	638
10	世尊寺12	奥秘書	おくひしよ		袋綴	1	26.7×19.0	11	B C	15-717	639
11	世尊寺13	手習口伝	てならいくでん		袋綴	1	26.7×19.1	10	B C	15-718	640
12	世尊寺13上・中・下	麒麟抄	きりんしょう	藤原行成著か・藤原基規校	袋綴	3	26.8×18.9	47 38 35	B C	15-719-1 15-719-2 15-719-3	641
13	世尊寺14	世尊寺新製七十二点并字形十箇之伝	せそんじしんせいしちじゅうにてんならびにじけいじつかのでん		袋綴	1	26.9×19.1	20	B C	15-720	642
14	世尊寺15上	鳥羽玉靈問答抄	うばたまれいもんどうしょう	藤原行成著か	袋綴	1	26.9×19.1	9	B C	15-721-1	643
	世尊寺15下	鳥羽玉靈問答抄	うばたまれいもんどうしょう	藤原行成著か	袋綴	1	26.9×19.1	11	B C	15-721-2	644
15	世尊寺16	夜鶴庭訓抄 才葉抄	やかくていきんしょう/さいようしょう	藤原伊行著 藤原教長著	袋綴	1	26.6×19.0	23	B C	15-722	645
16	世尊寺17	夜鶴書札抄	やかくしよさつしょう	世尊寺行能著	袋綴	1	26.6×19.0	21	B C	15-723	646
17	世尊寺18	入木抄	じゅぼくしょう	尊円法親王著	袋綴	1	26.8×19.0	23	B C	15-724	647
18	世尊寺19	入木篇目集追加	じゅぼくへんもくしゅうついか	世尊寺行尹著	袋綴	1	26.8×19.0	5	B C	15-725	648
19	世尊寺20	入木道初学次第	じゅぼくどうしよがくしだい		袋綴	1	26.7×18.9	5	B C	15-726	649
20	世尊寺21	十二点	じゅうにてん		袋綴	1	26.7×19.0	7	B C	15-727	650
21	世尊寺22	点画写	てんかくうつし		袋綴	1	26.7×19.0	26	B C	15-728	651
22	世尊寺23	入木用筆伝	じゅぼくようひつでん		袋綴	1	26.6×18.9	33	B C	15-729	652
23	世尊寺24	筆法永字八法	ひつぽうえいじはっぽう		袋綴	1	26.9×19.0	13	B C	15-730	653
24	世尊寺25	入木抄	じゅぼくしょう	尊円法親王著	袋綴	1	26.8×19.1	24	B C	15-731	654
25	世尊寺26	やつしの抄	やつしのしょう	世尊寺行房・行尹等著	袋綴	1	26.8×19.0	8	B C	15-732	655
26	世尊寺27	入木道抄	じゅぼくどうしょう	藤原行成著か	袋綴	1	26.6×18.9	17	B C	15-733	656
27	世尊寺28	十三箇条之記	じゅうさんかじょうのき	世尊寺行房・行尹著	袋綴	1	26.6×19.0	9	B C	15-734	657
28	世尊寺29	入木抄	じゅぼくしょう	尊円親王著	袋綴	1	26.7×19.0	24	B C	15-735	658
29	世尊寺30	色紙かた	ししがた	世尊寺行高著	袋綴	1	26.7×19.0	12	B C	15-736	659
30	世尊寺31	悠紀主基本文色紙形草案	ゆきすきほんもんしきしがたそうあん		袋綴	1	26.7×19.0	15	B C	15-737	660
31	世尊寺32	寂源僧正夢想之文字	じゃくげんそうじょうむそうのもじ		袋綴	1	27.0×19.1	11	B C	15-738	661
32	世尊寺33	世尊寺家略系以下之事	せそんじけりやつけいいかのこと		袋綴	1	26.9×19.1	8	B C	15-739	662
33	世尊寺34・35	詩歌色紙形	しいかししがた	藤原経朝著	袋綴	2	26.7×19.0 26.7×19.0	21 22	B C	15-740-1 15-740-2	663
34	世尊寺36	つぎしきし	つぎしきし		袋綴*	1	20.6×29.4	38	B C	15-741	664
35	世尊寺37	新三十六人歌合	しんさんじゅうろくにんうたあわせ	世尊寺行高著	袋綴	1	26.7×19.0	11	B C	15-742	665
36	世尊寺38～40	神前歌仙散形	しんぜんかせんちらしがた	後水尾天皇原書 藤原信実原画 (狩野探幽画の写)	袋綴*	3	19.1×26.8	21 22 24	B C	15-743-1 15-743-2 15-743-3	666
37	世尊寺41	巻物三十六人歌合色紙形	まきものさんじゅうろくにんうたあわせししがた		袋綴	1	26.7×18.9	21	B C	15-744	667
38	世尊寺42	金玉積伝夜鶴抄	きんぎよくせきでんやかくしょう		袋綴	1	30.8×22.5	40	B C	15-745	668
39	世尊寺43	金玉積伝集	きんぎよくせきでんしゅう	兼明親王著か	袋綴	1	26.9×19.0	44	B C	15-746	669
40	世尊寺44	以呂波本源抄	いろはほんげんしょう		袋綴	1	26.9×19.2	9	B C	15-747	670
41	世尊寺45	夜鶴書札抄	やかくしよさつしょう	世尊寺行能著	袋綴	1	26.9×19.1	14	B C	15-748	671
42	世尊寺46	墨法集要和解抜書	ぼくほうしゅうようわけぬきがき		袋綴	1	26.7×18.9	20	B C	15-749	672
43	世尊寺47	初心覚悟記	しよしんかくごき	加茂保考著	袋綴	1	26.7×19.0	7	B C	15-750	673
44	世尊寺48	入木秘記部類	じゅぼくひきぶるい		袋綴	1	27.1×18.9	13	B C	15-751	674
45	世尊寺49	点画書法	てんかくしよほう		袋綴	1	26.7×18.9	16	B C	15-752	675
46	世尊寺50	朝忠中納言集	あさただちゅうなごんしゅう	藤原朝忠著	袋綴	1	26.7×19.0	15	B C	15-753	676

※折紙双葉装